

石川県埋蔵文化財情報

第 4 号

巻頭カラー写真 指江B遺跡・ブッシュウジヤマ古墳群

平成11(1999)年度下半期の発掘調査調査部長 小嶋芳孝..(1)

発掘調査略報

徳丸遺跡	(4)
大町ダイジングウ遺跡	(6)
四柳白山下遺跡	(8)
指江遺跡・指江B遺跡	(10)
加茂遺跡	(14)
梅田B遺跡	(16)
観法寺古墳群	(20)
観法寺谷遺跡	(22)
金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査	(24)
金沢城跡	(28)
橋爪ガンノアナ遺跡	(32)
大長野A遺跡	(34)
ブッシュウジヤマ古墳群	(36)
八日市地方遺跡	(38)
小松城跡	(40)
矢田野遺跡・矢田野古墳群	(42)
柴山出村遺跡・柴山貝塚	(44)
弓波遺跡	(46)
九谷A遺跡	(48)

平成11(1999)年度下半期の遺物整理作業企画部整理課..(50)

調査・研究報告

田鶴浜町三引遺跡の貝塚出土品整理作業について	金山哲哉..(52)
輪島市時国古屋敷遺跡・補遺	安 英樹..(54)
九泉	田村昌宏..(64)
畝田・寺中遺跡第一号木簡覚書	和田龍介..(一)

2000年8月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

指江B遺跡



四面庇付建物 (SB03)



床板及び蹴^け放し



2号墳埋葬施設検出状況



2号墳埋葬施設床面検出状況

平成11(1999)年度下半期の発掘調査

調査部長 小嶋芳孝

平成11(1999)年度の調査は、当初に33件・100,840㎡を県から受託してスタートした。しかし、工事計画の変更や遺跡面積の縮小などにより、実績では32件・94,610㎡の事業量となった。内訳は、建設省事業に伴う調査が7件・32,900㎡、鉄建公団が2件・6,000㎡、農用地整備公団が1件・350㎡、県営ほ場整備が9件・10,150㎡、県土木部が12件で43,110㎡、県教育委員会が1件・2,100㎡である。

大町ダイジグウ遺跡では、室町から江戸時代の池跡、頻繁に建替えが行われた建物跡、井戸などが検出されている。今回の調査区には式内社余喜彦神社の旧社地という伝承があるが、古代の遺構は検出されていないので、少なくとも調査区の中では平安時代に神社が置かれていなかった可能性が高い。検出した遺構は中世末期から近世に造営されたもので、これらの遺構が余喜彦神社とどのように関係するのか検討をする必要がある。

指江B遺跡は、平成10(1998)年度からの継続調査である。平成10年度の調査でも白玉や「大国別社・・」と書かれた木簡など、古墳時代後期から古代の祭祀遺物が出土していたが、今年度も多量の祭祀遺物が出土している。今年度の調査では、調査区内で検出した二条の河跡から多量の遺物が出土し、また古墳時代後期(6世紀)と古代(9世紀)の掘立柱建物を検出した。また、古代の建物に伴う可能性のある床材や、「大宮」、「多麻利」、「富貴得」などと墨書した土器が多量に河跡から出土した。建物跡については、古代の祭殿とする見解が提起されている。古代祭祀に伴う建物については、その評価を巡って祭祀考古学の分野で活発な議論が行われているが、これから進めていく資料整理の中で、遺跡内の祭祀空間を復元し、建物の機能について検討を進めていきたい。

観法寺古墳群では、奈良時代の瓦や須恵器を出土した焼土坑や一間四方の小型建物などを尾根上で検出している。古代から中世にかけて、なんらかの宗教儀式が尾根上で行われていたもようである。尾根筋にある二基の古墳は、平成12(2000)年度に調査予定である。観法寺古墳群の南側谷間では、観法寺谷遺跡の調査を実施した。観法寺谷の谷口には、元慶8(884)年に定額寺になった弥勒寺と推定される遺跡があり、谷間にも古代末期から中世の宗教遺跡が存在すると推定していたが、調査の結果は中世の水源地信仰に関係したと思われる遺構・遺物を検出している。

金沢城跡では、橋爪門と本丸の間に設置されるトイレ建設(鶴ノ丸第1次調査区)に伴う調査などを実施している。鶴ノ丸第1次調査区では、粘土で覆われた辰巳用水の木樋を検出したが、水圧対策に苦労した一端を偲ばせるものだった。また、新丸では地表下1.5メートルで、地山に切り込んだ多数の遺構を検出し、ここから16世紀後半の遺物が出土している。この結果は、新丸の造成時期を検討するに当たって、重要な手懸りとなるものである。

ブッシュウジヤマ古墳では、古墳時代後期の小松市周辺に特有の埋葬施設である木芯粘土室を検出している。今回の調査では、壁の粘土が良好に遺存しており、倒壊状況を精密に記録することができ、今後の整理で粘土室の構造を解明する手がかりを得ることができた。

八日市地方遺跡は、北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に伴って調査をおこなった。今回の調査では河跡や方形周溝墓などを検出しており、小松市周辺の中核的弥生遺跡の一端を明らかにできた。

九谷A遺跡では、杉ノ水川に沿った地区を調査した。杉ノ水川左岸を石垣で護岸して平坦面を造成し、その上で掘立柱建物と竈に使用した磚で部分的に擁壁した土坑を検出している。この遺構は、幕末に操業された吉田屋竈の施設に該当する可能性があると考えている。

平成11(1999)年度に実施された発掘調査一覧



図中の数字は、次頁遺跡No.に対応

No.	遺跡名	所在地	主な時代					調査担当	調査面積 (㎡)	着手時期	終了時期
			縄文	弥生	古墳	古代	中世				
1	洲衛炭窯跡C支群・洲衛旧開拓地遺跡	輪島市三井町洲衛						輪島市	1,000	平成11年5月6日	平成11年10月30日
2	鹿嶋タタラ跡	鳳至郡門前町字鹿嶋						門前町	250	平成11年10月13日	平成12年3月31日
3	真脇遺跡	鳳至郡能都町真脇						能都町	310	平成11年7月5日	平成11年10月8日
4	小牧炭窯跡	鹿島郡中島町字小牧						中島町	5	平成11年5月17日	平成11年5月21日
5	見仏寺跡	鹿島郡中島町字町屋・大平						中島町	50	平成11年5月10日	平成12年2月10日
6	三引遺跡	鹿島郡田鶴浜町字三引						県埋文センター	1,800	平成11年4月19日	平成11年7月31日
7	三室遺跡群(オオタン遺跡・トクサ遺跡・新崎遺跡)	七尾市三室町						七尾市		平成11年7月1日	平成12年12月25日
8	万行遺跡	七尾市万行町						七尾市	3,800	平成11年4月22日	平成12年3月31日
9	園分遺跡	七尾市園分町						県埋文センター	860	平成11年4月14日	平成11年5月31日
10	能登園分寺跡	七尾市古府町						七尾市	400	平成11年5月1日	平成12年3月31日
11	川田古墳群	鹿島郡鳥屋町字川田						鳥屋町	1,800	平成11年4月10日	平成12年3月
12	徳丸遺跡	鹿島郡鹿西町徳丸						県埋文センター	2,020	平成11年9月7日	平成11年12月28日
13	金丸宮地遺跡	鹿島郡鹿西町金丸						鹿西町	330	平成11年11月8日	平成11年12月28日
14	富来城跡	羽咋郡富来町八幡						富来町	1,760	平成11年4月5日	平成11年5月31日
15	福浦港ヨシラカワグチ遺跡	羽咋郡富来町福浦港						富来町	1,000	平成11年8月11日	平成11年12月21日
16	甘田タイ遺跡	羽咋郡志賀町甘田						県埋文センター	350	平成11年4月26日	平成11年5月31日
17	滝谷八幡社遺跡	羽咋市滝谷町						羽咋市	3,000	平成11年9月16日	平成11年12月17日
18	柴垣ヤツキヤマ古墳	羽咋市柴垣町						羽咋市	60	平成11年7月6日	平成11年8月19日
19	大町ダイジンクウ遺跡	羽咋市大町						県埋文センター	3,000	平成11年9月3日	平成11年12月9日
20	四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町						県埋文センター	2,000	平成11年4月19日	平成11年7月30日
21	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町						県埋文センター	7,400	平成11年5月10日	平成11年12月15日
22	萩島遺跡	羽咋郡志雄町萩島						県埋文センター	400	平成11年6月9日	平成11年7月9日
23	御館館跡	羽咋郡押水町御館						押水町	570	平成11年4月19日	平成11年12月17日
24	高松八カド遺跡	河北郡高松町高松						高松町	11,000		
25	指江遺跡・指江B遺跡	河北郡宇ノ気町指江						県埋文センター	3,900	平成11年6月29日	平成12年1月20日
26	領家指江ハシノ遺跡	河北郡津幡町領家						県埋文センター	70	平成11年6月14日	平成11年6月26日
27	谷内石山1号墳	河北郡津幡町字谷内						津幡町	780	平成11年8月2日	平成12年1月19日
28	加茂遺跡	河北郡津幡町加茂						県埋文センター	5,500	平成11年5月10日	平成11年12月17日
29	倉見オウラント遺跡	河北郡津幡町倉見						県埋文センター	1,000	平成11年5月17日	平成11年7月30日
30	旭山ボッコリ塚	河北郡津幡町字旭山						津幡町	100	平成11年6月23日	平成11年7月30日
31	梅田B遺跡	金沢市梅田町						県埋文センター	5,000	平成11年5月10日	平成11年12月17日
32	観法寺古墳群・観法寺谷遺跡	金沢市観法寺町						県埋文センター	3,600	平成11年5月10日	平成11年12月10日
33	堅田B遺跡	金沢市堅田町						金沢市	1,200	平成11年8月4日	平成11年10月18日
34	南森本・塚崎遺跡	金沢市南森本町・塚崎町						金沢市	660	平成11年2月24日	平成11年3月18日
35	神谷内1号墳	金沢市神谷内						金沢市	300	平成11年4月12日	平成11年4月16日
36	神谷内A遺跡	金沢市神谷内						金沢市	1,200	平成11年5月17日	平成11年7月23日
37	近岡遺跡	金沢市近岡町						金沢市	600	平成11年11月11日	平成11年12月27日
38	近岡遺跡	金沢市近岡町						県埋文センター	550		
39	戸水B遺跡	金沢市戸水町ほか						県埋文センター	1,030	平成11年4月12日	平成11年6月30日
40	畝田C遺跡	金沢市畝田中3丁目						金沢市	2,000	平成11年9月27日	平成11年12月22日
41	畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、 畝田大徳川遺跡	金沢市畝田西3丁目						県埋文センター	15,600	平成11年4月26日	平成11年12月22日
42	無量寺C遺跡、畝田・無量寺遺跡、 畝田C遺跡、畝田B遺跡	金沢市無量寺町・畝田東4丁目・畝田中3丁目						県埋文センター	2,000	平成11年8月26日	平成11年11月30日
43	畝田ナベタ遺跡	金沢市畝田東3丁目						県埋文センター	400	平成11年12月1日	平成12年1月14日
44	松村高見遺跡	金沢市松村3丁目						金沢市	1,910	平成11年5月17日	平成11年8月2日
45	彦三遺跡	金沢市彦三町1丁目						金沢市	200	平成11年8月5日	平成11年9月22日
46	高岡町遺跡	金沢市高岡町						金沢市	750	平成11年6月1日	平成11年9月11日
47	広坂遺跡	金沢市広坂1丁目						金沢市	15,000	平成11年4月5日	平成11年12月17日
48	金沢城跡	金沢市丸の内						県埋文センター	11,000	平成11年4月1日	平成12年3月31日
49	若松遺跡	金沢市田上町北						金沢市	8,400	平成11年6月1日	平成12年2月6日
50	宝町遺跡医学部グラウンド地点	金沢市宝町						金沢大学	275	平成11年8月2日	平成11年8月30日
51	大桑町遺跡	金沢市大桑町						金沢市	600	平成11年11月15日	平成11年12月24日
52	豊穂遺跡	金沢市豊穂町						県埋文センター	1,400	平成11年7月1日	平成11年9月10日
53	安原工業団地遺跡	金沢市福増町						金沢市	300	平成12年3月14日	平成12年3月30日
54	富樫館跡 蛭土居地区	石川郡野々市町住吉町						野々市町	1,500	平成11年5月17日	平成11年8月31日
55	粟田遺跡	石川郡野々市町粟田						野々市町	4,000	平成11年9月20日	平成12年3月31日
56	宮永雁塚遺跡	松任市宮永町						松任市	800	平成11年7月26日	平成11年9月4日
57	松任城跡	松任市古城町						松任市	800	平成11年6月23日	平成11年9月10日
58	博労ドウコウ遺跡	松任市博労町						松任市	480	平成11年9月22日	平成11年10月1日
59	橋爪ガンノアナ遺跡、橋爪B遺跡	松任市橋爪町						県埋文センター	520	平成11年11月22日	平成12年1月14日
60	橋爪新A遺跡、橋爪新B遺跡	松任市橋爪新						県埋文センター	360	平成11年5月6日	平成11年6月11日
61	鳥越城跡	石川郡鳥越村三坂						鳥越村			
62	大長野A遺跡	小松市一針町						県埋文センター	5,500	平成11年4月28日	平成11年12月8日
63	千代オオキダ遺跡	小松市千代						小松市	2,500	平成11年8月5日	平成12年3月7日
64	佐々木遺跡	小松市佐々木町						小松市	1,600	平成11年4月8日	平成11年10月26日
65	吉竹遺跡	小松市吉竹町						小松市	484	平成11年4月6日	平成11年4月27日
66	ブッシュウジヤマ古墳群	小松市中海町						県埋文センター	700	平成11年9月6日	平成11年12月24日
67	八日市地方遺跡	小松市日の出町ほか						小松市	700	平成11年4月13日	平成11年7月1日
68	八日市地方遺跡	小松市						県埋文センター	5,000	平成11年6月21日	平成11年12月24日
69	幸町遺跡	小松市八幡町・上本折町						県埋文センター	1,000	平成11年6月1日	平成11年6月30日
70	小松城跡	小松市丸の内町二の丸						県埋文センター	2,100	平成11年7月22日	平成11年12月6日
71	今江5丁目遺跡	小松市今江町						小松市	400	平成11年6月23日	平成11年8月9日
72	葉師遺跡	小松市矢崎町						小松市	600	平成11年11月1日	平成11年11月24日
73	鶴見町遺跡(F・G地区)	小松市串町・鶴見町						小松市	7,400	平成11年5月10日	平成12年3月31日
74	戸津シンパザウ1号製鉄跡	小松市戸津町・林町						小松市	400	平成11年10月19日	平成12年3月23日
75	矢田野遺跡・矢田野古墳群	小松市矢田野町・月津町						県埋文センター	1,100	平成11年7月29日	平成11年11月18日
76	柴山出村遺跡・柴山貝塚	加賀市柴山町						県埋文センター	1,700	平成11年6月21日	平成11年10月22日
77	弓波遺跡	加賀市八日市町						県埋文センター	1,600	平成11年10月20日	平成12年1月20日
78	大菅波D遺跡	加賀市大聖寺敷地						加賀市	2,500	平成11年5月17日	平成11年12月3日
79	保賀遺跡	加賀市保賀町						加賀市	410	平成11年12月7日	平成12年3月21日
80	九谷A遺跡	江沼郡山中町大字九谷町						県埋文センター	2,150	平成11年4月20日	平成11年12月9日

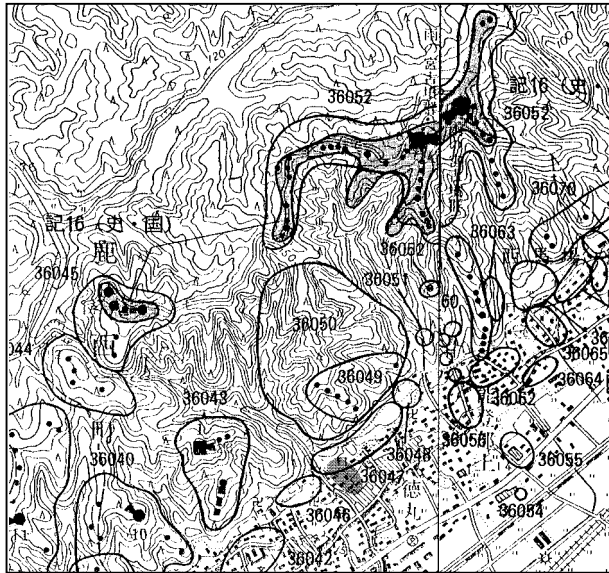
とくまる
徳丸遺跡

所在地 鹿島郡鹿西町徳丸地内

調査期間 平成11年9月7日～平成11年12月28日

調査面積 2,020m²

調査担当 安中哲徳 加藤克郎



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査地は、能登半島の基部を横断する呂知地溝帯北側に連なる眉丈山系を水源とする橋本川左岸の丘陵裾に存在する徳丸遺跡の縁辺部にあたり、一般県道志賀鹿西線ふるさと支援道路整備工事に伴い今回初めて発掘調査が行われた。弥生時代から近世にかけての遺構面が複数存在することがわかり、中・近世の井戸跡、古代の掘立柱建物柱穴の可能性がある土坑、弥生時代前期・中期・後期・終末期、古墳時代初頭の各時期の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝、大型土坑などのほか、縄文時代から近世にかけての多数の河跡が幾層にも複雑に重なってみつまっている。出土遺物の主体は多量の弥生土器が占めるが、縄文土器や土師器、須恵器、珠洲焼、陶

磁器、寛永通宝のほか、縄文時代の磨製石斧、弥生時代の未製品を含む打製石鏃や磨製石斧、石鋸、砥石などの石製品、土器片を加工した土製紡錘車などバラエティに富んでいる。

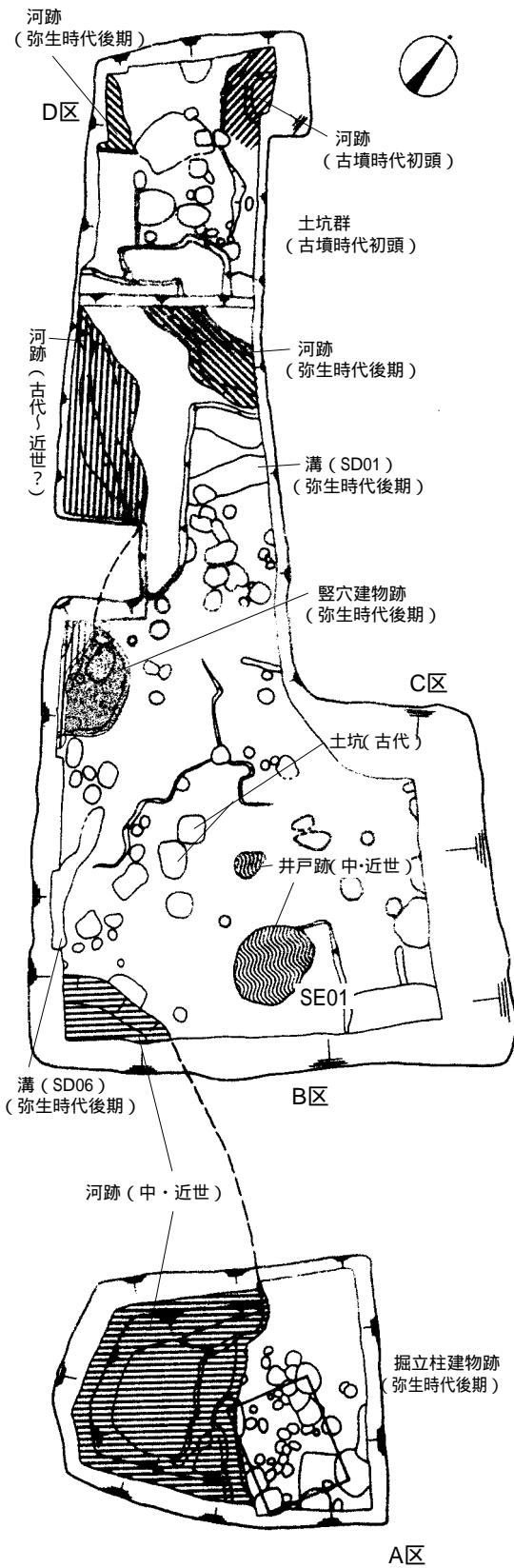
- 1面 B区では表土直下で中・近世の井戸跡を検出している。SE01は円筒形の石組井戸で、掘り方の直径約3m、廃絶後の石抜取りの造作により不整形を呈している。検出面より約1.5mの深さで石組みが残存しており、底面には3つの石が置かれていた。井戸底に3つの石を置くことは本遺跡から南西約1.5kmの地点の谷内ブンガヤチ遺跡でも類例が確認されている。SE02も円筒形の井戸であるが、底面には3つの石の抜取り跡が確認されており、石組井戸であった可能性がある。

- 2面 D区北側からは古墳時代初頭頃の土坑群がみつかっており、その基盤層となる河跡の堆積を約1m掘り下げると弥生時代終末頃の土器が、さらに約1.5m下からは縄文時代中期初頭頃の土器がまとめて出土している。A区からは弥生時代後期後半頃の掘立柱建物跡が確認されており、その柱穴(SK01)からは高坏・甕・壺が良好な状態で出土している。またB区からは径約4mの竪穴建物跡や、幅約0.5m・深さ約0.2mの溝(SD06)が検出され、溝中から多量の弥生時代後期前半頃の土器片が出土している。面と重複するD区南側の溝からは弥生時代中期中葉頃の土器がみつまっている。

面 弥生時代中期中葉頃の居住域であったと推定され、B・C区からは多くの柱穴や焼土、炭、灰が詰まったピット(灰穴炉?)、炭化材を多く含む大型土坑群などが確認されている。

面 弥生時代中期前葉頃の居住域であったと考えられ、A区のピット(P07)からは完形の甕が、B・C区からは竪穴建物跡や柱穴、大型土坑群、多数のピットが検出されている。

遺構の錯綜状況から、各遺構の正確な時期については今後遺物の検討を通して明確にしていきたいが、以上の検出状況によると本遺跡周辺では橋本川の氾濫や土石流によって、現在までに幾度も地形を変化させていたことが確認されているものの、遺構密度自体は決して低くなく、災害に遭いながらも営み続けた人々の生活の痕跡が数多く確認されている。今後、呂知地溝帯周辺の遺跡の動向、特に羽咋市吉崎・次場遺跡や鹿西町谷内・杉谷遺跡群、七尾市細口源田山遺跡など、弥生時代中期における呂知潟を介した集落間の交流を考えるうえでも興味深い資料が多数得られている。(加藤)



面 遺構略図 (S=1/250)



B区 面 井戸跡 (SE01)



A区 面 弥生土器出土状況 (SK01)



A区 河跡掘り下げ作業



A区 面 弥生土器出土状況 (P07)

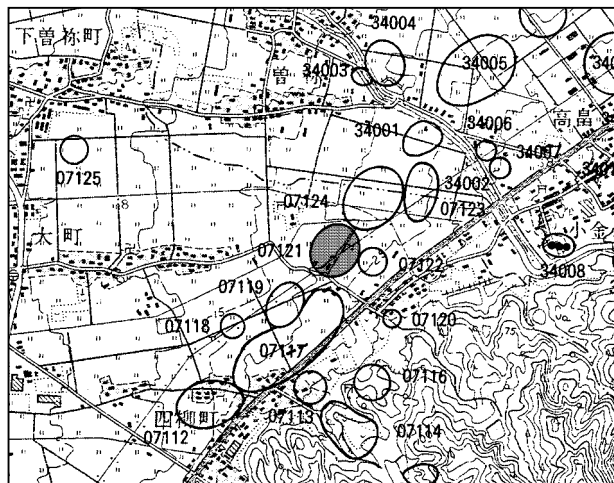
おおまち
大町ダイジングウ遺跡

所在地 羽咋市大町地内

調査期間 平成11年9月3日～平成11年12月9日

調査面積 3,000㎡

調査担当 岡本恭一 林 大智



遺跡位置図 (S=1/25,000)

大町ダイジングウ遺跡は、能登半島基部を北東から南西方向にはしる邑知地溝帯内に位置し、南東側の山麓から流れる河川により形成された、小規模な扇状地の扇端部に立地している。

遺跡の所在する大町は、旧邑知潟の縁に位置しており、羽咋から七尾への交通の要衝として古くから営まれた集落である。調査区西側に隣接する場所には、かつて余喜比古神社(式内社)の社殿が存在していた。また、調査区中央付近には、「余喜比古神社御手洗池跡」と刻まれた石碑が設置されていた。この石碑は現在調査区の北西側に移設されている。

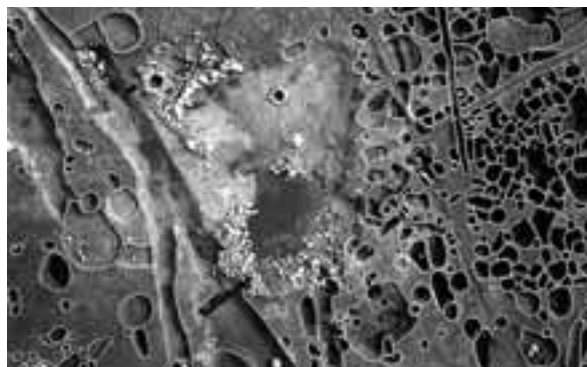
発掘調査は国道159号鹿島バイパス改築工事に伴うもので、平成11(1999)年度はA地区(2,200㎡)とB地区(800㎡)の調査を実施した。その結果、A地区を中心に室町時代から江戸時代中期(14世紀後半～18世紀)頃の集落跡を確認した。以下、遺構密度の高いA地区を中心に概要を述べる。

この遺跡からは、池跡、掘立柱建物跡、井戸跡、石室、土坑、溝などの遺構を確認した。

池跡はA地区中央やや北寄りに認められる。“ひょうたん”のような平面形を呈し、長軸で10.2m、短軸で7.5mを測る。西側部分には石を粗く積んで護岸が施されている。北東側には石組井戸(SE14)が付設されている。この石組井戸の周囲には礫が敷き詰められ、池跡との境には石列が築かれている。また、池の東側底には曲物容器をいれた石組井戸(SE06)が設置されている。これらの井戸跡は、池に水を供給するために設置されたと考えられる。排水は西側に付設された溝(SD05)によって行われていたと考えられる。池が築かれた時期は16世紀頃に比定できる。

A調査区内には東西および南北方向に流れる数条の溝が確認された。これらは居住域を区画する機能をもつものと考えられる。東西方向にほぼ直線的に流れる溝(SD04)からは、灯明痕の認められる土師皿や瀬戸小皿が定量出土した。瀬戸小皿の底部には「上」という墨書が認められる。

これらの池跡や溝を境にして、南北2箇所柱穴が密集して認められた。特に南側の密集域では、足の踏み場もないほどに柱穴が密集している。これらの柱穴は掘立柱建物跡に伴うものと考えられる。柱穴は長楕円や長方形の平面形を呈し、長軸1m前後を測るものが多い。柱穴の中には柱根の遺存し



護岸が施された池跡



池跡北東側の石組井戸(東から)

ているものも多数存在し、直径40cm程度の太い柱根も認められる。

井戸跡は柱穴密集域の周縁付近を中心に29基確認した。井戸枠には、曲物容器を用いたもの、石を丸く組み上げたもの（石組井戸） 両方を併用したものが認められる。

石室は偏平な石を方形に組み上げたもので、掘立柱建物内に設置された貯蔵施設と考えられる。

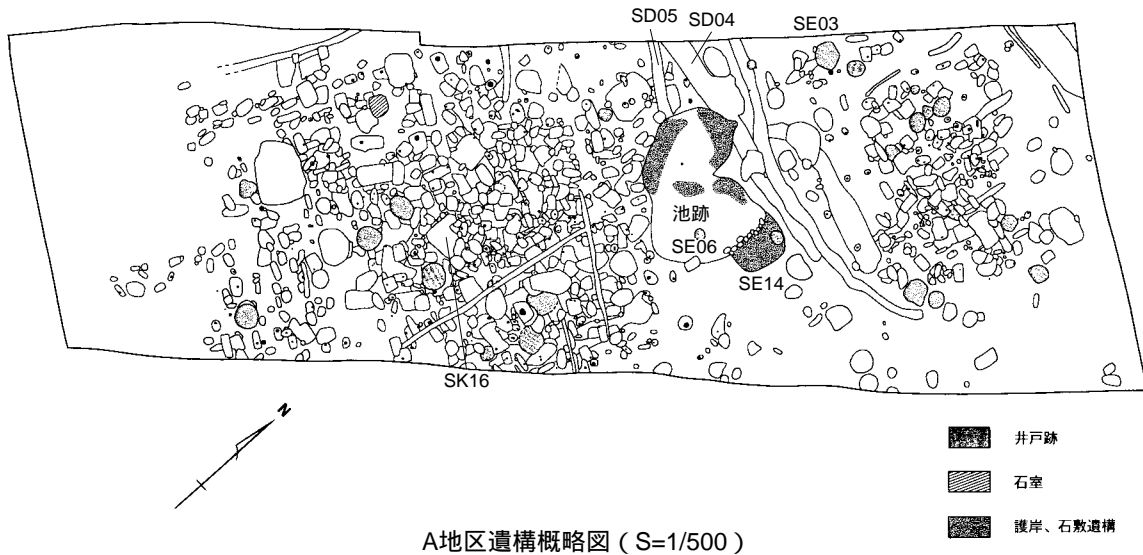
土坑は13基確認した。SK16からは編籠、下駄3点、加工痕のある木製品などが出土した。

これらの遺構や包含層からは、量はそれほど多くないが、多種類の遺物が出土した。

特筆する遺物としては、織部焼の向付・合子、塗箸、木簡などがあげられる。また、金属製品も斧・小柄・鏡・菊花皿・匙など多数の出土が認められる。それらに伴って取瓶、フイゴ羽口、溶解炉壁片、砥石なども出土しており、この遺跡で金属（銅）製品の鑄造が行われていたことが推測できる。

以上のことから、大町ダイジングウ遺跡は、護岸が施された池跡や、それを境にして計画的に営まれた集落跡、織部焼など多種類の陶磁器、多数の金属製品とその鑄造技術の保有など、通常の農村的集落とは異なる様相を示すことが明らかとなった。

また、確認した池跡は、「餘喜比古神社御手洗池跡」石碑跡地から十数mの距離に位置することや、調査区西側に隣接して社殿が存在したことから、この遺跡で確認された諸施設が、余喜比古神社と関連するものであった可能性も考えられる。 (林)



石組井戸跡 (SE03) 断ちわり状況 (南西から)



土坑 (SK16) 編籠等出土状況 (東から)

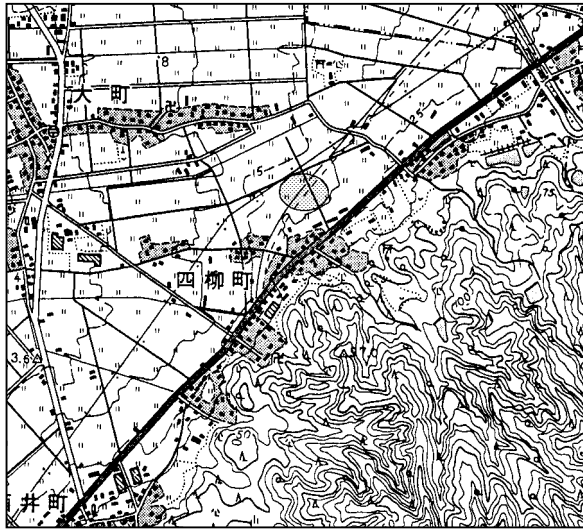
よつやなぎはくさんした
四柳白山下遺跡 (第6次調査)

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成11年5月10日～平成11年12月15日

調査面積 3,200㎡

調査担当 田村昌宏 宮川勝次



遺跡位置図 (S=1/25,000)

四柳白山下遺跡は、能登半島の基部にある日本海側の眉丈山地と富山湾側の碁石ヶ峰山地に挟まれた羽咋市と七尾市を走る帯状の平野部 (邑知地溝帯) に立地し、碁石ヶ峰山麓の四柳町地内に所在する。

発掘調査は、国道159号線鹿島バイパス改築工事を原因として、平成6 (1994) 年度から継続して行われており、今年度は第6次調査となる。

本遺跡は、縄文時代中期頃から江戸時代にかけての生活面が確認されており、また、土の堆積状況からこの一帯が土砂災害多発地帯であったことが分かっている。

今年度は、第5次 (1998年度) 調査区北側のI地区とJ地区を調査し、これまでに弥生時代後期～中世の集落跡及び水田跡などを検出している。(平安時代～中世の概要は本誌第3号に掲載)

今回は、平安時代の面より下層にあたる、I・J地区第 面 (飛鳥・奈良時代) J地区第 面 (古墳時代) J地区第 -1面 (弥生時代後期～古墳時代前期) の報告になる。以下、各時代の概要を述べる。
I・J地区第 面

現地表下約2mで検出された飛鳥～奈良時代にかけての生活面である。掘立柱建物9棟、溝10条、土坑などを検出している。検出した建物は8世紀頃とされ、建替えを行ったものも確認された。調査区中央の掘立柱建物は2×3間の側柱建物で、桁行約5m、梁行約7mを測る。その他の建物も同規模と考えられ、東西方向に主軸をとるものと東西主軸から約30度南にふるものの2つに大別できる。溝は7世紀代のもので、幅約1m、深さ約20～30cmを測り、東西に流路をとる。

遺物は須恵器、土師器が多量に出土し、「吉継」「法師」と書かれた墨書土器がみられた。

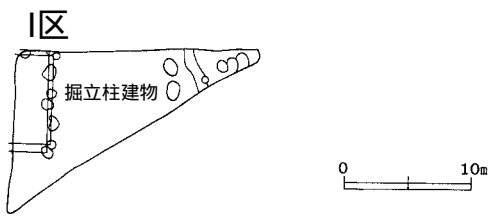
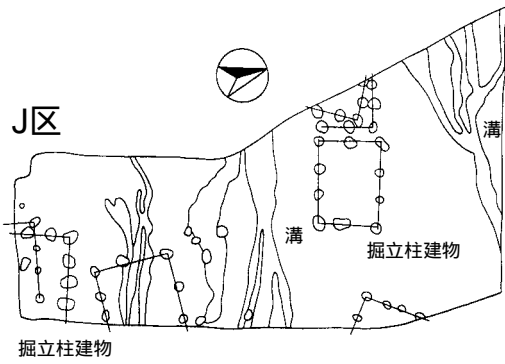
J地区第 面

G地区 (第5次調査区) 北側で確認された水田跡と連続した面で、時期は古墳時代と考えられる。今年度の調査区南側でも、水田跡を7枚検出している。第 -2面 (平安時代) の水田と比較して、1区画が小規模であり、約3m四方の平坦面を段状に造成し、その両側を畦で区画している。

調査区北側は削平を受けたと思われる、明確に水田跡を捉えることはできておらず、少量のピットを検出した。

J地区第 -1面

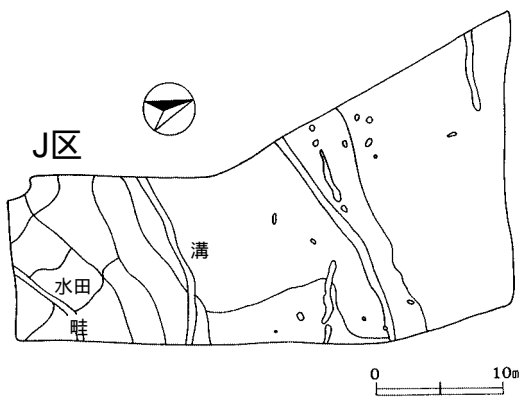
G地区 -1面と連続した面で、時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。検出遺構はピット10基程、遺物はごく少量である。当面は、遺構密度は極めて低く、また周辺の調査区の状況からみて、集落域の縁辺部にあたると思われる。 (宮川勝)



I・J地区 面 遺構略図 (S=1/600)



J地区 面 掘立柱建物跡完掘状況 (東から)



J地区 面 遺構略図 (S=1/600)



J地区 面 水田跡完掘状況 (東から)



J地区 面 須恵器出土状況

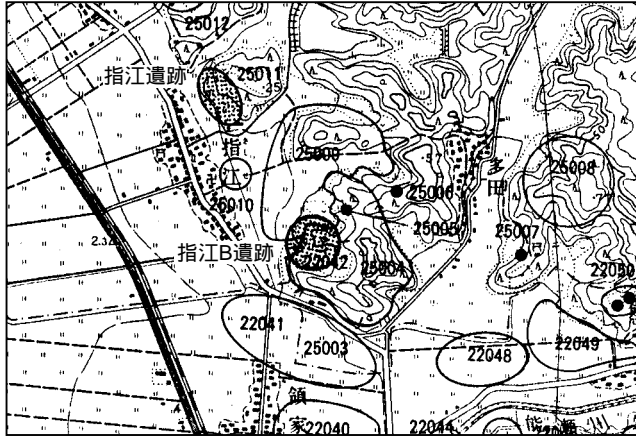


J地区 面 須恵器・土師器出土状況

さしえ さしえ
指江遺跡・指江B遺跡

所在地 河北郡宇ノ気町指江地内
調査面積 1.指江遺跡 300㎡
2.指江B遺跡 3,600㎡

調査期間 平成11年6月29日～平成12年1月5日
調査担当 大西 顕 藤井秀明



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

1. 指江遺跡

古墳時代後期～近世までの遺物を確認している。遺構では、時期の特定はできないが掘立柱建物1棟や、骨片が出土する土坑を検出している。調査区は、遺跡縁辺部と推定される。なお、両遺跡とも農村活性化住環境整備事業に係る調査で平成10(1998)年度からの継続調査である。

2. 指江B遺跡

調査区は3箇所にわかれ、平成10(1998)

年度(A～F区)の続きで、G、H、I区と呼称している。河北潟・古代北陸道を望む丘陵裾に位置する。また、各調査区で旧河道を検出している。遺跡からの出土遺物で、現在までに確認できるのは、縄文後期、弥生中期、弥生終末期、古墳前期、古墳中期、古墳後期、奈良、平安、中世のものである。途中に空白期を挟みながら、長期にわたる人々の活動の痕跡が確認できるのが本遺跡の特徴である。量的には、6世紀前半～10世紀前半の遺物が多い。

G区

遺構面を2面確認している。上層が古代・中世で、下層が古墳後期である。下層面のSB02(44㎡)は、屋内に1本ないし2本の棟持柱をもつ掘立柱建物跡である。屋根をつくり変えている可能性がある。SB02周囲には総柱建物跡等が展開している。北側の旧河道からは、白玉(過年度とあわせて遺跡全体で約2,000個)、ガラス玉、勾玉といった多量の玉類が出土している。また、河道北岸には多量の炭化物及び土器が集中して出土する箇所がある。総合的に判断して祭祀色が強い地区である。火を用い、玉を神の依代として祭祀が執り行われていたものと思われる。中心建物SB02は、祭祀に関連した祭殿としての性格をもつ可能性がある。この他、旧河道からは紡錘車や、膨大な須恵器・土師器が出土しており、全体として特殊器種が目立つ。

上層面では、旧河道から古代の多量の土器とともに木簡が3点出土している。二号木簡は、『江沼臣 未呂事依而』、裏面には『一石在止母』が解読できる。また、三号木簡は『道那部...』の記載がある。この他旧河道からは多量の曲物が出土している。中世では、周囲を溝で囲まれた掘立柱建物跡(SB01)を検出した。平面プランが特殊である。近接する大型の土坑(SK04)からは、13～14世紀の青磁片が出土している。

H区

古代ではSB03とSB04の2棟の掘立柱建物跡(東西棟)を検出している。SB04 SB03に建て替えられる。柱穴内遺物より建物時期の特定は困難である。SB04は無庇で梁間2間、桁行は3間(以上)で調査区外にのびる。SB03は調査区外にのびるものの四面庇付建物と推定される。推定面積は82㎡である。柱根が残存しているものが多く、身舎の柱根が径約30cm、庇の柱根が径約20cmである。SB03建築形式は後述する遺物より、身舎床板張りで、身舎の四面に壁と戸口を設け、庇部分は吹き放しの

開放空間であったと考えられる。

中世では総柱の掘立柱建物跡を検出している。多くの柱穴で柱根が残存している。当期の遺物量は少ないが土師器小皿が数点出土している。今後時期の検討をしたい。なお、SK51からは弥生中期、古墳前期、古墳中期という時期幅のある多量の土師器が出土している。

I区

旧河道（古墳後期～10世紀前半）及び、旧河道と直交方向にある多数の畝溝群（古代）、H区の中世建物域の西限を区画するとみられる大溝（SD32）を検出している。

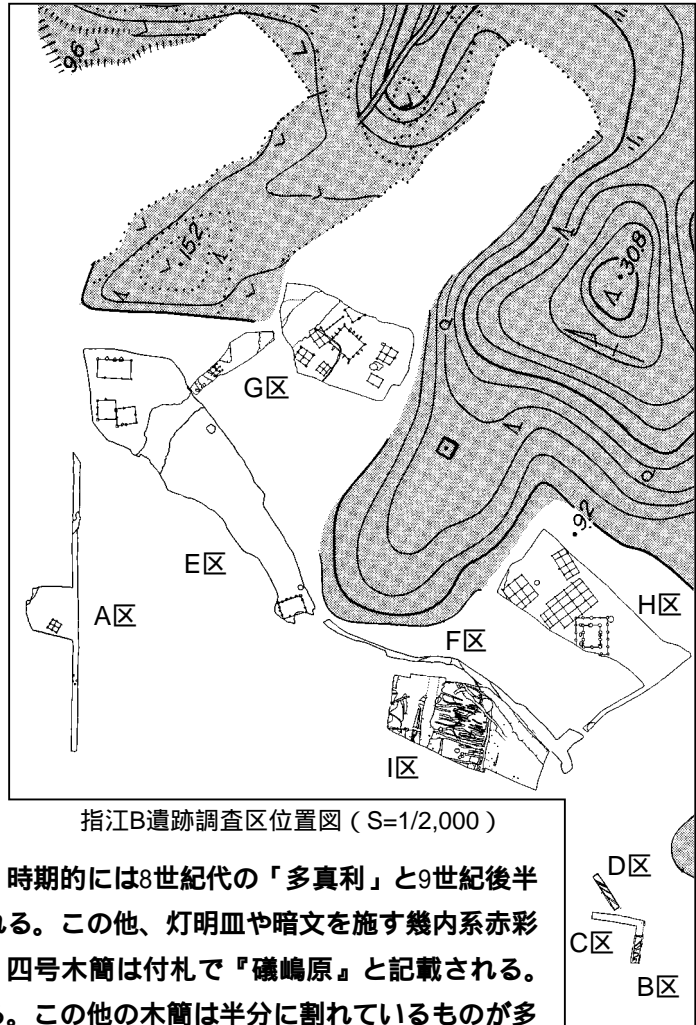
旧河道は9世紀後半代に大きく作り替えられている。作り替え以前を河道2、以後を河道1と呼称する。両者とも遺物量は膨大である。墨書土器は「多真利」が最も多く、次に「大」「富貴得」「夜手」「倉人」と続く。「美奴九」も注目される。時期的には8世紀代の「多真利」と9世紀後半～10世紀前半の「大」のグループに分かれる。その他、灯明皿や暗文を施す幾内系赤彩土師器が多い。木簡は6点出土している。四号木簡は付札で『磯嶋原』と記載される。海岸地域の地名あるいは人名と推定される。この他の木簡は半分に割れているものが多く解読できなかった。

木製品では、建築部材が注目される。床板2点、蹴放し2点は類例の少ない貴重な資料である。なお、河道2から出土した床板2点はその寸法がH区SB03の梁間寸法とほぼ一致することから、この建物の床板として使用され、その後河道に廃棄されたものと推定される。この他木製品では、木沓、下駄、盤、箸、斎串、鳥形、舟形等の祭祀関連遺物が出土している。また、河道1と同時期と推定されるSB05の柱穴出土の大型礎板は、建物の壁板転用材である。

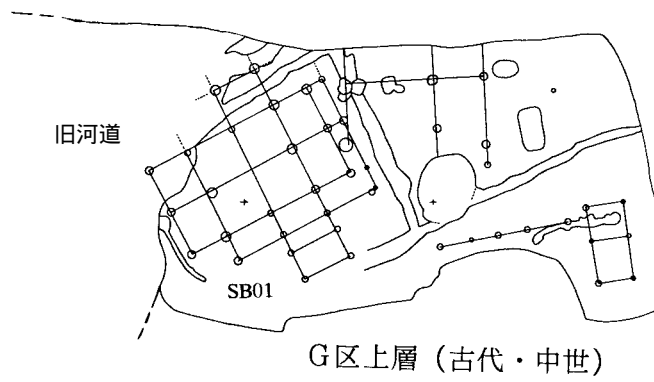
本遺跡では6世紀の埴輪（南加賀産）が出土しているように、古墳後期の当地域周辺の豪族が深く関与する拠点集落と推定され、内部で祭祀が執り行われている。古代においてもこの性格は引き継がれている模様である。四面庇付建物SB03は、類例より仏堂または神社といった宗教施設である可能性が高い。この場合、本遺跡の出土遺物『大国別社務……』木簡、「大宮」墨書土器、多足机（供物台）、木沓より、神社に関連する建物と考えられる。しかし、鉄鉢、灯明皿も出土しており、仏堂的性格を兼ね備えている可能性もある。

（大西）

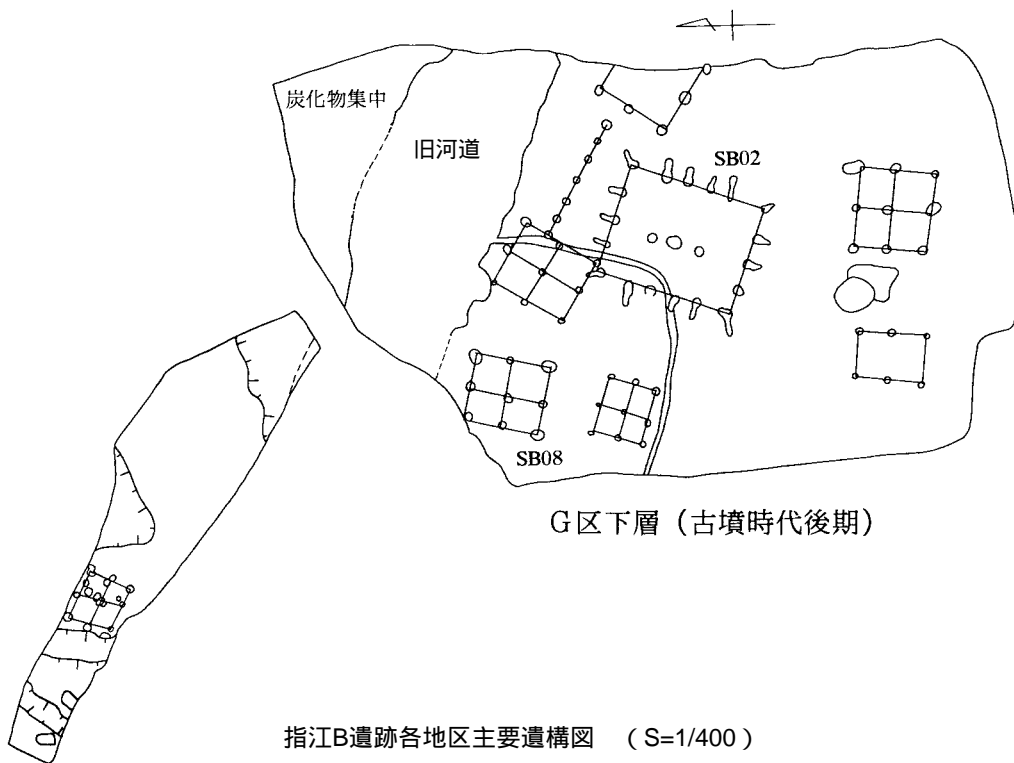
謝辞 本遺跡出土木製建築部材の調査にあたっては、東北芸術工科大学教授 宮本長二郎氏より御指導いただいた。文末ながら深謝します。



指江B遺跡調査区位置図 (S=1/2,000)



G区上層 (古代・中世)



G区下層 (古墳時代後期)

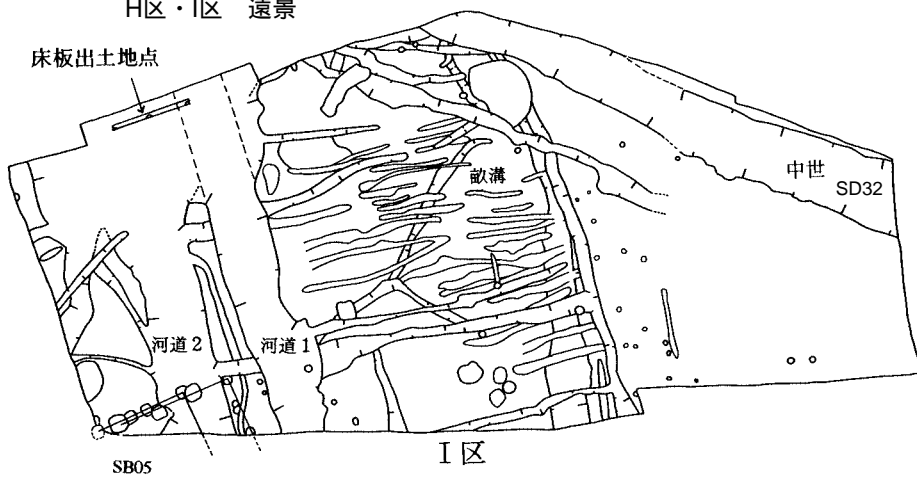
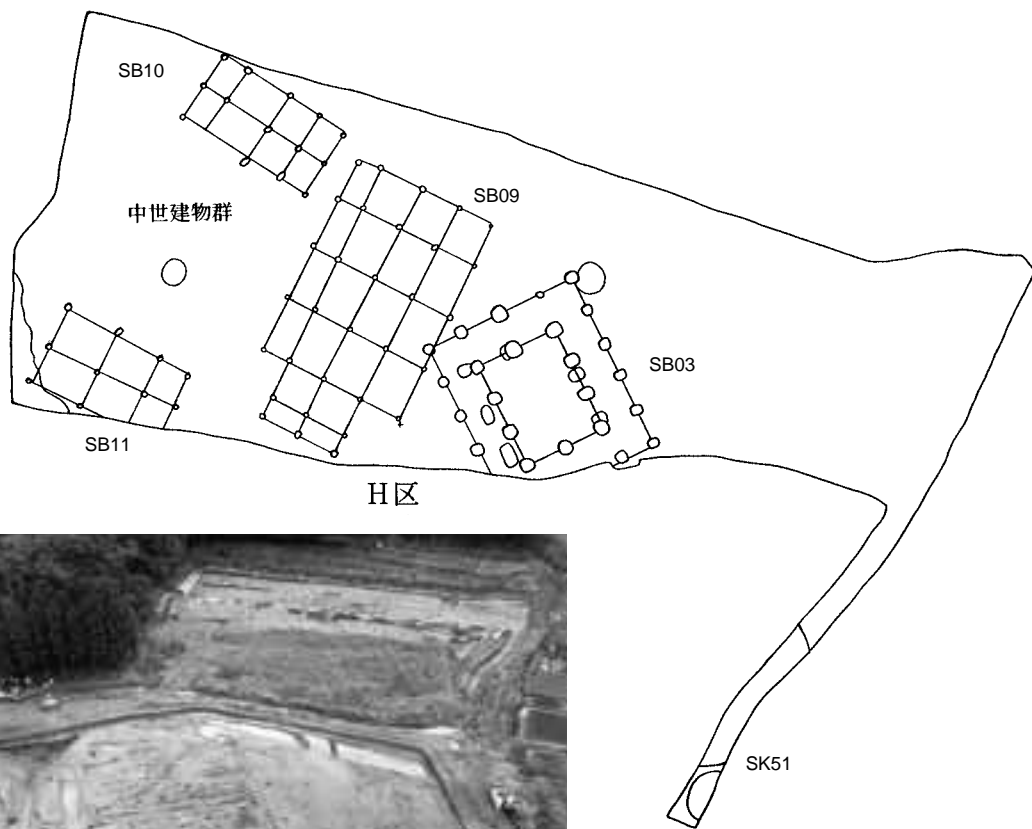
指江B遺跡各地区主要遺構図 (S=1/400)



指江遺跡 指江B遺跡遠景



G区下層全景

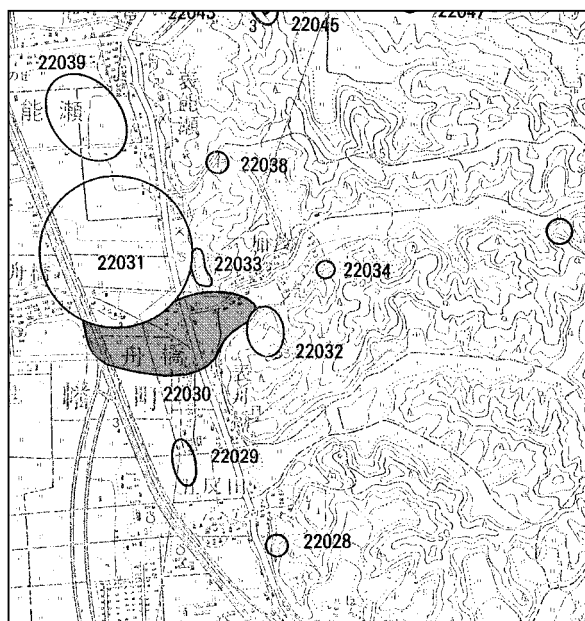


指江B遺跡・各地区主要遺構図 (S=1/400)



かも 加茂遺跡

所在地 河北郡津幡町船橋・加茂地内 調査期間 平成11年5月10日～平成12年1月22日
調査面積 5,000㎡ 調査担当 川畑 誠 兼田康彦



遺跡位置図 (S=1/25,000)

加茂遺跡は河北潟東岸の沖積地に立地する津幡町舟橋、加茂地内に跨って所在する。

本遺跡は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会により、平成3(1991)～6(1994)年度にかけて4次にわたる発掘調査が実施され、上層(奈良・平安時代)、下層(弥生時代後期後半～終末期)の遺構の存在が確認されている。特に上層においては多数の建物跡が発見されており、同時に確認された古代北陸道と想定される道路や遺物(墨書土器、和同開珎銀銭等)また河北潟に近接する遺跡の立地から、陸上及び水上交通に関する官衙を含む集落だと考えられている。

第5次となる今年度調査では調査区の一部で下層の下に遺構を新たに確認し、最下層(弥生時代後期後半)とした。

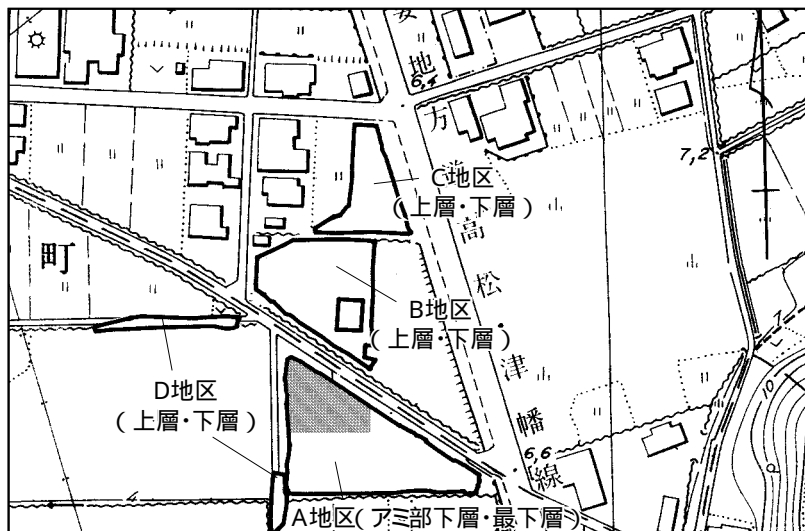
今年度調査で上層には掘立柱建物跡4棟以上、竪穴建物跡1棟、井戸跡1基、道路状遺構2箇所、溝約100条を確認している。遺構の配置から見て、南側に畝溝状遺構が集中する。一方北側では大型倉庫と想定される一辺約8.5mの3×3間の総柱建物を含む掘立柱建物跡、竪穴建物跡が分布し、耕作域と集落域の分けがされていたと考えられる。建物以外で注目すべき遺構としては道路状遺構、井戸が挙げられる。道路状遺構は路面下の一部に道路と平行に木材が置かれ、砂が敷かれていることを確認し、同時に見つかった路肩補修の痕跡等と共に当時の道路の構造を考える上で重要なものである。井戸跡は直径約3mを測り、出土遺物から奈良～平安時代初期の間に使用されたものと推測できる。井戸跡からは^{ゆぐし}斎串3本と墨書土器が出土しており、廃絶の際に儀礼が行なわれたと考えられる。また、墨書土器の「大寺」の文字から隣接する加茂廃寺との関係がある可能性が伺われる。

上層からの遺物は墨書土器を含む多量の須恵器、土師器の他、木製椀、木皿、斎串、木簡、^{ひとがた}人形、横櫛、帯金具等多岐にわたる。これらのうち墨書土器と木製品の大半は大溝と道路状遺構から出土し、主な墨書土器には「干」「正月」「真継」等がある。道路状遺構の側溝になるSD5001からは建築部材に混じり、9世紀前半の木簡が2点出土している。うち1点は2体の人物と思われる絵が描かれている。大きさは、長さ104mm(推定)、幅29mm、厚さ2mmを測り、両端に釘穴を持つ。

下層は今年度初めて調査に着手した。主な遺構として、平地式建物の周溝と思われる溝2条、掘立柱建物2棟以上、土坑5基、溝22条を確認し、遺構の配置状況と遺物等から今年度調査区の北側と東側に弥生時代後期後半～終末期の集落が展開していたと考えられる。またこの集落域は弥生時代終末の幅約8mの河道に切られている。遺物としては多量の弥生土器、木製品を確認した。うち木製品には農耕具、盾、建築部材等が含まれていた。

最下層では沼地とそこに流れ込む数条の溝を検出し、沼地に渡された木道の基礎と思われる井桁状の木組みを10箇所確認した。

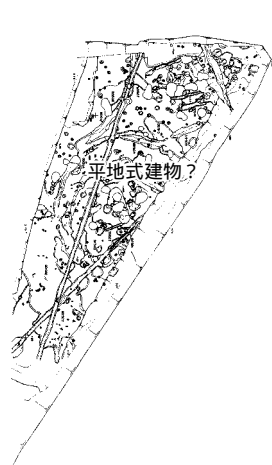
(兼田)



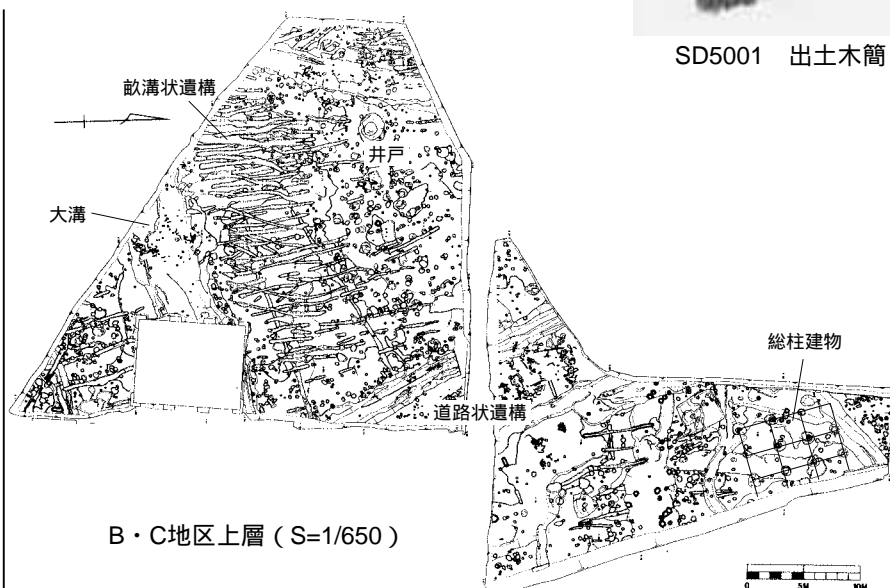
今年度調査区位置図 (S=1/2,500)



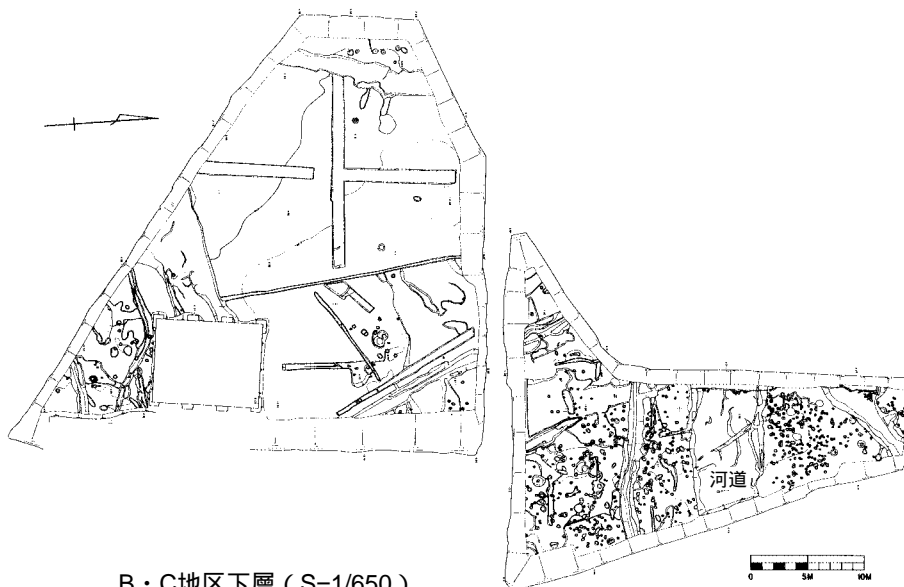
SD5001 出土木簡



A地区下層 (S=1/650)



B・C地区上層 (S=1/650)

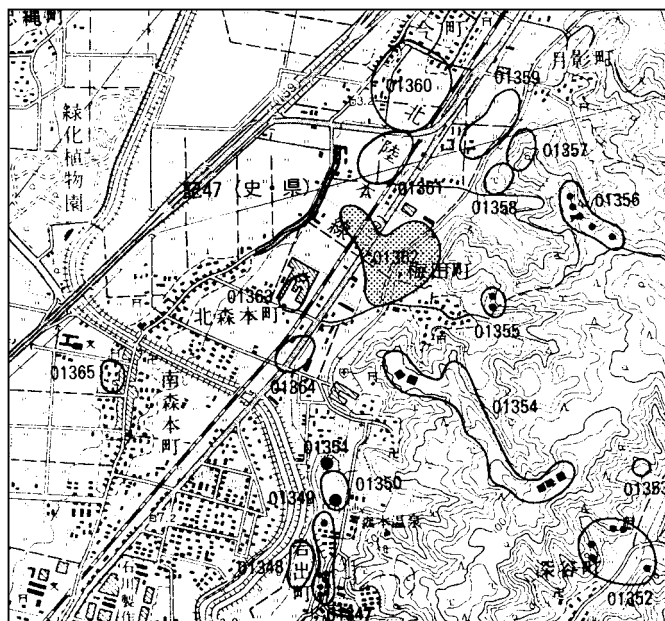


B・C地区下層 (S=1/650)

うめだ
梅田B遺跡(第7次・第9次調査)

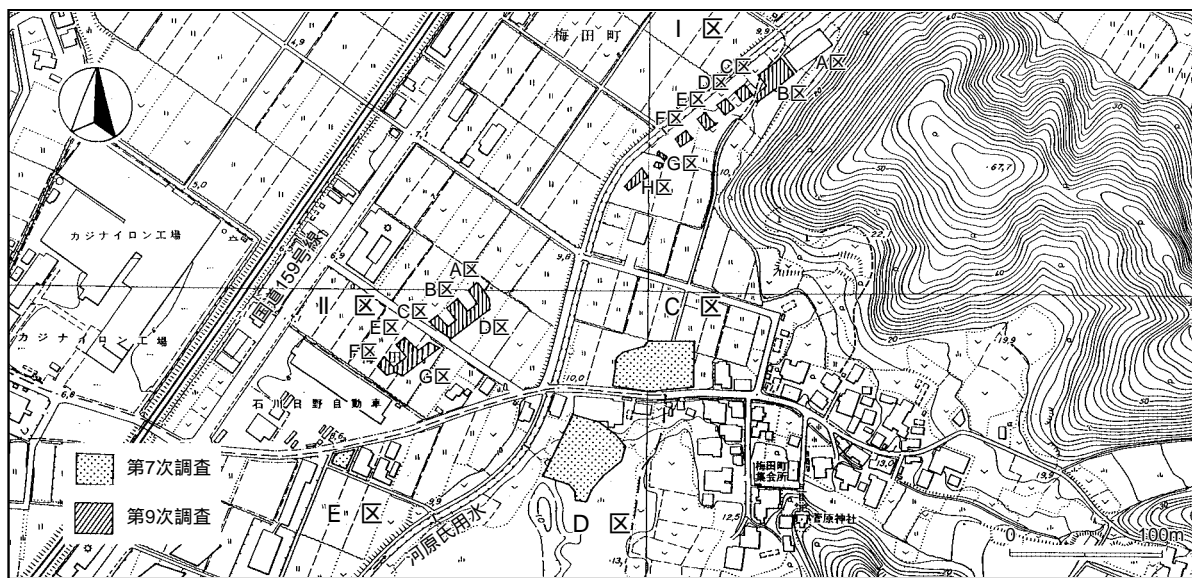
所在地 金沢市梅田町地内 調査期間 平成11年8月16日～平成12年1月20日(第7次)
平成11年5月7日～平成11年11月29日(第9次)

調査面積 第7次調査 3,900㎡ 調査担当 第7次 松浦郁乃 荒木麻理子
第9次調査 4,100㎡ 第9次 松山和彦 宮川彩子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

金沢市梅田町地内に所在する梅田B遺跡は、過去6カ年にわたり国道8号東部環状道路改築工事に係る発掘調査が行われてきた。その結果、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。今年度はその最終調査年度、第7次調査となる。一方、昨年度から北陸新幹線建設工事に先立ち、同じ梅田町地内で調査が行われている。こちらは、昨年度を第8次調査、今年度を第9次調査とした。近隣に国道8号・159号などの幹線道路が走ってはいるが、数年前までのどかな田園風景が広がっていた当地内の景観は一変し、コンクリートの橋脚が立ち並んでいる。

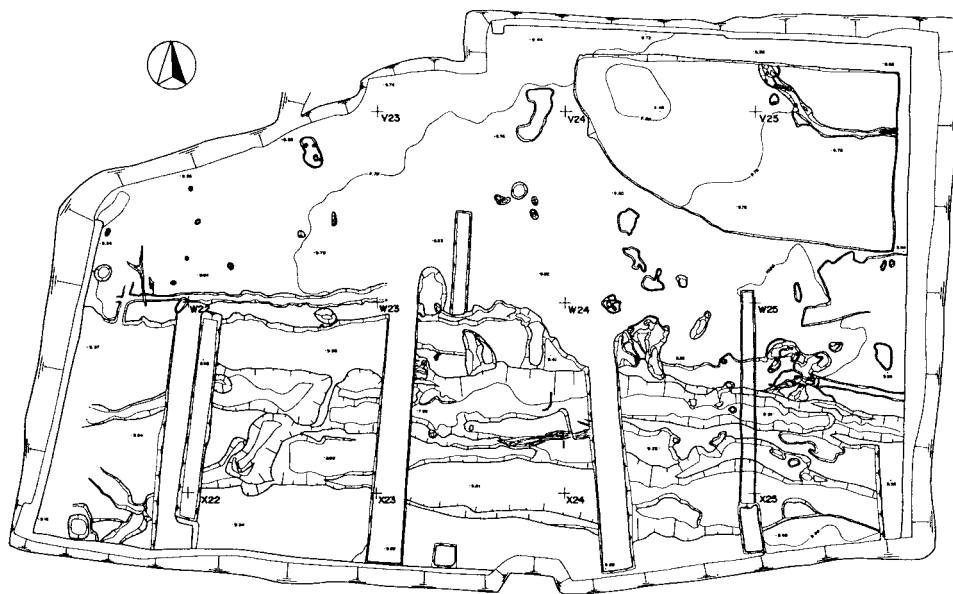


調査区区分割図 (S=1/5,000)

1. 第7次調査

E区

当地区は昨年度の6次調査において、予定調査面積2,200㎡のうち2,000㎡の調査を行い、今年度は調査未了となった200㎡について調査を行った。遺構としては10世紀末～11世紀初頭にかけての遺物が出土する旧河道1条、土坑が5基であった。昨年度は21基が検出されており、当地区からは全部で26基の検出となる。この土坑の埋土には、ほとんど例外なく葦類と見られる腐食物が堆積しており、埋没



C区 平面図 (S=1/400)

過程での周辺の環境を伺い知る手がかりの一つとなろう。遺物は、旧河道からの出土がほとんどで、横櫓や扇、底板が残存したままの曲物等が出土した。

C区

C区は平成9・10(1997・98)年度にも調査が行われている。今回は1,800㎡の調査を行い、土坑・小穴が数基、溝数条と自然河道が検出された。この自然河道は、平成9年度の第5次調査でも確認されている。調査区を山側(東)から河北潟(西)へ向かって貫流しており、幅約10mを測る。この旧河道は10世紀末～11世紀にかけてのもの、13～14世紀にかけての大きく分けて2時期の遺物がみられた。時期は特定できなかったが、火鉢板や曲物・漆器・漁網用と見られる石錘、溝底から少量だが縄文晩期から弥生前期の土器もみられた。10世紀末～11世紀のものは、完形にちかい土師器碗と共に須恵器の小壺、人形が出土している。周辺で被^{はらえ}などが行われていた可能性が考えられる。平成10年度の調査区から平安時代後半の建物跡や土器埋納土坑も検出されており、これらの遺構を残した人々が、河道での祭祀を執り行った人々とも想定できよう。この遺物が出土する層の上層で、シイの実が多く出土しており、またトチは種子のみでなく果実がついたままの物が多く見られた。これは、採集された物ではなく、自然に落下した物ではないかと思われる。トチの実が生る時期は、ちょうど台風の時期であるが、根元から倒れたと見られる樹木と一緒に検出されており、自然災害のため倒れ、トチの実とともに埋没したのではないかと想定している。木材の樹種同定を行いたいと考えている。一時期この河道は埋没し、水量もあまり見られないようだが、河道の一部は再掘削され、用排水等に利用していたようである。この溝も13～14世紀には埋没してしまうようである。周辺は谷間からの水が平野部へと流れ出す場所であるが、それ以降、近世にかけてのこの溝のあり方については、はっきりとしたことは今回の調査では判明しなかった。現在の集落から河原市用水へ流れ込む用水は、同一方向の流路を持ち、約5mほど東側にある。

D区

D区は、観法寺古墳群が所在する丘陵の北側裾部に位置し、1,900㎡について調査を行った。調査区には、丘陵部からの厚い流土が堆積しており、その中に中世から近世にかかる小破片となった遺物が包含されている。標高14～11mまでは木根等とみられる小穴が数箇所検出されたのみであるが、標



D区 平面図 (S=1/400)

高10m付近の平坦面となる箇所では建物跡などが確認された。建物跡は側柱建物と総柱建物がみられ、丘陵谷間からの排水を行ったと思われる溝に区画された内側に重複しながら存在する。建物の柱穴内は、ほとんどに柱根もしくは礎板が遺存していた。区画内には、他にも多数の小穴と土師器埋納土坑3基などが検出された。遺物は、区画溝よりも東側にある、丘陵谷間からの排水が一旦集まるとみられる落ち込み部分から多く出土した。10世紀から13世紀頃にかけての土師器が大半を占め、他には珠洲焼・曲物等が出土した。出土状況としては、比較的完形に近いものが落ち込み内に点在していた。調査区の北東側では、長軸が3～4mもある隅丸長方形の土坑が2基確認されている。周辺は遺構検出の時点で、粉炭が広く散らばったような状態でみられた。また建物跡は確認されていないが、多数の小穴が確認された。出土遺物は、覆土上面で完形の土師器数点が検出されたのみであった。

梅田B遺跡では、遺跡の北西部（JR北陸本線より河北潟側）で中世の集落がまとまった姿で確認されているが、現集落側（丘陵裾部）での中世面は、耕地整理等のため削平を受けている場合が多く、詳細については不明な点があった。今回の調査では、一部分ではあるが丘陵裾部付近での当時の状況が伺える資料となる。

なお、国道8号東部環状道路改築工事に係る梅田B遺跡の発掘調査は、今次調査をもって終了した。

(松浦)

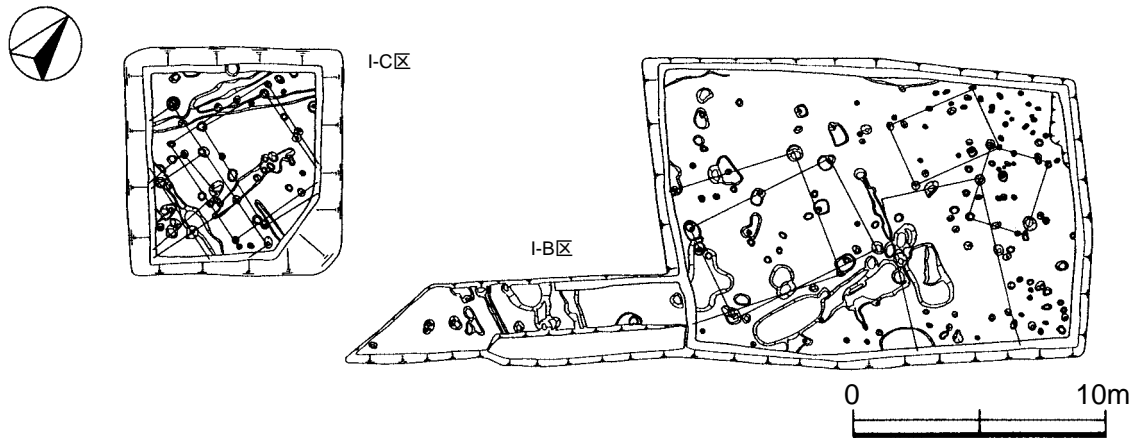
2. 第9次調査

調査面積は約4,100㎡を測るが、主に橋脚部分の調査のため、100㎡程度の小調査区9カ所、400㎡程度の調査区2カ所を各2面と600㎡程度の調査区1面を調査する形となった。そのため、遺構は調査区ごとに寸断され、各調査区の遺構を関連づけるのは難しい。調査区は河原市用水を挟んで、北側を区、南側を区とした。

区は、前年度の調査区をA区(第8次調査)とし、それに引き続いて本年度の調査区を北側からB~H区とした。区の南側に当たるF~H区は遺構密度が薄く遺物もほとんど見られなかったのに対し、E区では浅いが定量の遺物を含む溝1条が検出され、B~D区では古墳時代中期・平安時代前期・中世の集落跡が確認された。中心となるのは9世紀後半頃で、少なくとも掘立柱建物10棟が検出された。

区は、A~Gの7調査区に分けて調査したが、大きく南北の2調査区に分かれる。北側(A~D区)はベースが黒褐色を呈する粘質土で、その上に洪水による砂層、古墳時代前期の遺物を定量含む灰褐色の包含層の堆積が見られた。全体に遺構・遺物は少なく、溝が数条とピットが数個確認された。東側の調査区(D区)では板を並べた水口施設を有する溝が確認されており、平成8年度調査で確認された水田遺構に続く水路の分岐点であったと思われる。水田跡の畦畔等に続く痕跡は見られず、本遺跡の弥生水田の範囲を知る上で成果があったと言える。

(宮川彩)



区 遺構略図 (S=1/300)



-B区 掘立柱建物



-D区 水口遺構

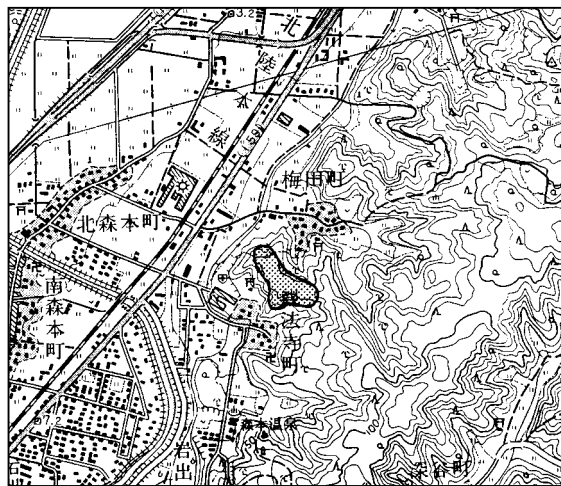
かんぼうじ
観法寺古墳群(第2次調査)

所在地 金沢市観法寺町地内

調査期間 平成11年5月20日～平成11年12月10日

調査面積 1,800m²

調査担当 安 英樹 河合 忍



遺跡位置図 (S=1/25,000)

観法寺古墳群は、石川考古学研究会が昭和53(1978)年度に行った北加賀地域古墳群の分布調査によって発見され、森下川流域の古墳群の一つとして周知されている。古墳群は丘陵の主尾根に位置する方墳3基(B支群)とそこから派生して平野に向かって舌状に張り出す小丘陵上に位置する方墳2基(A支群)から構成されている。

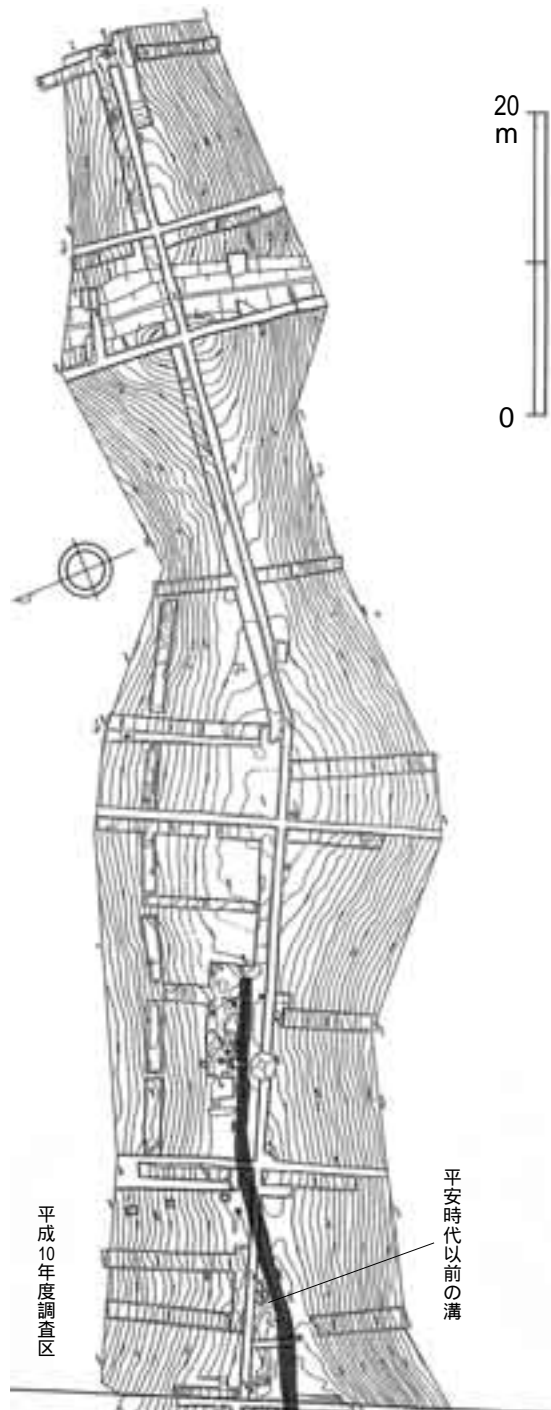
発掘調査はA支群が位置する丘陵の全域を対象として平成10(1998)年度から行っており、今年度は第2次調査となる。今年度の調査区は、A支群を構成する1号墳・2号墳の東側に接する尾根部分と、南側に接して派生する小尾根部分であり、観法寺谷遺

跡の調査による中断を挟んで実施した。前者の区域を東区、後者の区域を南区として説明したい。

東区は1号墳と平成10年度調査区の間位置し、標高は尾根頂部で57m前後を測る。遺構は、尾根筋沿いに溝、1号墳の裾部に周溝を検出した。尾根筋の溝は幅80cm・深さ70cm前後を測り、V字状の断面形を呈する。この溝は平成10年度調査区で検出され、平安時代以前の地境溝のような性格が推定されていたものの延長である。今回の調査ではその西端を検出し、尾根筋に延長約30mにわたって掘削されていることが確認された。この溝と関係しそうな遺物としては、調査区内から平安時代の土師器が出土している。1号墳の周溝は、墳丘の東側を巡って幅1.7m・深さ70cm前後を測り、断面U字状を呈する。弥生時代末頃の土器が出土しており、弥生時代の墳丘墓となる可能性も出てきた。

南区は最高所で標高約52mを測る。東区が位置する尾根との比高差が著しく、地滑りや地震によって崩壊した地形の可能性はあるが、奈良時代以降の遺構が存在することから、崩壊した時期は古墳時代以前となろう。遺構は尾根の先端部近くで土坑、尾根の付け根から中央部にかけて溝・掘立柱建物跡が検出された。土坑は縁が赤化した焼土坑であり、径1m・深さ40cm前後の浅皿状を呈するものが2基あり、うち1基から奈良時代の瓦と須恵器が出土している。溝は幅2m・深さ1m前後の断面U字状を呈し、尾根を断ち切る方向に掘削されている。小型の掘立柱建物跡は1間×1間規模の柱列を2～3組検出している。溝と掘立柱建物跡については、周辺から出土した中世土師器により、鎌倉時代頃の時期と推定している。また、尾根の付け根で西面する斜面からは、遺構と同時期と見られる中世土師器が集中して出土している。これら遺構と遺物は、古代の瓦を出土した焼土坑、中世のきわめて小規模な建物、油煙痕が見つからない中世土師器、陶磁器の欠如等、集落遺跡に見られる様相ではなく、狭小な尾根の立地から考えても、非日常的な性格を濃くする内容と言えよう。

以上、今年度の調査では、遺構は掘立柱建物跡・溝・土坑等が検出され、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器等が出土し、古墳以外の時代・性格の遺跡と複合していることが確認され、遺跡像が大きく変貌した。遺跡の変遷としては、まず弥生時代末から古墳時代は墓域であり、その後の時代は何らかの祭祀・儀礼の空間として意識され続けた場であったと予想されよう。1号墳・2号墳については平成12(2000)年度に調査が予定されており、詳細はその成果に譲りたい。(安)



奈良時代の焼土坑（北西から）



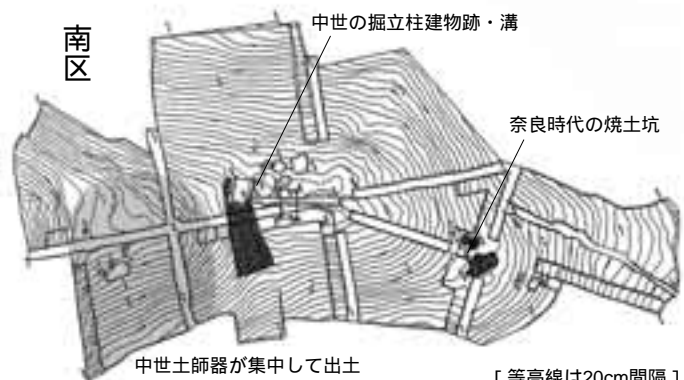
鎌倉時代の掘立柱建物跡（北から）



中世土師器の出土状況（北から）



（約50m先に1号墳）



調査区全体図（S=1/500）

[等高線は20cm間隔]

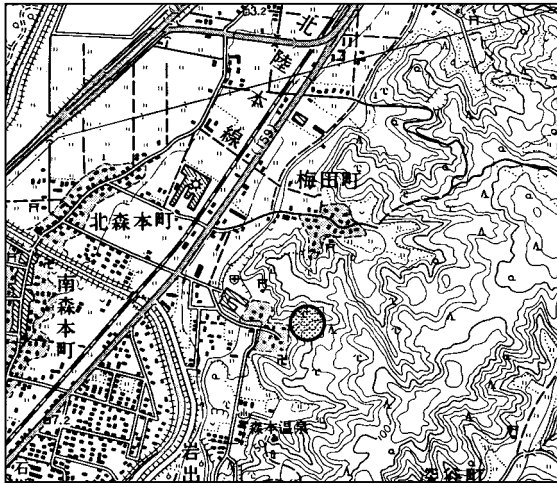
かんぼうじだに
観法寺谷遺跡

所在地 金沢市観法寺町地内

調査期間 平成11年6月28日～平成11年10月27日

調査面積 1,800㎡

調査担当 安 英樹 河合 忍



遺跡位置図 (S=1/25,000)

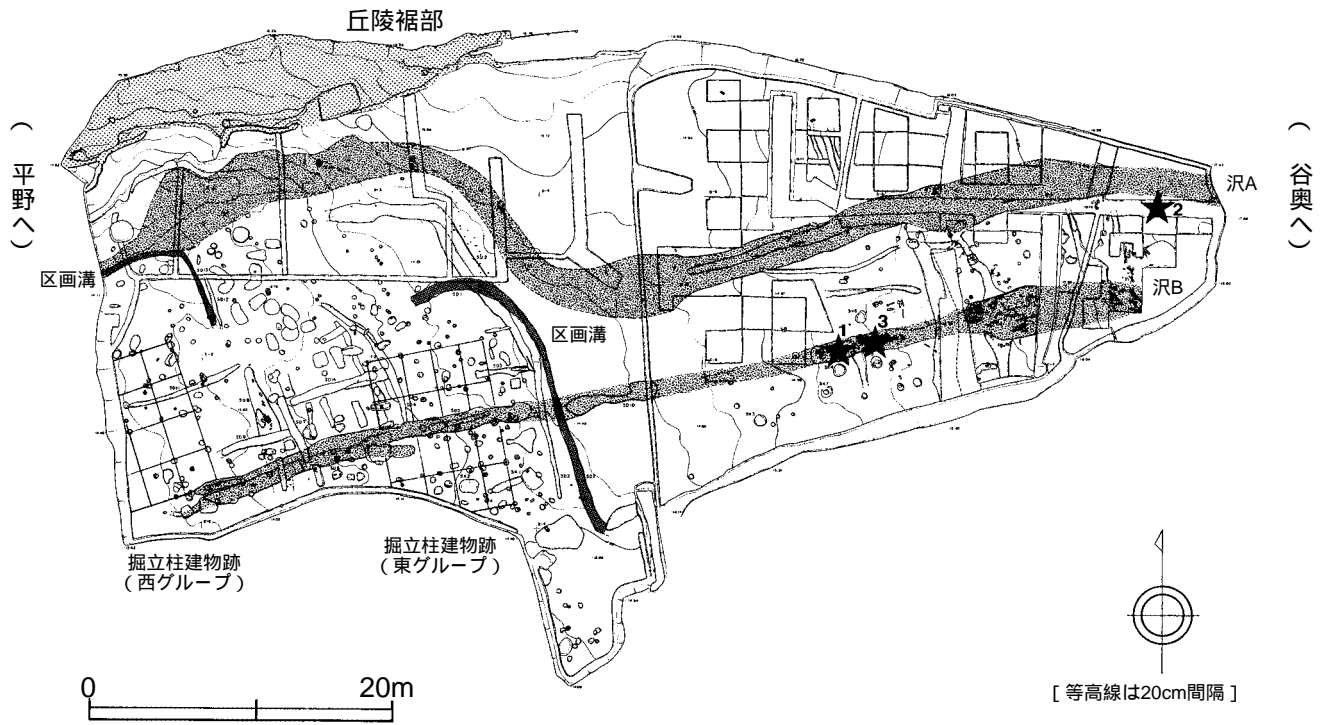
観法寺谷遺跡は、森下川流域に展開する丘陵の裾部に入り組んだ谷間に立地し、観法寺町の集落とその後背山地に挟まれる位置にある。平成10(1998)年度に県教育委員会が行った埋蔵文化財分布調査で新たに発見された遺跡であるが、事前の伐採が十分でなく、地形も複雑であったため遺跡の範囲・層序の十分な把握が困難であった。さらに、発掘調査の着手前に周辺の工事が進行していたために、遺跡の正確な範囲の特定も困難な状況に陥ってしまった。やむなく、可能な範囲において、工事との調整を行いながら手探りで調査を進めざるを得なかった。また、雨天時には谷奥から流出する山水や土砂にも悩

まされている。以上のように、きわめて悪条件下での調査であったが、ともかくも遺跡の性格を把握するために最善を尽くした結果を紹介したい。

調査の結果、標高13～17mを測る谷地形の中で、複数の掘立柱建物跡、溝、土坑の他、谷奥から平野部へ向けて流れる沢と考えられる溝状の遺構が検出された。これら遺構の時期は、出土した遺物から中世前半期に位置付けられ、ほぼ鎌倉時代の中で営まれた遺跡と判明した。掘立柱建物跡は調査区の平野に近い側に複数棟が東西2グループに別れて存在する。ともに山側に区画溝を伴う総柱建物であり、東グループでは同一地点で3回以上の建て替えが確認されている。柱穴は礎板を配したものが多く、柱の沈下を防ぐための措置と見られるが、それでも柱が突き抜けていた例もある。こうした掘立柱建物群と溝は屋敷地の一角を占めるものと推定している。沢は調査区の北半を蛇行するもの(沢A)と、南半を直線的に貫行するもの(沢B)が見られる。沢Aが形状から自然の沢と考えられるのに対して、沢Bは人工的で区画溝のような遺構となる可能性がある。どちらの沢も土砂の埋没^{いっすい}や溢水による流路の変化が積層して確認されており、多量の遺物が出土している。屋敷地と沢の関係は時間差を伴っており、屋敷地が後出的であるが、沢Aについては併存しても矛盾しない位置にある。

遺物は中世土師器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品、銭貨など中世前半期で考えうるほぼすべての種類が出土している。このうち木製品は箸、漆器、曲物容器、横櫛、柄付き工具、下駄、鳥形、柱材、板材、板絵など多種多量であり、特に箸は数百点、漆器は20点以上を数える他、用途不明材や木片も多量に出土している。鳥形は全長約10cm・全高約4cmの彫像で、羽をおさめた鳥がリアルに表現され、羽毛は墨で描かれている。腹部には穴が開けられており、棒などの先に付けられていたものと推定される。出土地点からは居住エリアから離れた「境界」もしくは「水場」の祭祀や信仰に用いられたものと推定している。板絵は折敷の底板を転用したらしい板材に「剃髪・下帯姿で手足を動かしている人物」を描いたものである。どちらも当時の習俗をよくあらわす資料であろう。

遺跡の性格については、その立地や遺構・遺物の内容から一般的な集落とは考えにくい。未だ特定には至っていない。地域の水源ないし山間信仰の場であった地点が屋敷地の一角へ取り込まれていく変遷を想定しているが、今後の整理、検討を通して様々な可能性を追求していきたい。(安)



調査区全体図 (S=1/500)



調査区遠景 (南から)



板絵 (3地点出土)



1地点 漆器の出土状況



鳥形 (2地点出土)

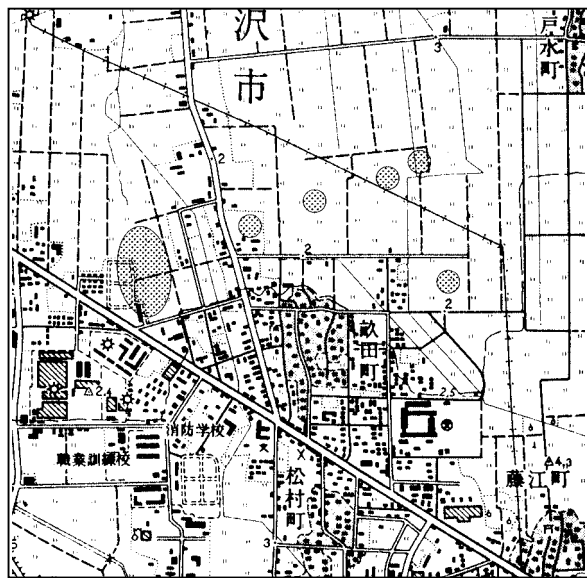
金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査

所在地 金沢市畝田西・中・東、無量寺町地内

調査面積	1.畝田・寺中遺跡他	12,800㎡	4.畝田・無量寺遺跡	200㎡
	2.畝田B遺跡	200㎡	5.無量寺C遺跡	400㎡
	3.畝田C遺跡	1,600㎡	6.畝田ナベタ遺跡	400㎡

調査期間 平成11年4月15日～平成12年1月6日

調査担当 中森茂明 岩瀬由美 白田義彦 和田龍介 西田昌弘 浅野豊子 加藤祐介



遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡群は、金沢西部第二土地区画整理事業に伴い発掘調査を行った。金沢西部第二土地区画整理事業とは、畝田西・中・東、無量寺にまたがる土地区画整理事業である。

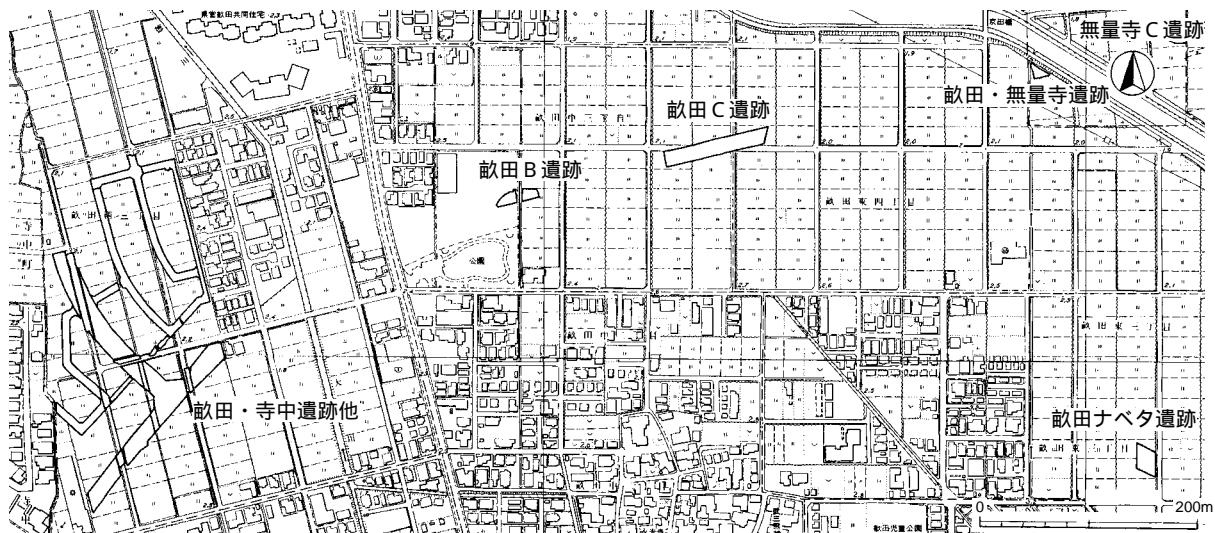
事業地内には周知の遺跡として畝田遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡、畝田D遺跡、畝田ナベタ遺跡、畝田・無量寺遺跡、無量寺C遺跡の9遺跡が存在する。このうち畝田遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田大徳川遺跡の境界については不明確な部分を残している。これらの遺跡は、日本海に近い沖積地に位置しており、現犀川まで約1km、日本海まで約1.5kmを測り、近くには金沢港、金石港、大野港などがある。犀川・大野川河口付近は県下有数の遺跡密

集地で、時代が複合する遺跡が多く存在する。

1. 畝田遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田大徳川遺跡

海側幹線の側道、街路、都市計画道路にかかるものについて調査を行った。本誌の前号で上半期の調査区であるA1・A2区、B区の概要を述べたので、本誌では下半期の調査区の主な遺構を中心に述べる。

G区の中央部とF区の北側で掘立柱建物が検出された。G区のSB02・F区のSB01はともに3×2間以



調査区位置図

上の総柱建物跡になると思われ、共に布堀状に掘り方を設け、長い礎板を設置するものである。柱根、礎板の規模はSB02の方がSB01より大きい。F区で出土した長い礎板は2枚であるが、これらの板は本来1枚であったものを切断して使用している。東側の板は長さ約4.2m、幅約24cm、厚さ約3cmを測る。西側の板は長さ約3.5m、幅約20cm、厚さ約3cmを測る。SB01の柱穴は古墳時代後期の溝を切っていたので、SB01は現時点では古代の建物として考えている。SB02も古代に属する建物である可能性が高い。A2区でも古代の総柱建物跡が検出されているが、建物の規模はG区、F区のものの方が大きい。A2区と別の建物グループが北側に展開していると考えられる。今後の調査により、それら建物グループの関係を明らかにしなければならないであろう。

A3区では多くの井戸が検出されている。検出された十数基の井戸の内、約9割は中世のものとなる。井戸は縦板組隅柱横棧どめの井戸側で水溜に曲物を据えるものと水溜の曲物のみが検出されるものが多い。A3区は井戸が集中するのに対して、堀立柱建物跡の数は少ない。建物の少ない原因として考えられるのは遺構面の削平である。削平のため、深い遺構の井戸のみが検出されたのであろう。このことは耕地整理前の絵図を参照すれば理解できそうである。絵図によるとA3区の中心部分は畑作地になっている。おそらく微高地になっていたため水が引けなかったのであろう。絵図の畑作地とされているところは他にA1区、C2区、E区の北側等である。C2区以外は井戸が検出されているので、絵図の畑作地とされているところは中世の集落と重なる可能性は高いといえよう。耕地整理によって中世の浅い遺構は削平されてしまったのかもしれない。今後の調査により各時代毎の景観と土地利用を追求してゆきたい。また、古墳時代の井戸の底から完形の甕を出土する例が二つあった。F区のSE04とSE08である。

次に旧河道・溝について述べる。上半期の調査では古墳時代中期～中世の溝・河道を多く検出した。下半期の調査ではF区において弥生時代終末～古墳時代前期を中心とする土器片を大量に出土するSD29を検出した。大量の土器片とともに石鏃等の石製品も若干出土している。北東に展開する畝田遺跡に含まれる旧河道だと思われる。

最後に本遺跡を大雑把であるが、概観してみたい。弥生時代終末頃の遺構はF区北側にみられる。それ以外は今のところみられない。畝田遺跡の縁辺部になると思われる。古墳時代前期の遺構はC区に認められるが、それより東は少ない。古墳時代中期～後期、古代の遺構は河道（SD016）に沿うように両岸に展開している。古代に関してはSD016からやや離れて新たな建物グループが出現する。中世の遺構はA3区とF区北側にまとまりがあるようである。

2. 畝田B遺跡

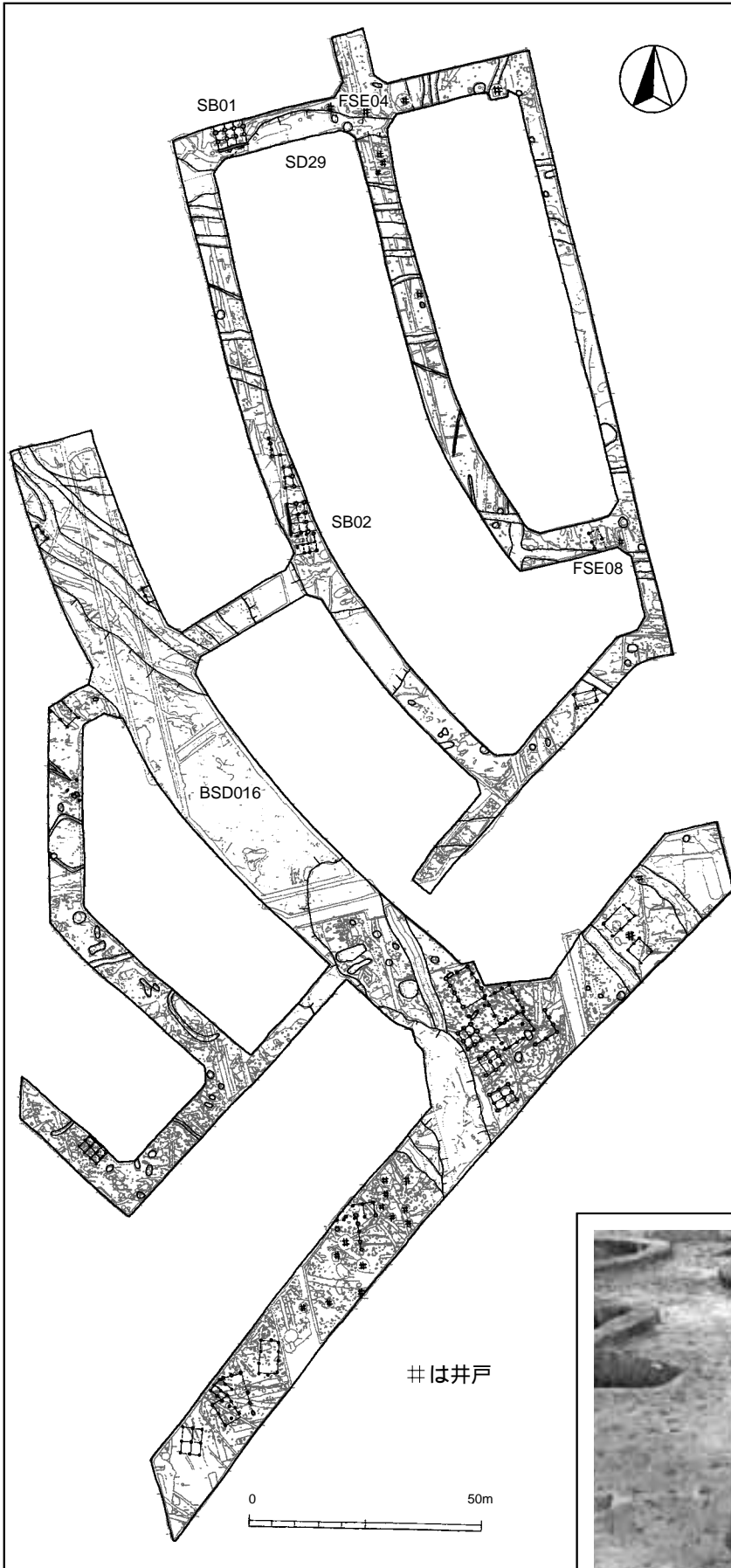
海側幹線の側道にかかる部分の調査を行った。弥生時代の遺構として井戸、土坑、溝等を検出した。



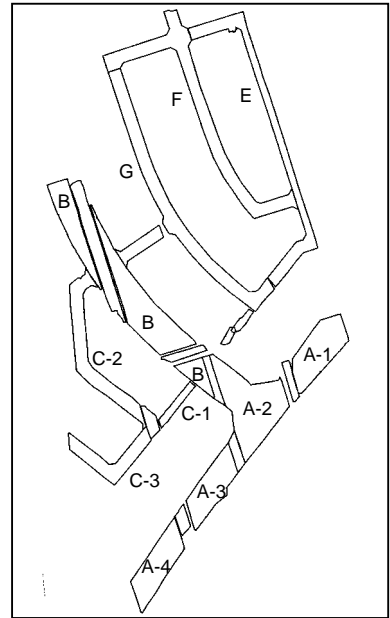
F区 SE08土器出土状況



A-3区 井戸出土状況



畝田・寺中遺跡他の平面図



畝田・寺中遺跡他区割図



SB02礎板出土状況



A-3区 井戸完掘状況



F区 SB01の礎板出土状況（西から）

出土遺物から弥生時代終末の月影式期と比定される。

平安時代の遺構としては掘立柱建物跡5棟以上が検出されたが、内2棟に建て替えの痕跡が窺われた。遺物としては、雨落ち溝と推測される遺構からは全形のわかる遺物が出土したが、他は細片が多かった。また、径約30cmを計る加工痕の残る柱根も6点以上出土している。

3．畝田C遺跡

海側幹線の側道にかかる部分の調査を行った。本遺跡は、平安時代を中心とした集落遺跡で、5棟以上の掘立柱建物跡を検出した。その中でも、2間×5間以上の大型掘立柱建物跡を確認しており、本遺跡の中心的な役割を担ったものと推定される。遺物は土師器を中心に出土しているが、小片が多い。緑釉陶器の出土も比較的目立つ。

また、調査区のごく一部のベース土中に縄文時代後期の土器が認められたが、遺構は確認されなかった。

4．畝田・無量寺遺跡

海側幹線の側道にかかる部分の調査を行った。本遺跡は、弥生時代中期・終末期、古代にまたがる集落遺跡であるが、調査区の遺構密度は希薄だった。このことから本遺跡の縁辺部と推定される。

5．無量寺C遺跡

海側幹線の側道にかかる部分の調査を行った。時期不詳の掘立柱建物跡1棟、奈良時代の井戸跡1基などを検出した。井戸跡からは斎串が数点と須恵器鉄鉢などが出土しており、祭祀に関わる遺物と推定される。総じて遺構密度は低く、集落の縁辺部と考えられる。

6．畝田ナベタ遺跡

都市計画道路にかかる部分の調査を行った。平安時代前期の遺物が出土する溝および柱穴を検出している。南北方向にほぼ直線的に流れる溝から多くの須恵器を出土した。溝より東側では厚さ5cmほどの古代の遺物包含層が残っており、ここからも多くの遺物を出土している。柱穴の堀方は径50cmを越えるものも確認されており、柱根や礎板を良好に残すものが多かった。

掘立柱建物は5棟ほど復元できている。遺物では多くの墨書土器や円面硯などが出土しており、一般集落とは異なる性格を持つものと思われる。 (白田)



畝田C遺跡 縄文土器出土状況



畝田C遺跡 掘立柱建物完掘状況

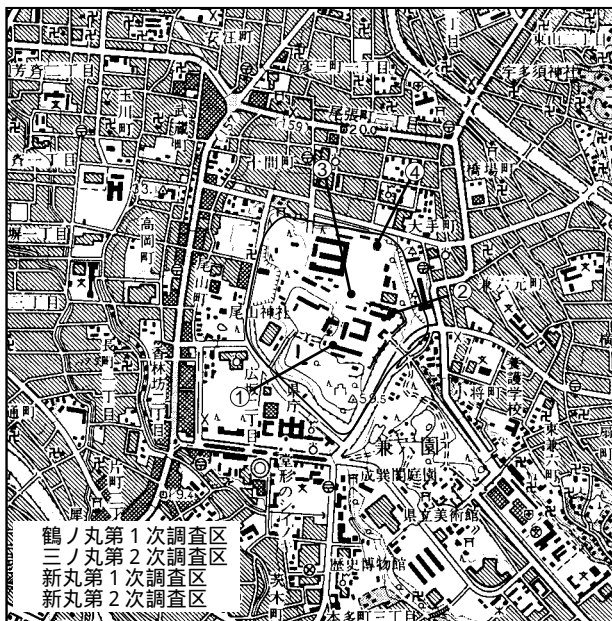
かなざわじょうせき
金沢城跡

所在地 金沢市丸の内地区

調査面積	鶴ノ丸第1次調査区	300㎡	新丸第1次調査区	4,500㎡
	三ノ丸第2次調査区	300㎡	新丸第2次調査区	500㎡

調査期間 平成11年7月29日～12年1月14日

調査担当 滝川重徳 端 猛 熊谷葉月 土田友信 湯川善一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

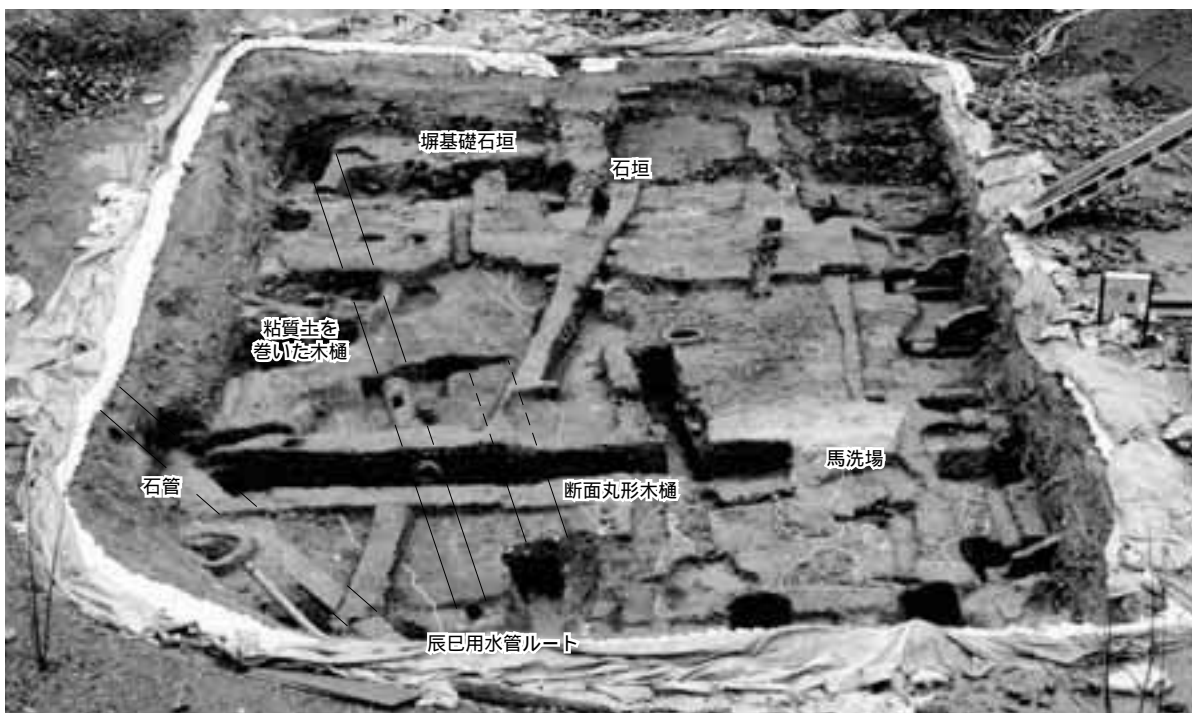
金沢城は、かつて「百姓の持ちたる国」として勢力を誇った一向宗の本拠地である尾山御坊を前身とする。豊臣政権についた前田利家により天正11(1583)年以来、加賀・能登領国支配の拠点とされた近世城郭である。平成9年度から城址公園整備事業に係る埋蔵文化財調査が進行しており、今回は平成11年度調査分のうち主だった箇所について概略を述べる。

鶴ノ丸第1次調査区

本調査区は橋爪門続櫓石垣台南方に位置し、トイレ建設に伴う発掘調査である。主な遺構は辰巳用水管三条・馬洗場・石垣・塀基礎石垣等であり、江戸時代後期の『金沢城絵図』(成巽閣蔵)と大略合致する。

近現代の地層を取り除くと調査区南から二ノ丸方向へ伸びる辰巳用水管が三条検出された。それぞれの管の特徴は、最も古いものは断面丸形の木樋、次は木樋に粘質土を巻き付けたもの、最も新しいものは石管である。金沢城は寛永8(1631)年

丸方向へ伸びる辰巳用水管が三条検出された。それぞれの管の特徴は、最も古いものは断面丸形の木樋、次は木樋に粘質土を巻き付けたもの、最も新しいものは石管である。金沢城は寛永8(1631)年



鶴ノ丸第1次調査区全景 (写真上が北)

に大規模な火災に見舞われ、翌年防火用水と堀を水で満たすため辰巳用水が作られた。逆サイホンの原理を応用し兼六園から標高の低い石川橋を通り、そこから標高の高い二ノ丸へ水を引いた。管内には大変な水圧がかかり、水もれを起こしやすかったと考えられる。3条の管は時代が経つにつれて改良され、より頑丈な構造となっている。先述の絵図中には一条しか描かれておらず、時期を検証すると石管であろう。



辰巳用水、粘質土巻木樋と石管（右端）

調査区南東部には粘土で覆われた一角があり、北西端では凝灰岩の石列が一部検出された。絵図で調査区周辺は厩として利用されており、検出した遺構は馬洗場と思われる。一面に敷かれた粘土は防水用の役割を果たしており、粘土敷の周囲を石列で囲んでいる。



馬洗場の遺構

調査区北部からは極楽橋下の内堀と二ノ丸への通路を区画する石垣台南面・西面の根石と西面から西へ連なる塀の基礎石垣を検出した。

三ノ丸第2次調査区

本調査区は三ノ丸石川門北方に位置し、公園の入口休憩所建設に伴い発掘調査が行われた。現地表面から約1m下の地点で江戸時代後期と思われる遺構面に達した。主な遺構は礎石建物・埋桶二基・漆喰及び磚溜・室状遺構・石組井戸・瓦溜等である。調査区の西側からは江戸時代後期の礎石建物跡を検出し、礎石は切石状の赤戸室石を一点使用している他は川原石で構成されている。礎石建物中央付近からは穴の中に桶を埋め込んだ遺構（各直径80cm）が二基発見され、その周辺は硬化面を形成していた。礎石の配置は江戸後期の『金沢城絵図』（成巽閣蔵）に描かれている与力番所とほぼ一致することから当建物跡の可能性が高い。しかし、東側は近代以降の攪乱を受けており、礎石は検出されなかった。

また、絵図では塀が描かれている調査区北部のところに磚と漆喰片が集中して出土しており、絵図上での塀が海鼠塀である可能性が高い。

調査区東側では川原石で築いた井戸や室状の遺構が見つかったが、これらは出土遺物から江戸



礎石建物跡



石組井戸

時代初期のものと考えられる。

新丸第1次調査区

本調査は湿生園整備に伴う調査である。調査地点は新丸の南部で絵図には堀が描かれている。絵図から読みとれる堀北辺の推定範囲及び周辺にトレンチを入れ、堀の範囲を確認した。

近現代の盛土を取り除くと堀の区画を示す石垣が遺存しており、戸室石と川原石の二種類の石垣を検出した。前者は堀東端から22m西へ伸び、表面の加工調整が少なく隙間に川原石を詰めた打ち込み八ギによるもので、積み方の特徴等により江戸時代初期のものである。このことから江戸時代初期の段階ですでに堀が作られていたことが判明した。幾つかの石には十文字の小さい刻印が正面・側面に見られた。後者はその西側に連続する部分で、明治時代以降に積まれたものである。この石垣のさらに奥で江戸時代の土羽のラインが確認された。



江戸時代初期の石垣



十文字の刻印

このことから江戸時代には土羽であった箇所が明治時代には石垣に変化したことが判明した。

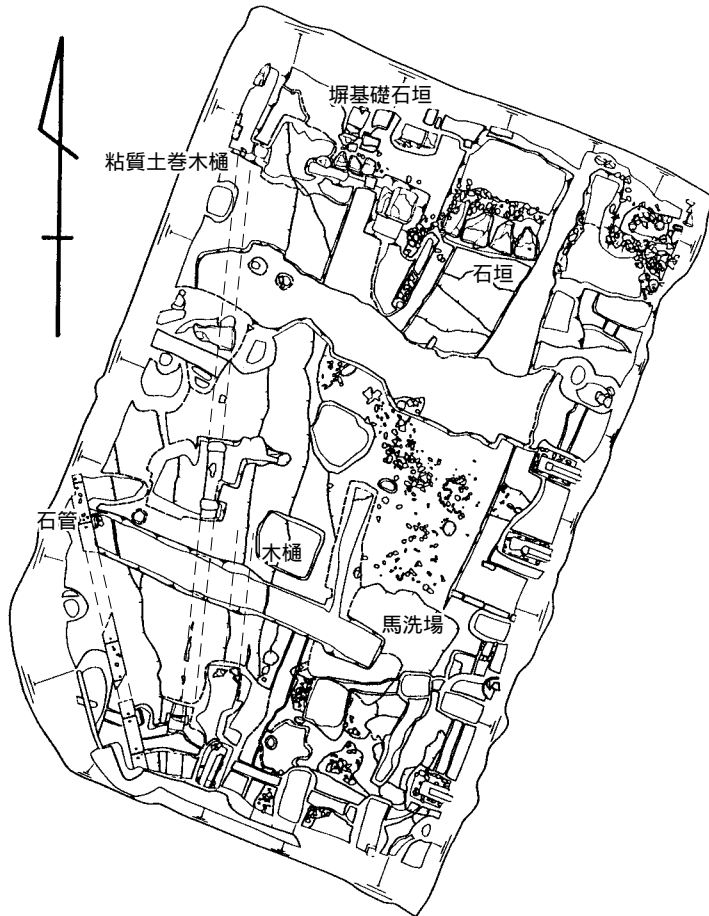
新丸第2次調査区

本調査区は新丸北部で大手門の東方に位置し、トイレ建設工事に伴う発掘調査によるものである。現地表面から約1m50cm掘り下げた後、地山を切り込んだピットや南北に走る溝状の遺構等が検出された。全体的に遺構密度は濃い、これらの遺構の性格は調査区が狭いことなどからはっきりとはしない。しかし、出土遺物の中には16世紀後半の陶磁器が多く、しかもこれらの遺物は前田利家が金沢城へ入城した天正11（1583）年以降の遺物である可能性が高い。これらの遺物は新丸の位置と造成に関して大変興味深い資料である。



新丸第2次調査区全景（写真上が西）

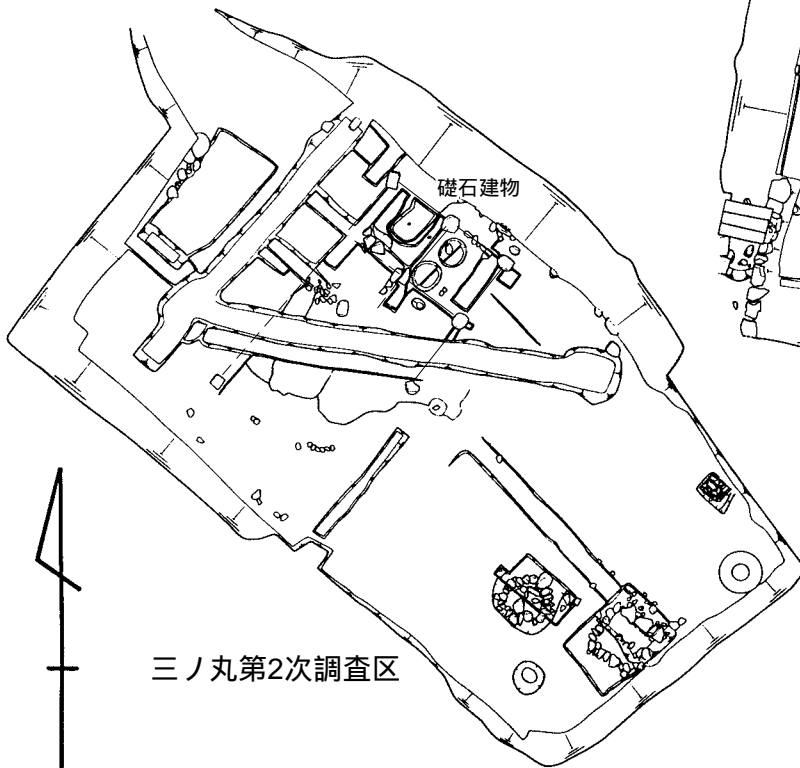
金沢御堂期においては、後の新丸となる地域周辺に関する様相ははっきりしないが、前田利家が入城した後、現在の大手門周辺に新たに町屋が建設され、多くの商人が集まったと言われている。一方新丸は、天下統一を確実なものにしようとする徳川幕府との緊張状態の中で、万が一に備え慶長4（1599）年に造成されたと伝えられている。これらを総合すると、本調査区で検出された遺構は、利家入城後の町屋である可能性が高く、新丸造成時に町屋を取り壊し、城外へ移転させることによって、新丸が形成されたのではなかろうか。いずれにしろ今回の調査は、初期金沢城を考える上で重要な鍵を握るものと評価できる。（土田）



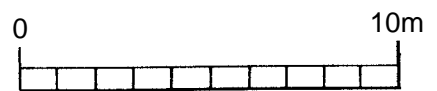
鶴ノ丸第1次調査区



新丸第2次調査区



三ノ丸第2次調査区



各調査区平面図 (S=1/200)

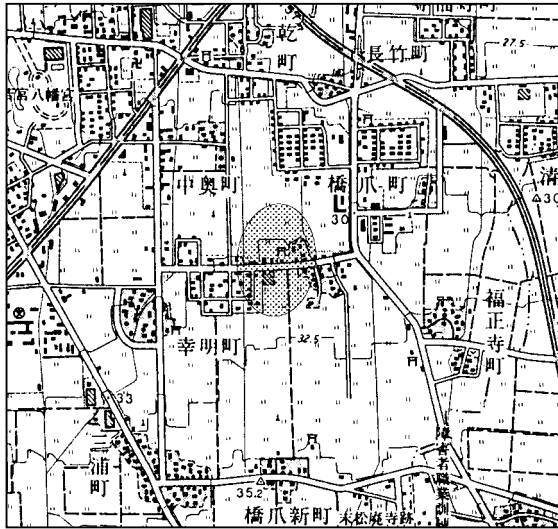
はしづめ
橋爪ガンノアナ遺跡

所在地 松任市橋爪町地内

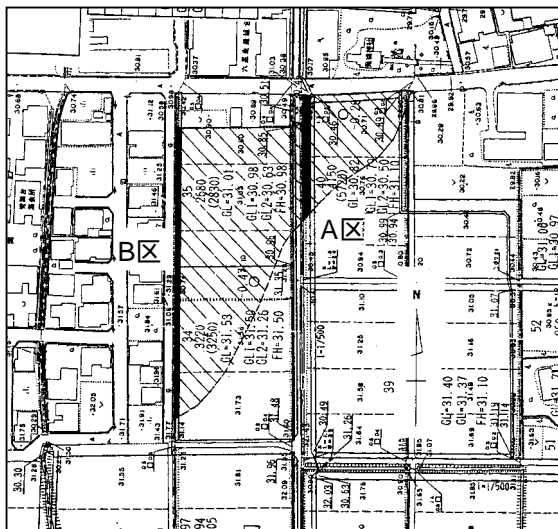
調査期間 平成11年11月22日～平成12年1月14日

調査面積 520m²

調査担当 久田正弘 西田昌弘



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/2,500)

本遺跡は、手取川によって作り出された扇状地の扇央部に立地している。現在は、水田の広がる平坦な地形を見せているが、古くは暴れ川として知られる手取川の氾濫原にあっていた。そのため耕地整理前は、押し流された土砂によって形成された「島」と呼ばれる細長い紡錘形の微高地がいくつも並ぶ景観を見せていたようである。

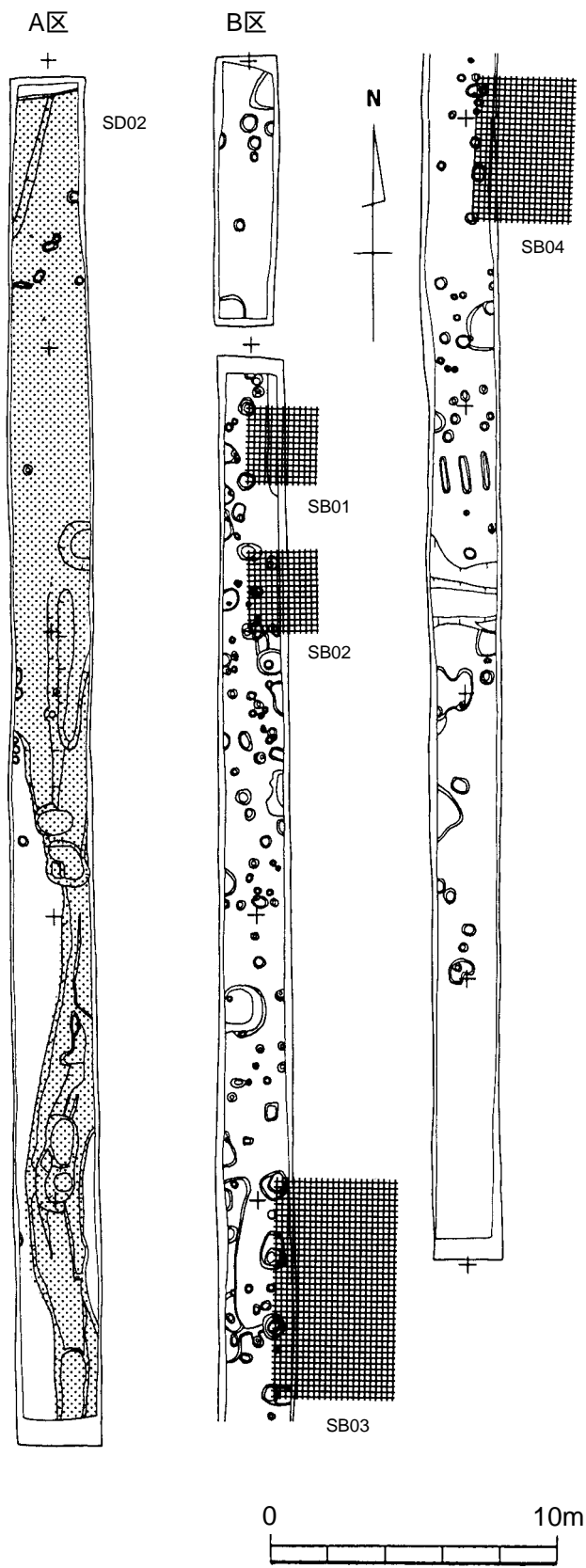
今年度調査区は、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、遺跡の南東部に位置している。

調査区は平行して2列に設定し、東をA区、西をB区と仮称し調査を行った。掘立柱建物跡4棟、溝3条、土坑2基、ピット多数を検出しており、その主たる時期は10世紀代に比定される。遺構密度はB区北側3分の2で高く、4棟の掘立柱建物跡はいずれもこの区で確認されている。それはいずれも軸をほぼ真北に持っていたため、2m幅の調査区内では柱列1列のみが確認出来たとどまった。その内訳は1間分の柱穴が確認できたもの2棟、2間のものが1棟、3間のものが1棟 (SB03) であった。特に、SB03の柱穴は直径90cm前後と大きく、大型建物の存在を予想させる。一方、A区では調査区を南北に走るSD02を検出している。SD02からの遺物出土量は多く、10～11世紀に比定される土師器皿・碗を中心に緑釉・灰釉陶器、須恵器などが多数出土した。この他、鉄斧及び鉄鍋の破片や板状木製品なども若干確認している。また、両区遺構面上には厚さ5～20cmの包含層を確認しており、同様の土器片が多数包含されていた。包含層遺物はSD02上で最も多く、A区南及びB区に向かうに従って希薄となっていく様相が看取された。

一方、今年度調査区における出土遺物を概観すると、緑釉・灰釉陶器の出土量の多さが見てとれる。平成7年度までに行われた松任市教育委員会による遺跡北半部での調査成果と比較してみても、その出土量は多く、遺跡内での場の機能の違いが窺える。また、周辺遺跡と比較してみてもその特異性は窺えられ、本遺跡の性格を考察していく上でも重要な視点となってくる。

本遺跡周辺には、時期をほぼ同じくして再び活発な動きを見せ始める三浦・幸明遺跡や北安田北遺跡などが存在している。平安期における扇状地扇央部開発史を見ていく上で、こうした周辺に立地している遺跡の動きを抜きには考えられず、その流れの中での橋爪ガンノアナ遺跡の位置付けを今後の課題としていきたい。

(西田)



調査区遺構図 (S=1/250)



SD02完掘状況 (南から)



B区完掘状況 (南から)



SB03完掘状況 (北から)



緑釉陶器出土状況 (北から)

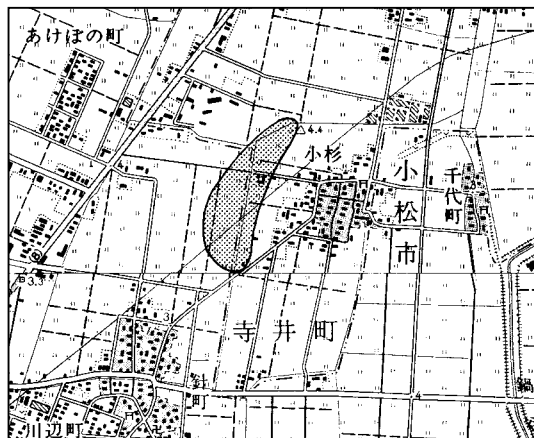
おおながの
大長野A遺跡（第4次調査）

所在地 小松市一針町地内

調査期間 平成11年4月28日～平成11年12月8日

調査面積 5,000㎡

調査担当 本田秀生・布尾幸恵



遺跡位置図（S=1/25,000）

本遺跡は、能美郡寺井町大長野・小杉から小松市一針町地内にかけて所在する。現況は水田地帯となっている。第1～3次調査では、縄文時代・弥生時代・古代・中世の遺構・遺物が確認されているが、平成11年度後半期（13区）は、弥生時代の集落が検出された。

弥生時代の遺構は、炭化物層が顕著に確認される深い土坑が多い。いずれも木製品が豊富に遺存しており、SK255では滑車形木製品ほか堅果類、SK260は鍬・足付盤・竪杵・部材、SK263からは組み合わせ鋤の未製品が出土した。SK260からは、表面に籠痕跡の残る壺も出土している。ピットは少なかったが、柱の残るものも数基確認されている。

国道8号小松バイパス改築工事に係る大長野A遺跡の調査は、今年度で終了である。この調査により、当遺跡は、縄文時代後期後葉、弥生時代中期・後期、古代、中世の遺跡であったことが確認された。今後、周辺の遺跡と合わせて、検討を深めていきたい。（布尾）



木製品出土状況（SK255）



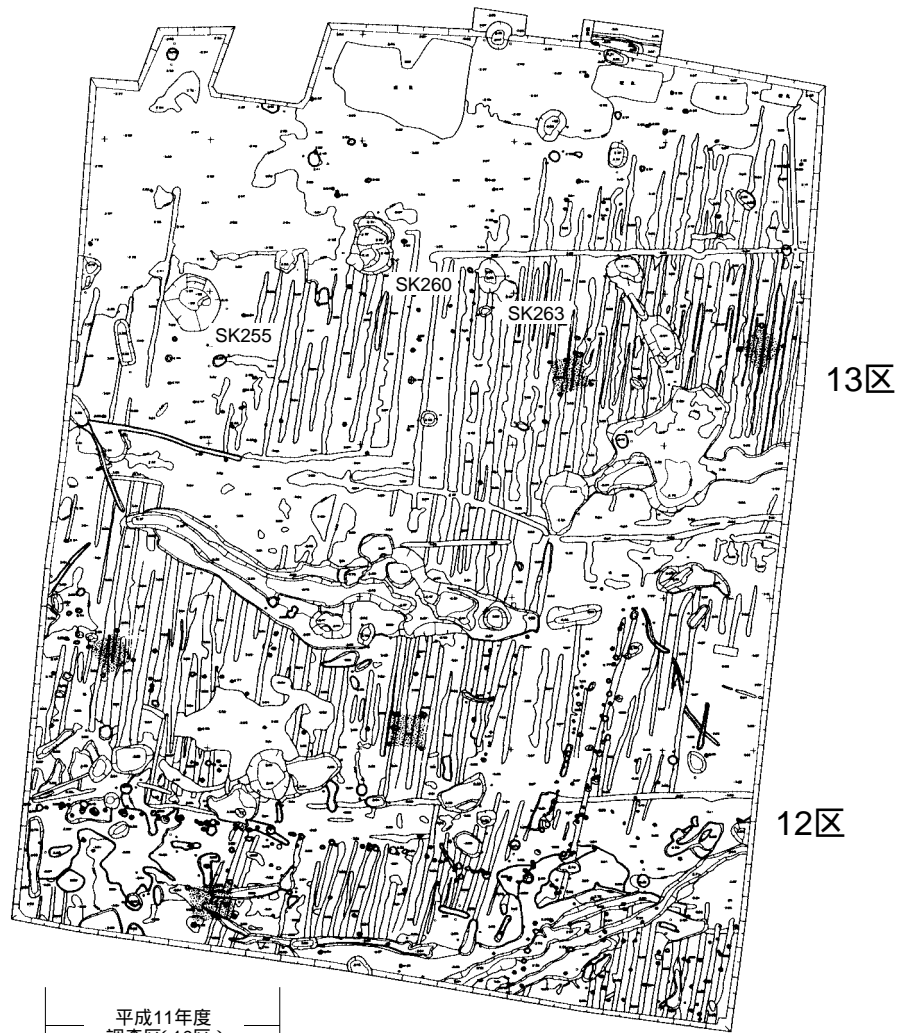
トチ出土状況（SK255）



籠痕のある壺（SK260）



組み合わせ鋤未製品出土状況（SK263）



平成11年度
調査区(10区)



弥生時代建物跡
(検討中)

大長野A遺跡第4次調査平面図 (S=1/500)

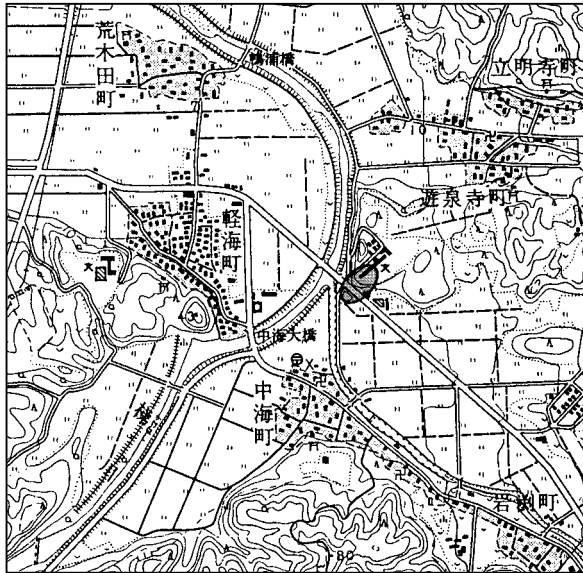
ブッシュウジヤマ古墳群

所在地 小松市中海町地内

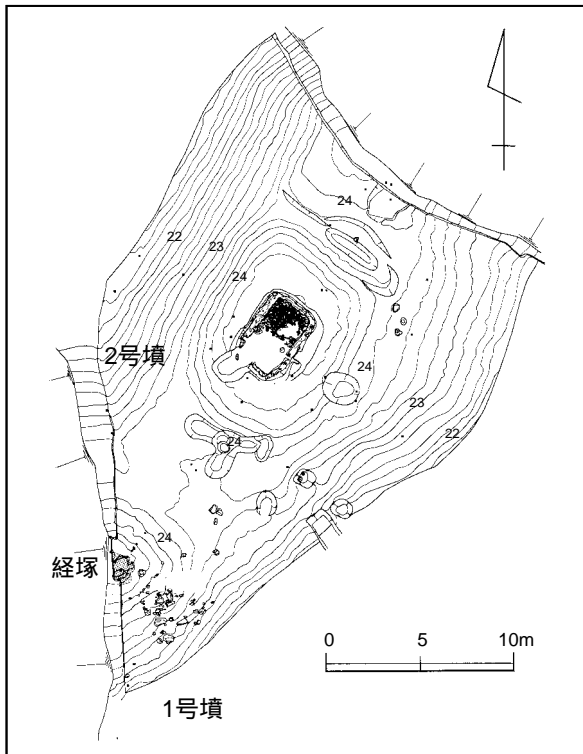
調査期間 平成11年9月6日～平成11年12月24日

調査面積 700m²

調査担当 垣内光次郎 菅野美香子



遺跡位置図 (S=1/25,000)



古墳群 平面図 (S=1/400)

本遺跡は小松市北東部、能美・江沼丘陵から西へ派生する尾根の先端に位置する小規模な古墳群である。小松市内を流れる梯川とその支流であるかすかみ湊上川の合流地点に近接している。標高24mを測り、周囲の田園地帯を広く見渡すことができる。発掘調査は特定交通安全施設等整備に伴い実施した。本古墳群には少なくとも4基の古墳の存在が確認されているが、調査は工事予定範囲内に位置する1号墳と2号墳を対象とした。

1号墳は半分以上が削平されていたが、径約5m、高さ約1mであったと復元できる。墳頂には近世の一字一石経塚を確認したが、墳丘と共に半分以上が失われていた。調査が可能であった範囲を発掘したところ、3cm前後の河原石が24,212個出土した。

2号墳は直径約12m、高さ約1mの円墳で、墳丘、埋葬施設ともに良好な状態で検出した。埋葬施設は粘土と木材で築造されたと考えられる、所謂「箱型粘土槨」「木芯粘土室」等と呼ばれてきたタイプである。南加賀地域に見られる特異な形態で、13例目の確認事例となる。平面形は長方形を基本とするが、角を面取りした形態で、長辺3.7m、短辺2.5mを測り、南西側には羨道を持つ。天井は崩落していたが、粘土壁は築造当時の様相を良く残しており、床面からの高さ約30～40cm、奥壁では60～75°、側壁では30～50°内傾した状態で検出した。また、粘土の内側に木材の痕跡も一部確認した。

埋葬施設の内部奥半には河原石が敷かれており、遺体が安置されていたと考えられる。この石敷部分は盗掘を受けているが、鉄剣、鉄鏃、小刀などの鉄製品が12点出土している。それらの配置

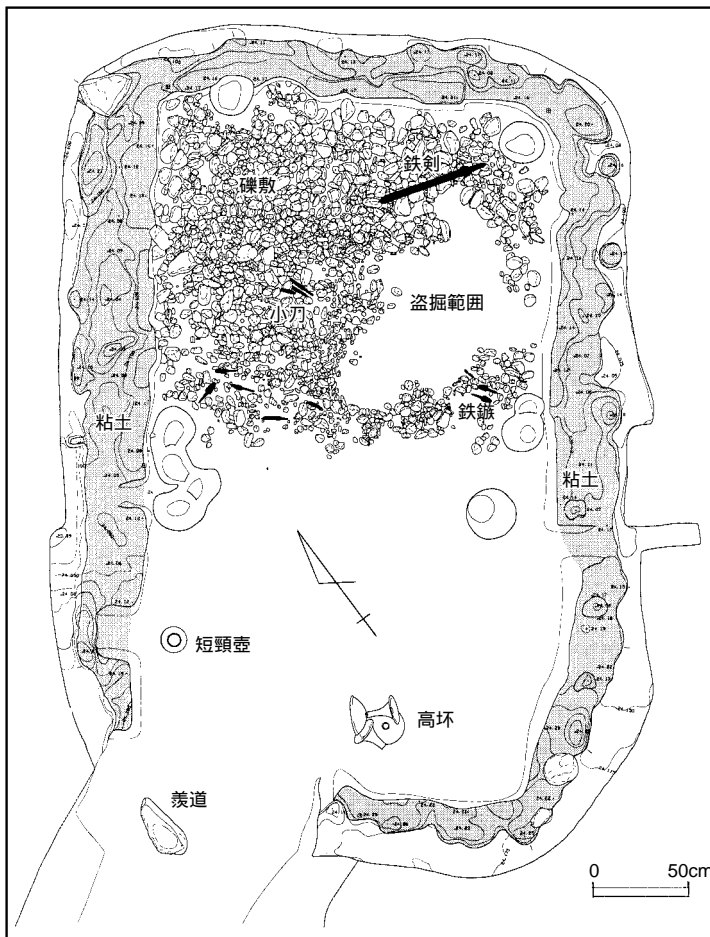
状況より2遺体の埋葬の可能性が指摘できる。石の敷かれていない部分からは、6世紀後半に比定される須恵器の短頸壺や土師器の高坏などが出土している。

また、その他の時代の遺物として、古墳の盛土中と周囲からは、縄文時代と弥生時代の土器や石器が出土している。

(菅野)



古墳群完掘状況（東から）



2号墳埋葬施設床面平面図（S=1/40）



2号墳埋葬施設出土鉄剣



2号墳埋葬施設出土鉄剣

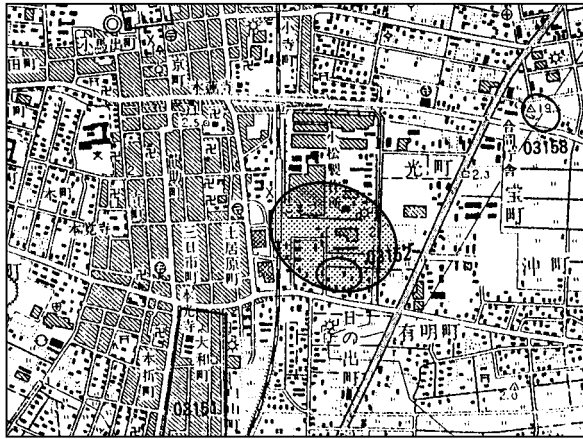
ようかいちぢがた
八日市地方遺跡

所在地 小松市八日市町地方地内

調査期間 平成11年6月21日～平成12年12月24日

調査面積 5,000㎡

調査担当 浜崎悟司 安中哲徳 三谷正輝



遺跡位置図 (S=1/25,000)

八日市地方遺跡は小松市街地の東側に位置し、周囲に平坦な低湿地がひろがる自然堤防状地形に立地している。

この遺跡は、昭和25(1950)年、同36(1961)年に小規模な発掘調査が実施され、出土遺物から弥生時代中期の遺跡と確認された。また平成5(1993)年からは、土地区画整理事業に伴い小松市教育委員会によって継続的な発掘調査が行われている。この調査では、東から西へ流れる旧河道とその左岸に住居跡、方形周溝墓群、環濠などが検出され、多量の土器、木製品、石製品などが出

土している。このことから、本遺跡は北陸地方における同時期の拠点集落とみられるに至った。平成9(1997)年には石川県立埋蔵文化財センターによって旧河道の右岸側で調査が行われ、集落域が旧河道の右岸にひろがることが予想されるようになった。

今年度の発掘調査は、北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に伴い、JR小松駅の旧ホームと本線部分の約5,000㎡について実施した。調査区は小松駅東口と連絡する地下通路をはさんで、南側にS・M地区、北側にN南・N北地区を設定した。以下、各地区の調査概要を紹介する。

S地区

S地区は調査区の南に位置する。遺構は溝2条、土坑5基、ピット群、旧河道を検出した。旧河道は小松市教育委員会が調査した旧河道の下流部と考えられる。河道からは弥生時代中期前半～中期後半の土器の他、鋤や鍬の未成品、斧の柄、竪杵、杓子の未成品、蓋などの木製品や磨製石斧、環状石斧、管玉、玉鋸、石包丁などの石製品が出土している。

M地区

M地区はS地区の北に位置する。遺構は掘立柱建物1棟、溝5条、土坑4基、ピット群、近世の川跡2条、土坑墓2基などを検出した。調査区の中央に東から西へ流れる近世川があり、南に掘立柱建物やピット群、北に土坑墓が位置している。遺物は近世陶磁器や古銭、煙管などの金属製品、弥生土器、管玉未成品、石斧などの石製品、柱根、梯子などの木製品が出土している。また土坑墓(SD26)からは弥生中期前葉の甕が出土している。

N南地区

N南地区はM地区から30m北に位置する。遺構は方形周溝墓6基、溝8条、土坑4基などを検出した。方形周溝墓群は隣接する周溝墓と溝を共用しており、計画的な配置がなされている。また、方形周溝墓群と重複して浅い溝が2条重なって検出された。調査区の北西隅のSD36はN北地区へ伸びている。

N北地区

N北地区はN南地区の北に位置する。遺構は溝7条、土坑2基、ピットなどを検出した。N南地区から続くSD36は、幅約2.7m、深さ約1.2mの断面逆台形を呈し、調査区の北東方向へ伸びている。

また、SD36の北にほぼ平行するように伸びるSD32が検出された。幅約3.3m、深さ約0.6mの断面逆台形状を呈している。ともに中期中葉頃に掘削された環濠の一部とみられる。

まとめ

今年度調査では、過去の調査で検出された旧河道の右岸に集落域・墓域が広がることが判明した。

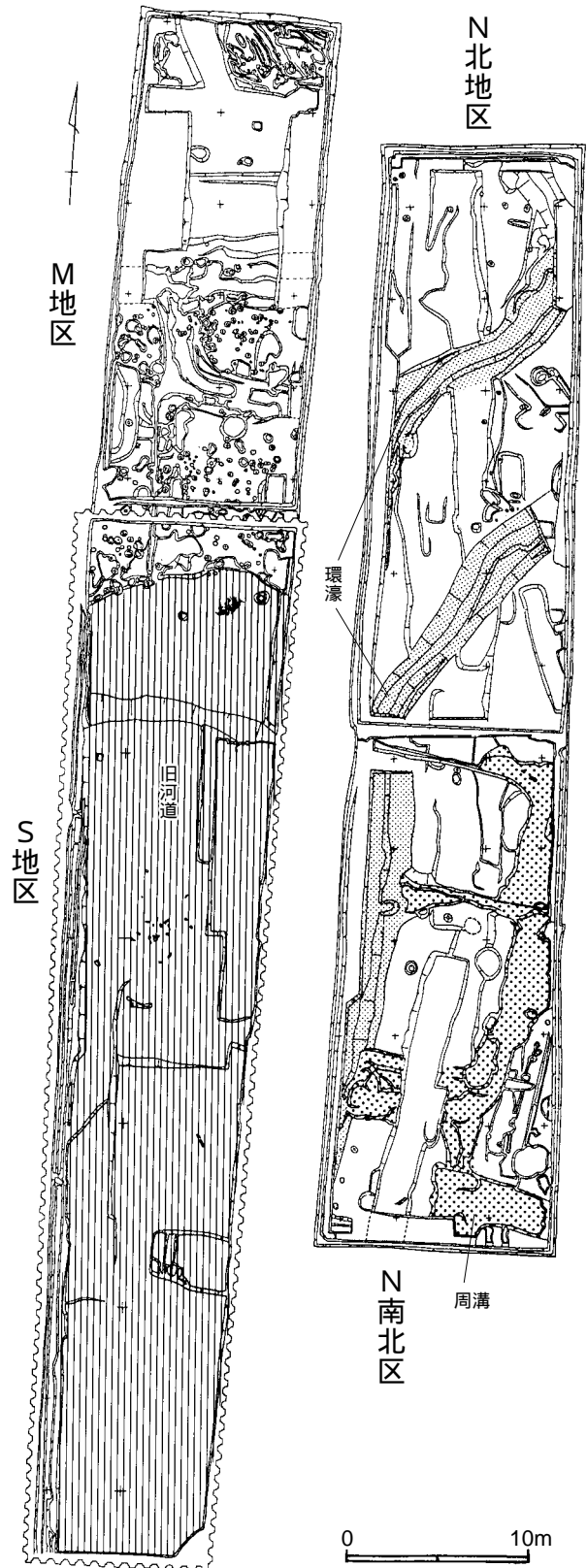
(三谷)



N調査区全景（北から）



S調査区旧河道検出状況



こまつじょうせき
小松城跡

所在地 小松市丸の内町地内

調査期間 平成11年7月22日～平成11年12月6日

調査面積 2,100㎡

調査担当 三浦ゆかり 中西洋司

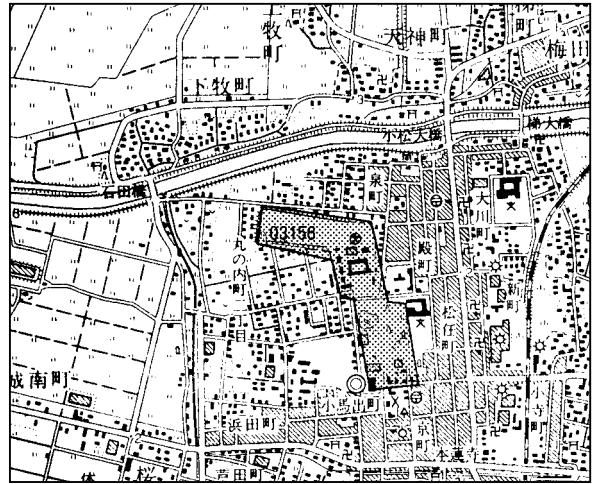
小松城は梯川中流域の左岸に位置し、梯川の水を引き込んだ堀によって何重にも囲まれていることから、「浮城」とも呼ばれた。寛永17(1640)年に加賀藩三代藩主前田利常が隠居城として移住する際に、新たに城と城下を建設した。

小松城の最初の築城者は、若林長門と伝えられているが、文献上から知られる戦国時代の城主は、村上頼勝と丹羽長重の二人である。小松城の絵図で、年代が確実な最古の絵図に承応元(1652)年の「加州小松城之図」があるが、利常在城時に描かれたものであり、それ以前の城の規模や状況については絵図や文献からはうかがうことができない。

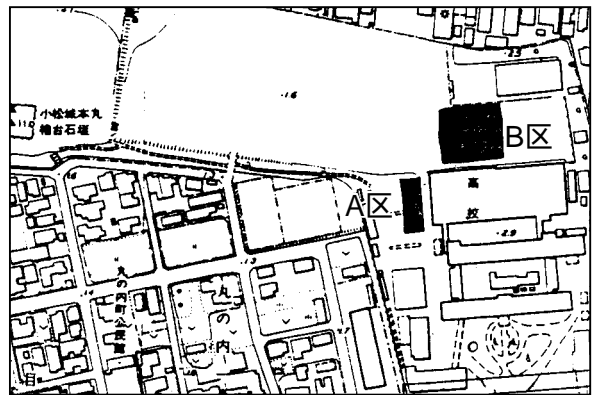
利常没後は城主不在のまま城代・城番が城を管理する時代が続き、明治5(1882)年に城は廃棄された。明治32(1899)年には、石川県第四中学校の校舎が本丸と二の丸の跡地に創設され、戦後は石川県立小松高等学校の校舎として修・改築され、現在に至っている。今回の発掘調査の原因は小松高校の校舎改修に係るもので、調査箇所はA調査区が、前述した「加州小松城之図」から筋違橋の橋台付近、B調査区が二の丸(絵図では三の丸)に比定された。

調査の結果、A調査区(駐車場側)では利常在城時に構築された二の丸の石垣と思われる四段からなる石積み遺構、二の丸と本丸の間の堀、幕末頃に積み直されたとみられる本丸東南隅の石垣の根石である石列を検出した。二の丸の石積みの底には胴木が敷かれており、軟弱な地盤でも沈まない工夫がみられた。下部二段は打ち込み八ギ、上部二段は切り込み八ギで構築されていた。堀底は堀内の土層の堆積状態から、打ち込み八ギと切り込み八ギの境である二段目の石積みの上端(標高約マイナス1.0m)と推定され、打ち込み八ギの石積み部分は露出していなかったものと思われる。石積み遺構の背後には、幅約1.3mにわたって握りこぶし大程の川原石からなる栗石層がみられ、桐紋をもつ軒平瓦が出土した。

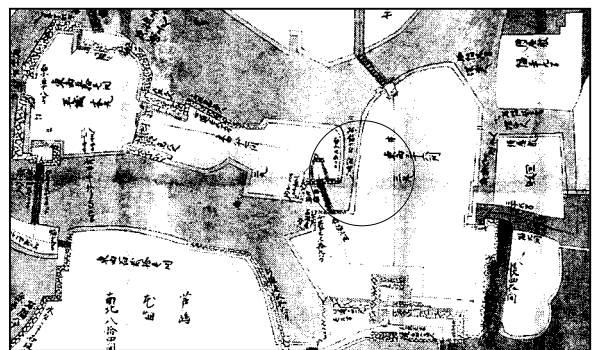
本丸東南隅の石垣の根石とみられる石列は、東西1.6m、南北9.3mにわたって検出された。出土遺物から幕末頃に配列しなおしたものと判断した。根石列から2.6m隔てた外側には、石垣を保護したと



遺跡位置図 (S=1/25,000)



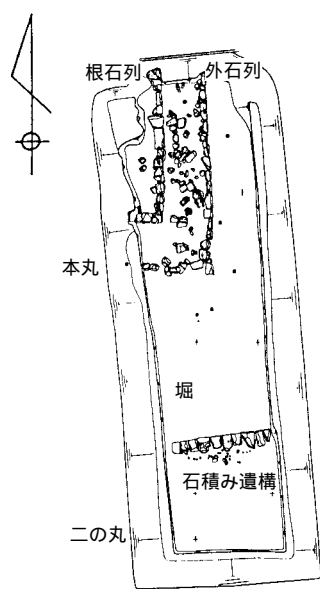
調査区位置図 (S=1/5,000)



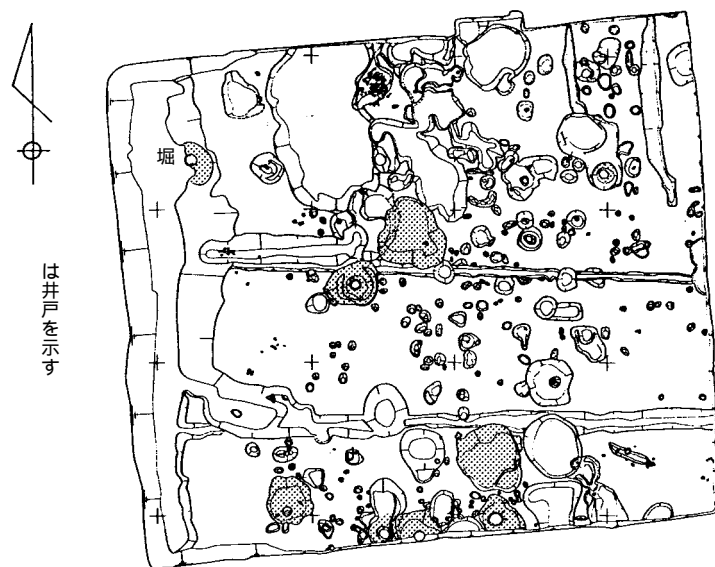
「加州小松城之図」(金沢市立玉川図書館蔵)
囲み部分が調査箇所付近

思われる東西4.4m、南北12.8mにわたる石列と、栗石層を検出した。また石列の石は小松産と思われる凝灰岩の切石からなるが、石垣の根石列には戸室石が二石用いられていた。二の丸の石積み遺構から本丸東南隅石垣の角石までの距離は14.3mであるが、天明6（1786）年頃に成立したと推定される「小松城内分間絵図」には堀幅が7間と記されている。

一方、B調査区（テニスコート側）の二の丸跡では、9基の井戸跡や、土坑や溝、根石をもつ柱穴などが検出された。このうち井戸跡は16世紀末から17世紀後半頃に掘削されたものと推定される。井戸側として結桶が用いられており、二段組のものも3基認められた。結桶の下端部の先端が尖るものもみられ、湧水層である砂層に深く突き刺さるように工夫したものと考えられる。また、瓦が廃棄された近代の遺構も確認され、梅鉢紋や巴紋の入った軒丸瓦などが出土した。（三浦）



A調査区平面図（S=1/500）



B調査区平面図（S=1/500）



A調査区 本丸南東隅の石列

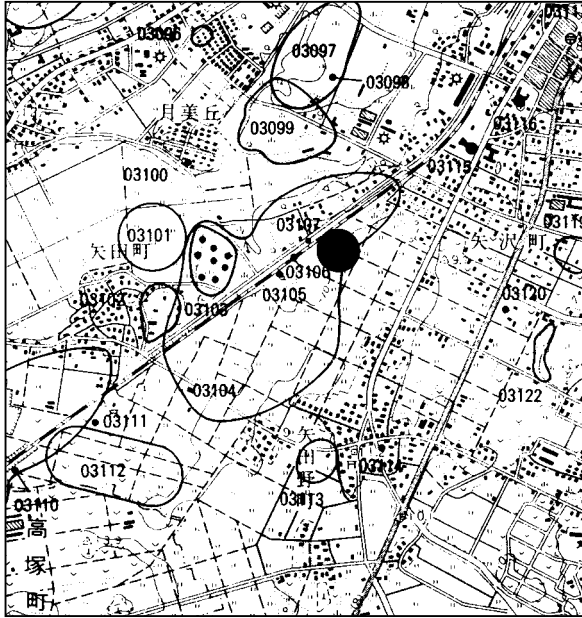
やたの やたの
矢田野遺跡・矢田野古墳群

所在地 小松市矢田野町地内

調査期間 平成11年7月29日～平成11年11月18日

調査面積 1,100m²

調査担当 久田正弘 白田義彦 国守 剛



遺跡位置図 (S=1/25,000)



A拡張区 掘立柱建物



E区 掘立柱建物

矢田野遺跡群は小松市南部に位置し、矢田野遺跡と矢田野古墳群が存在する。平野部内の低台地に立地する。県営ほ場整備事業に係る発掘調査であり、パイプラインと排水路が設置される部分(幅約2m、A～G区)を主に調査した。調査区は大きく9地点(第2図右上)に別れるが、古墳時代後期～古代を中心とする遺跡である。

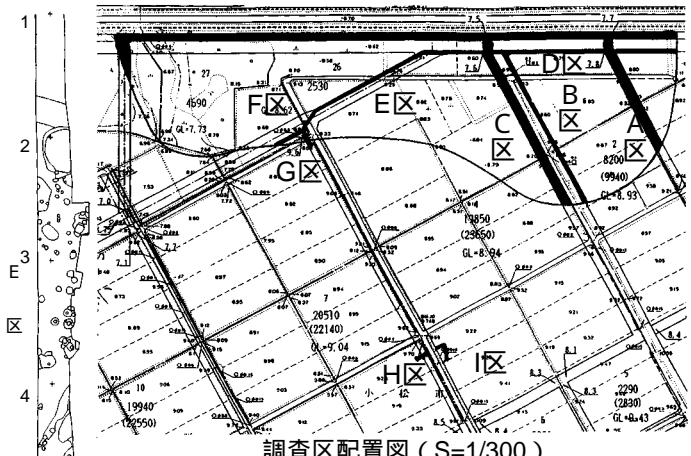
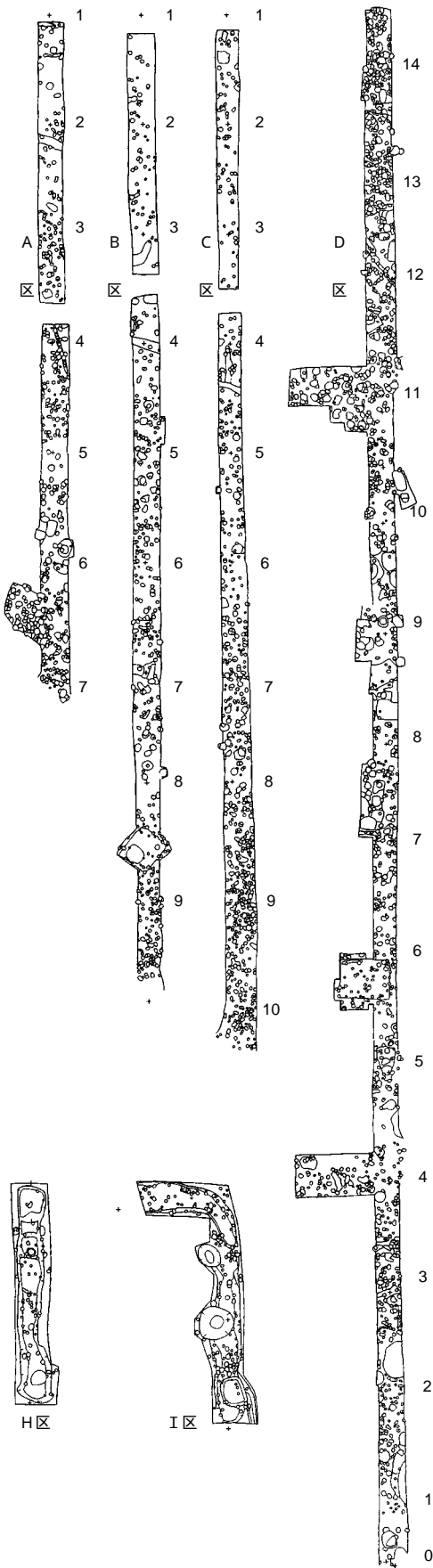
A区では、A4～5区に4×2(以上)の掘立柱建物を拡張区では数棟の掘立柱建物を確認し、B区では掘立柱建物2棟と竪穴式住居1棟を確認し、C区ではB区から続く掘立柱建物(4×4間)を確認した。A～C区にかけて、直線的に延びる溝が存在しており、区画溝の可能性が想定される。

D区北側では、掘立柱建物が5棟以上と竪穴式住居1棟が確認されている。D8～11区の掘立柱建物内には粘土ブロックで作られた竈と思われる遺構が存在した。D1～2区では、中世の土坑が確認され、バンドコ(石製行火)や青磁碗が出土している。D区の南側に位置するE1～2区では、近世前半の井戸が2基存在し、鉄器や伊万里焼が出土している。D区南側～E区北側には、中世～近世前半の遺構遺物が若干ながら確認されている。

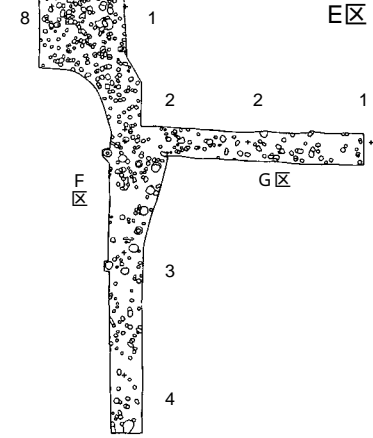
E区では3棟の掘立柱建物を確認し、E4区の溝から須恵質埴輪の破片が数点出土している。調査区内では、古墳の周溝は確認されなかったが、周辺には須恵質埴輪を持つ古墳が存在した可能性が高い。E区南側に位置するF区では、5×3(以上)間の大型掘立柱建物を検出した。

H・I区では幅広の溝が確認され、古墳の周溝の可能性があろう。周辺では、調査されずに多数の古墳が消滅したことが判明しており、矢田野遺跡内でも古墳が多数存在した可能性が想定される。

(久田)



E区 竪穴式住居



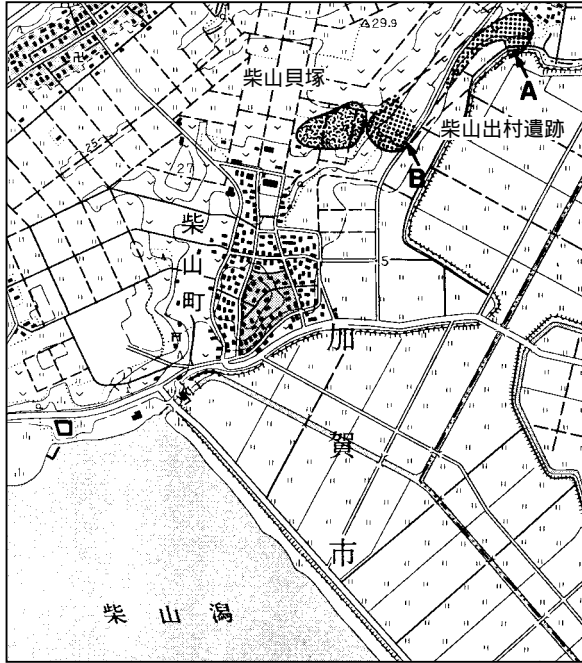
F区 大型掘立柱建物

所在地 加賀市柴山町地内

調査期間 平成11年6月21日～平成11年10月22日

調査面積 1.柴山出村遺跡 1,050㎡
2.柴山貝塚 650㎡

調査担当 立原秀明 浅香直子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

1. 柴山出村遺跡

今年度は、柴山出村遺跡B地点における3次調査である。調査区は、昨年度調査区の北西側斜面上方に位置する。検出した遺構は昨年同様に奈良時代から平安時代にかけての遺構が多く、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、ピットなどがみられた。

竪穴建物跡は、一辺約3.80mのほぼ正方形を呈する。南隅でカマドを検出したが、片方の袖部が辛うじて残る状況であった。竪穴の内外で確実な柱穴はみられなかった。過年度の調査でも竪穴建物跡を検出しているが、同じく確実な柱穴はみられなかった。掘立柱建物跡は2間×2間の総柱建物であった。調査区の中央付近で検出したSX1(土坑群)からは土師器、須恵器などの遺物がまとめて出土した。調査区の東側では、直径約50cm、深さ約30cmを測るピット110を検出した。覆土の上層から小型の短頸壺が出土し、下層には骨片が多量に含まれていた。壁面及び底面に焼けた痕跡はみられなかった。

2. 柴山貝塚

本遺跡は加賀市の指定史跡であり、調査地点は指定地の東側に隣接する調査区と南西-北東方向にのびる調査区である。貝塚の検出が期待されたが、調査区内で貝塚は検出されなかった。昭和30年代の耕地整理によって東側は大きく削平されており、遺構としては、土坑、風倒木痕を検出したのみである。

南西-北東に伸びる調査区では、その耕地整理による流土が厚く堆積しており、縄文中期を中心とする土器や石器を多量に含んでいた。

奈良・平安時代の遺構では、調査区南側で鉄滓を廃棄したと思われるSK2(土坑)を検出した。多量の鉄滓とともに、鞆の羽口が出土している。

(立原)



柴山貝塚(東から)



柴山出村遺跡竪穴建物跡



柴山出村遺跡遺構図 (S=1/400)



柴山貝塚遺構図 (S=1/400)

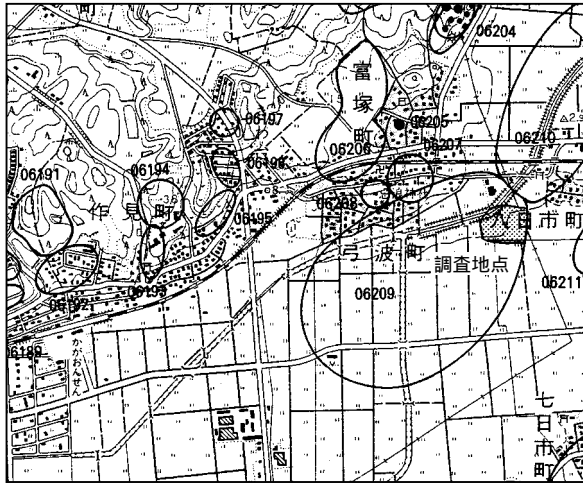
ゆみなみ
弓波遺跡

所在地 加賀市八日市町地内

調査期間 平成11年10月20日～平成12年1月20日

調査面積 1,600㎡

調査担当 立原秀明 浅香直子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

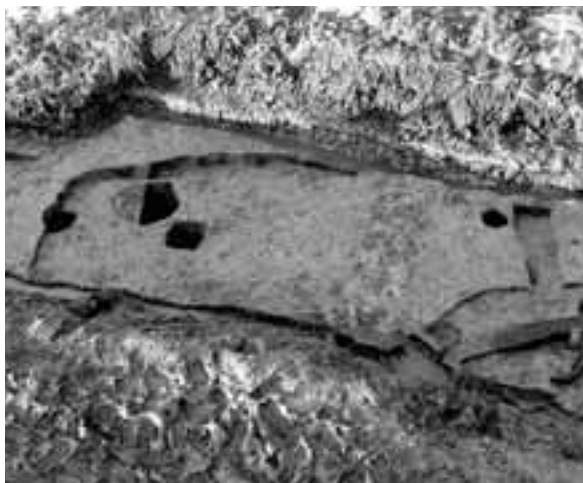
弓波遺跡は、加賀市の北東部にある弓波町と八日市町に広がる遺跡であり、遺跡の北側には南西から北東方向に八日市川が流れている。八日市川の下流域に展開する猫橋遺跡の上流に位置し、弥生時代から中世に至る複合遺跡である。

発掘調査は、県営ほ場整備整備事業を起因とするもので、排水溝・パイプライン・ポンプ場施設の工事部分について行った。便宜上、トレンチ状の調査区を1～9に大別し、以下に調査区毎の主な遺構について概要を述べる。

調査区1では弥生後期の土坑を検出した。調査区2では、中世の土坑と弥生後期の溝を検出した。調査区3のほぼ全域と調査区7の中央以東、調査区8の北端にかけては、南西から北東に流路をとっていたと思われる川跡1を検出した。弥生時代から中世に至る遺物を出土したが、河川の規模に比して、遺物出土量は少なかった。調査区4は、弥生後期の土坑群と竪穴建物を検出した。調査区5の北側と調査区6のほぼ全域では、川跡2を検出した。調査区7の西側では、幅約11m深さ約1mを測る溝を検出した。弥生後期の遺物を多量に出土した。調査区8の東側と調査区9の北側では、川跡3を検出した。多量の弥生後期の土器と少量の板材が出土した。この川の西岸では、竪穴建物や掘立柱建物、土坑を検出した。東岸では、平行する2条の溝が検出され布掘り構造の掘立柱建物と思われる。

結果、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期に比定される遺構や遺物が多く、調査区全域にわたってみられた。古墳時代は遺物が散見できた程度で、遺構は確認できなかつた。奈良・平安時代と中世の遺構・遺物は主に調査区の北西側でみられたが、ともに希薄であった。

(立原)



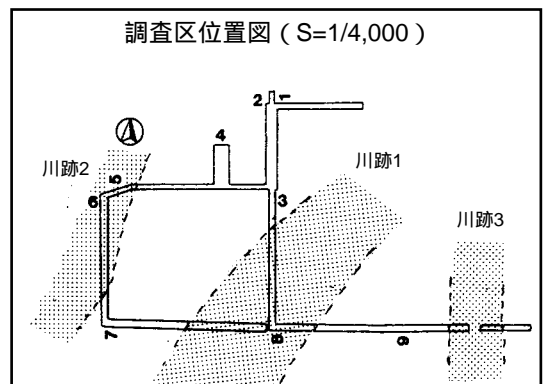
竪穴建物 (南から)



SX6土器出土状況 (北から)



調査区全体図 (S=1/400)



くたに
九谷A遺跡

所在地 江沼郡山中町九谷町地内
調査面積 1,950m²

調査期間 平成11年6月25日～平成11年12月9日
調査担当 土屋宣雄 湊屋玲美



遺跡位置図 (S=1/300,000)



杉ノ水川沿い調査区 (東から)

九谷A遺跡は、大聖寺川上流の渓谷に位置する集落遺跡で、標高210m前後の河岸段丘上に広がり、周囲は500～600mの山々に囲まれている。過去5次にわたって大聖寺川左岸に広がる中世から近世の集落跡が発掘調査されている。今年度は大聖寺川右岸の、本流とその支流杉ノ水川に沿うL字状の調査区について調査を実施した。近接する「大向い」と通称される山裾には、江戸時代前期と後期の2時期に陶磁器を生産した九谷古窯跡群(国指定史跡)が位置する。杉ノ水川沿い調査区(特に 区)は山裾北側に築窯された後期の吉田屋窯からわずか30mの場所である。

大聖寺川沿いと杉ノ水川沿い下流側では、近代以降の水田区画である石垣や石敷きのアゼ、旧河道と中洲状の高まりを検出しているが、遺物の出土はわずかであった。

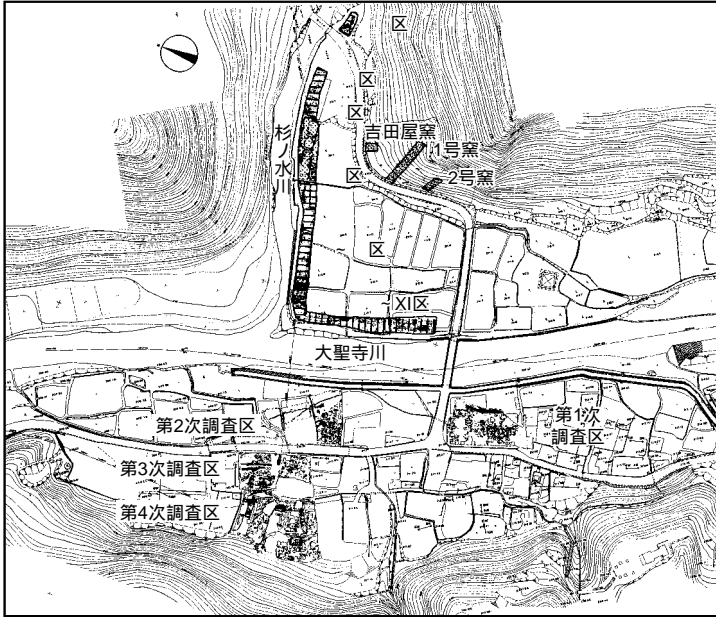
区では、護岸と考えられる川筋に沿った新旧2つの石垣をほぼ重なる形で検出している。旧石垣の時期は不明であるが、新石垣に伴う遺構として、吉田屋窯に関するものを検出している。掘立柱建物跡や陶土が詰まったピット(Pit1)、掘り方東側に煉瓦積みを施し埋土に多量の陶土を含む土坑(3号土坑)等である。これらは吉田屋窯の作業場の一角で、水簸すいひに関連する施設と考えている。

特筆される遺物として、掘立柱建物付近から素焼きの在銘方形鉢が出土している。銘文は外底面に4行にわたって刻書されており(次頁図参照)、1行目の「政」の上は欠損しているが、文政七年の干支が「甲申」の年であることから「文政七年」と判断でき、この年に九谷の地において焼かれた方形鉢と分かる。吉田屋窯の九谷での操業時期は、文献史料等により文政7(1824)年7月から約1年間の短い期間といわれている。紀年銘資料の出土により、操業時期を具体的に確認できる考古資料が得られた。

また、新石垣の北側は窯跡の方から土を運び埋め立てており、その埋土から吉田屋窯の窯道具や陶磁器片が多量に出土している。

以上より、窯跡調査時に得た資料が少なく実態が今ひとつ掴めなかった吉田屋窯の窯資料が増えたことは、再興九谷の今後の研究にとって大きな成果といえよう。

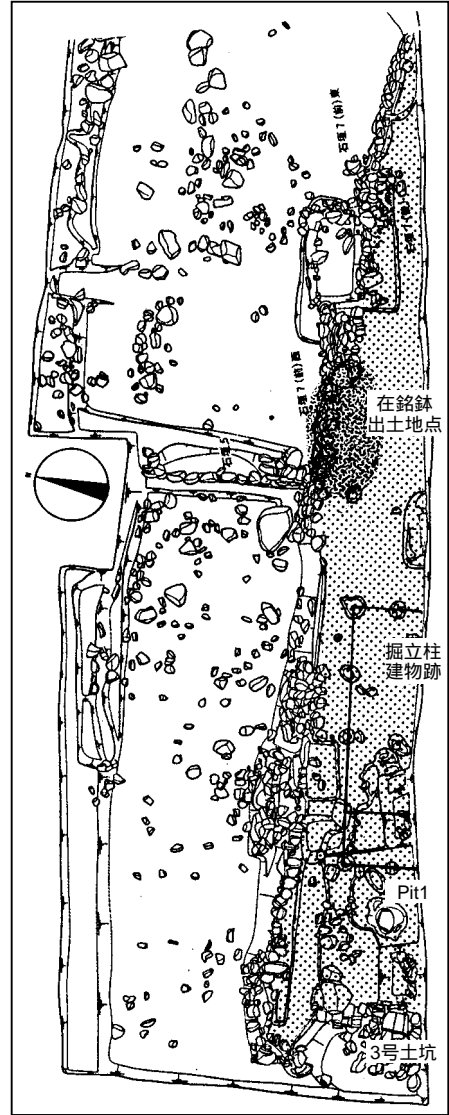
(湊屋)



第6次調査位置図 (S=1/4,000)



護岸の石垣と平坦面 [V区] (東から)



V区遺構図 (S=1/2,000)



3号土坑のレンガ積み (西から)



在銘方形鉢 外底面

④
③
②
①
(文カ) 政七甲申 (八) 月日
加 大聖寺九谷ニ
刃 國
印

紀年銘

平成11(1999)年度下半期の遺物整理作業

企画部整理課

1班 金沢市梅田B遺跡(1995年度調査)出土品の実測・トレースを主とした整理作業を行った。梅田B遺跡は、縄文時代から近世にかかる複合遺跡であり、今年度整理した出土遺物も、土器は古墳時代の甕・壺・高杯から近世の染付碗。木器は古墳時代の杭や板材、鎌倉時代の井戸の支柱。珍しいものでは、平安時代の鉄鍋の土製鋳型や大正時代から戦前にかけての薬瓶、磁器製のコンセントプラグなどが見られ、幅広い時代にわたるものであった。(明田奈々)

2班 羽咋市四柳白山下遺跡(1994・1995年度調査)の整理作業が10月18日に終了し、次に遺構図・トレース作業を中心とした鹿島町武部ショウブダ遺跡(1983・1984年度調査)、金沢市田中遺跡(1991年度調査)、続いて、小松市三谷大谷遺跡(1985年度調査)、金沢市高岡町一ツ水溜遺跡(1997年度調査)、加賀市吸坂E1号墳(1995年度調査)、加賀市黒瀬御坊山A1号墳・黒瀬瓦窯跡(1997年度調査)、津幡町加茂遺跡(1991・1993年度調査)の整理作業を行った。中でも黒瀬御坊山A1号墳では、乳児を埋葬したと思われる甕や、勾玉、鏡、剣、刀等珍しいものに触れることができた。(下村 薫)

3班 金沢市藤江C遺跡(1998年度調査)の出土遺物の整理作業として、数量的には土器約900点、石器40点余りの実測及びトレース作業を行った。縄文時代から江戸時代にわたって多種の遺物が出土しているが、土器に関しては古墳時代前期の甕が大半を占め、これらは完形のもの少ないが、口縁部から体部にかけて残りの良いものもあり、壺・器台・高杯や須恵器の杯・壺なども含まれていた。石器は、打製石斧・磨製石斧をはじめ、輝石安山岩製の石鏃や砥石、緑色凝灰岩製の管玉、勾玉など、弥生から古墳時代のもが見られた。これらの作業を通してこの遺跡は特に古墳時代前期において最盛期を迎え、大きな集落を形成していたことが窺えた。(海野美香子)

4班 加賀市弓波遺跡(1994年度調査)は弥生・古墳・奈良時代の遺跡である。遺物は石器(磨石)・土師器・須恵器、が主でこれらの実測・トレースを行った。次に金沢市藤江B遺跡(1998年度調査)である。この遺跡では須恵器の杯、盤、大型甕、土師器の長胴甕等、木製遺物では焼印の入った樽の部材、井戸枠、石器では石斧を実測、トレースを行った。実測でしっかりと遺物を見ることからはじめ、文様や成形方法、痕跡、調整痕を正確に図に表現することを痛感した1年であった。(池田くみ子)

5班 10月から田鶴浜町三引遺跡(1996～98年度調査)の分類・接合を行った。破片が大きく、大型化しそうなものを中心に、形ある土器になるよう何度も大量のパンケースを見直した。その結果、立派な土器に成長させることができた。その後、田鶴浜町大津くるだの森遺跡(1995年度調査)では500点の縄文土器実測を終え、再び三引遺跡の分類と補強を行った。三引遺跡では、珍しい文様や圧痕の残る底部等、重要な資料を多数分類したことは、縄文を学ぶ上で貴重な経験を得た。(今井雅恵)

6班 金沢市戸水C遺跡・同古墳群(1996年度調査)、近岡遺跡(1997年度調査)の記名・分類・接合を終えた後、戸水C遺跡を中心に木器・金属器・石器(打製石斧・打製石鏃等)の実測・トレースを行った。次に経王寺遺跡(1998年度調査)の記名・分類・接合及び実測・トレースを行った。近世～近代の遺物が主で、様々な染付製品、越前の播鉢・土瓶・行平等の陶磁器類、土人形陶磁器、土人形、土師器皿が殆どを占めていたが、中にはわずかな縄文土器も見られた。中でも内面に割花文が施された青磁の大鉢については特に注目をした。今回整理に携わった事によって、新たに知り得た事が多く、私自身大変勉強になった遺跡であった。(芝山美知代)

7班 加賀市松山C遺跡(1997年度調査)の実測・トレースの後、珠洲市宇治役場裏遺跡(1997年度調査)の記名・分類・接合と実測・トレースを行った。殆どが飛鳥時代から平安初期の製塩土器と

いう珍しい遺跡で、貴重な遺物を多数観察できた。その後は金沢市経王寺遺跡（1997年度調査）の記名・分類・接合と実測・トレースを行った。染付や再興九谷の播鉢等の陶磁器類や土人形、風鐸等の金属製品と近世から近代へと様々な遺物が出土した時代の推移を凝縮した遺跡であった。（博多友子）

8班 金沢市三社町遺跡（1997年度調査）は陶磁器類・木器・金属・石製遺物のトレースを終え完了。続いて金沢市金沢城跡（1997～99年度調査）の整理作業は分類接合はなく実測・トレースであった。三社町遺跡、金沢城跡の時代はどちらも近世であり、金沢城跡の遺物の中には病院の食器らしい陶磁器が見られたり、金属では大量のクギや石垣のすき間に入れてあったカスガイもあり、その中でも刻印のある物も見られ大変興味深い整理であった。（角間律子）

復元班 各班から持ち込まれる土器修復の毎日である。三引遺跡の縄文から藤江B遺跡、吸坂E1号墳、経王寺遺跡の近世まで幅広い時代である。ちょっと振り返れば、我が家でも見かけたような懐かしい物まである。また甕では最初は完形品であっても長い間土に埋もれていて土圧によって歪になり、割れて出土する物も多数ある。変形した遺物をいかにらしく完成品に仕上げるかが、復元腕の見せ所である。こんな作業は楽しみもわいてきます。（前田すみ子）

洗浄班 下半期からアルバイトを6名入れた8人体制で20遺跡の洗浄を行った。（柴山出村遺跡、甘田タイ遺跡、大長野A遺跡、田中遺跡、梅田B遺跡、倉見オウラント遺跡、指江遺跡、橋爪A遺跡、八日市地方遺跡、九谷A遺跡、真脇製塩遺跡、矢田野遺跡、幸町遺跡、大町ダイジングウ遺跡、弓波遺跡、荻島遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田ナベタ遺跡、畝田B遺跡、畝田C遺跡）3班に分けて三つの遺跡を同時進行していたため、他の遺跡の破片と混ざらないように気を使った。（中村真弓）

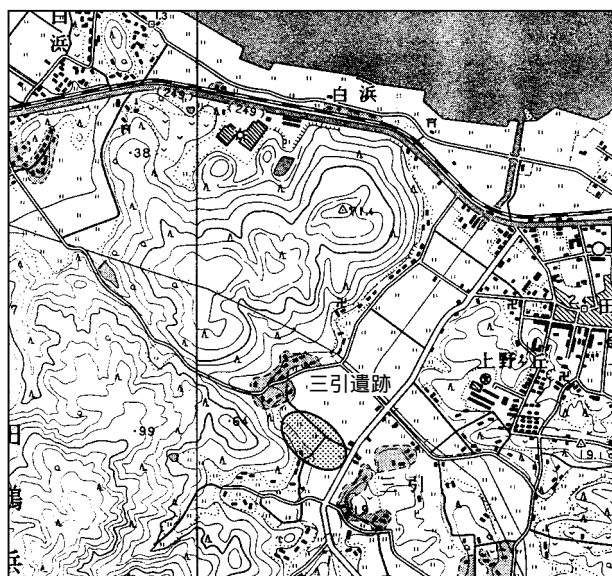
	遺 跡 名	関 係 部 局	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1班	梅田B	建設省						
	四柳白山下							
	武部ショウアタ							
2班	田中	建設省						
	三谷大谷							
	高岡町一ツ水溜							
	吸坂E古墳群ほか							
	加茂							
3班	藤江C	土木部						
4班	波弓	農林水産部						
	藤江B	土木部						
5班	三引	土木部						
	大津くろだの森							
	南黒丸・南黒丸B							
6班	近岡・戸水Cほか	土木部						
	経王寺C							
7班	宇治役場裏	土木部						
	経王寺							
8班	三社町	鉄道建設公団						
	金沢城跡	土木部						

平成11（1999）年度下半期の遺物整理作業



田鶴浜町三引遺跡の貝塚出土品整理作業について

金山 哲哉



遺跡位置図 (S=1/25,000)

1. 遺跡と貝塚調査の概要

三引遺跡は、鹿島郡田鶴浜町三引地内に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。本遺跡の調査は、能越自動車道とその側道建設を原因として、平成6(1994)年から継続して実施し、同11(1999)年9月に完了している。

調査により、縄文時代前期初頭の貝塚が4箇所で確認されたほか、漆塗り櫛を始めとして、多種多様な遺物が出土している。貝塚は、厚さが10~30cmの薄層で、しかも非常に緻密な堆積であったことから、廃棄の単位を捉えることはできなかった。したがって、やむを得ず貝層の大部分を単一層として調査している。

なお、貝塚の調査については、貝塚全体に公共座標に基づく50cm×50cmのメッシュを掛け、検出面から10cm厚毎に順次掘り下げる柱状サンプリング的な方法を採用し、すべての土壌を土嚢袋で採取している。

2. 整理作業の目的について

上でも述べたが、本遺跡の貝塚調査では、貝層のすべての土壌を採取している。本遺跡の貝塚出土品整理作業の目的は、この採取した土壌から得られる様々な資料を分析することにより、縄文人の食料事情を始め、生業活動の内容や貝塚の形成過程、古環境の変遷などを復元することにある。

ただ、採取した土壌は廃棄のまとまりを採取したものではないことから、これらを用いて生業活動のサイクルや貝塚の形成過程を詳細に復元することは困難である。しかしながら、以下のような作業を行うことにより目的に掲げた事象について、ある程度の傾向を掴むことは可能であると考えている。

それには、各地点、各深度におけるサンプル土中の資料の構成や多寡などを集計した上で、測量図や土層断面図を用い、近接する各グリッドの情報を比較・検討するという作業が必要であると考えられる。但し、この作業により深度や地点ごとの傾向あるいは変化を知ることは可能であるが、これだけでは貝層形成と所属時期のつながりが不明瞭になってしまう。幸いにも貝塚には、形成過程を知る手がかりとなる土器資料が豊富に含まれている。勿論、土器の変化する時間が、生業サイクルのそれと大きく異なるものであることは想像に難くない。しかしながら、廃棄区域の大まかな変遷を掴むことができれば、詳細な復元は困難としても、貝塚の形成過程や生業活動の一端、古環境の変遷などの傾向を導き出すことは可能ではないかと考えるのである。

以上の事象について、調査により得られた資料を可能な限り駆使し、明らかにすることを目的として、整理作業を進めていく予定である。

なお、これらの資料調査に採取したすべての資料を対象とした場合、整理作業に多大な期間を要することから、任意に抽出した貝塚面積の約5%に相当するグリッド分の資料を対象とすることとし、現在作業を進めている。

3. これまで整理作業と現状

発掘調査中に採取した貝塚土壌サンプルの総数は10,000袋を越えているが、これらについては一部の保存資料以外はすべて洗浄処理を行っている。

洗浄作業は、第一合成株式会社製ウォーター・セパレーションを使用し、平成10年度は1基、同11年度は5～9月までの5箇月間は3基、10～11月までの2箇月間は7基を導入、1基につき作業員2～3名を割り当てて作業を行った。



貝塚土壌サンプル洗浄作業風景

洗浄作業はすべて三引遺跡の発掘調査現場にて行ったが、平成11年の9月までは調査と併行する形であったことから作業は遅々として進まなかった。しかし、現地調査終了後は調査作業員を洗浄作業に充てることが可能となったため、同年10月からは上述のとおり7基の洗浄器を導入、11月までの2箇月間で同作業は完了している。また、洗浄後の資料の内、4mmメッシュ資料についてのみ洗浄後すぐに埋文センターへ持ち帰り、その他の1、2mmメッシュ資料に先行して選別作業を行った。同作業についても既に終了しており、現在は抽出した特定グリッドの1、2mmメッシュ資料を対象として選別作業を行っているところである。

この選別作業については、4mmメッシュ資料に限り、現場でのサンプリングエラーを補完する目的から全水洗資料を対象として選別作業を行っている。事実、30余点を数える珧状耳飾りや、その他ヤスや骨針などといった微細資料の多くが4mmメッシュ資料から発見されており、手掘りだけではこのような資料の多くが見落とされることが明らかとなっている。

なお、選別作業終了後は、次段階の分類・同定、計測・計量といった作業に随時着手していく予定である。自然遺物の分類や同定作業については、対象資料を5%に限定したとはいえ、一括して同作業を委託できるような量ではない。時間を要することにはなるが、自然科学研究者の指導を仰ぎつつ、図鑑や現生標本などを利用し、できる限り自力で分類と同定を行い、最後に専門家に検証を依頼する方法を考えている。

本貝塚の整理作業が目的とする、縄文人の生業活動や貝塚の形成過程、古環境の復元は、本文中でも述べたように土器の評価とリンクさせて行っていく必要がある。

しかしながら、整理作業の目的として掲げた事象の復元は、主に、貝殻や獣・魚骨、種子といった動植物遺存体に基ついて行われることになる。

現在、貝塚自然遺物の整理作業は1、2mmメッシュ資料の選別作業に漸く着手したところであり、分類や同定など未だ数多くの作業が残っている状況である。



2mmメッシュ資料選別作業風景

土器や石器といった人工遺物と同様に、食物残渣である動植物遺存体もまたヒトの生業活動により作り出された遺物である。

自然科学分析による評価にとどまることなく、これらの動植物遺存体についても、目的とした事象の実態解明のために自ら利用し評価できるよう、今後の作業を進めていく必要があると考えている。

輪島市時国古屋敷遺跡・補遺

安 英樹

1 はじめに

時国^{ときくにふる}古屋敷^{やしき}遺跡は、輪島市^{まちの}町野町南時国の字「古屋敷」に所在する。遺跡は奥能登の旧家「上時国家」「下時国家」が分立する以前に居住していた旧屋敷の比定地として知られており、これまでに1991・1992（平成3・4）年度に神奈川県立埋蔵文化財センターが組織した調査団による発掘調査¹、1997（平成9）年度に石川県立埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われている。1997年度の調査については、それまで不明確であった古代・中世の遺構・遺物²がかなりの量得られており、当財団が整理作業を行い、1999（平成11）年度に発掘調査報告書を刊行している²。

私はその調査・整理作業に関わった者の一人であり、能登地域の古代・中世史に新たな視点を加えるような重要な成果を客観化・基準資料化するべく分析・検討を加えたが、報告書には時間的な制約により十分な成果を盛り込むことができなかった。また、文中に説明不足な点も多かったように思っている。今回、この紙面を借りてその一部を掲載し、報告書の補遺としたい。

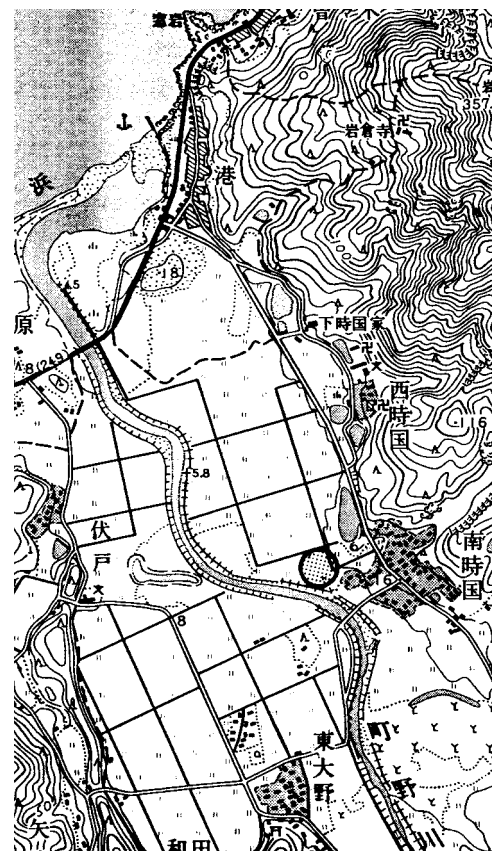
2 出土遺物の計量

1997年度の調査で出土した遺物は、農道調査区ではコンテナ¹型にして10ケース、水路調査区から同1ケースの量になる（木製品は除く）。その内容については、品目、頻度、出土地点を略記し、代表的なものについて実測図化・写真撮影を行い、報告書に掲載している。しかしそれだけでは遺物の実態、特にその頻度が主観的・相対的にしか表現されず、不十分と感じていた。よって、遺物を客観的・絶対的な数値に換算する試みとして、計量を行った。

計量は農道調査区出土遺物（木製品を除く）を対象とし、破片数と重量を測定した。破片数は識別可能なものを全てを数え、接合前の数値とした。重量は0.1g単位で全て読みとった。遺物の分類は、素材で土製・石製・金属製に大別し、それぞれを内容に応じて細別した。土製遺物は磁器も便宜的に含めるものとし、古墳時代以前の土器、古代の土師器、須恵器、製塩土器、施釉陶器、中世の土師器、陶磁器、近世以降の陶磁器、土製品、焼粘土塊の項目を設けた。石製遺物は石器・剥片類と砥石等の石製品に項目を分けた。金



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡の周辺（S=1/25,000）

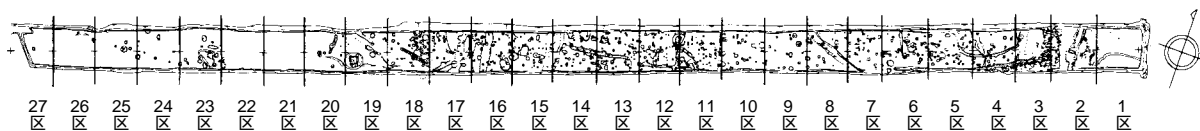
属製遺物は銭貨、簪等金属製品、鉄滓等の鍛冶関係遺物に項目を分けた。土製遺物についてはさらに区分が細かいので以下に、解説しておく。

- ・古代の土師器：食膳具（椀・高杯）と煮炊具（鍋・甕）があり、ロクロ系か非ロクロ系かを区別。
- ・古代の須恵器：食膳具（杯・盤等）と貯蔵具（瓶・甕等）がある。
- ・中世の土師器：基本的に食膳具（椀・皿等）であり、ロクロ系か非ロクロ系かを区別した。
- ・中世の陶磁器：国産の珠洲、越前、瀬戸美濃、舶載の白磁、青磁を区別し、珠洲については調理具（搦鉢）と貯蔵具（壺・甕）を区別した。
- ・土製品：土錘と有孔円盤状土製品を区別した。
- ・粘土塊：土器とははっきり区別できるものであり、土器生産を含む「火処」に関する可能性を考え項目を設けた。

以上の方法で計量した遺物の総量は8,029片・67,181gであった。今回はこのデータを使用して、遺物品目別の量比、遺構別の量比、古代遺構・遺物の量比、中世遺構・遺物の量比を把握することを主な目的として第1～4表に提示してみた。

第1表は出土した遺構の種類別に、分類した遺物の項目別で遺物の全体量を表したものである。遺構の時代は古代・中世にまたがり、量的には中世が多いにもかかわらず、土師器・須恵器等古代の遺物が7,703片（97%）・56,300g（84%）と圧倒的に多い。中でも古代の土師器は4,646片（58%）・26,955g（40%）と大半を占めている。遺構別ではSE（井戸）が飛び抜けているが、この大半は後述する古代の井戸SE2から出土したものである。また、SSは近世の石列・石組溝であるが、遺物総量474片・6,432gのうち古代の遺物が427片（90%）・2,894g（45%）、中世の遺物が26片（5.5%）・2,432g（38%）を占めており、近世の時点で周辺にかなりの遺物が散布しており混入したことを示すと同時に、古代の遺物の圧倒的な多量さを反映している。

第2表は第1表で「遺構外」とした遺物の出土地点別の明細を表したものであり、具体的には表土除去、遺構検出、その後の精査、写真撮影のための清掃、排土等から出土した遺物である。出土地点を記録したグリッドは幅約5m・延長約135mの調査区を5m×5m（25㎡）の正格子で27分割し、東から西へ向かって順に1～27区を設定したものである（第3図）。遺物の分布を見ると、遺物の種類毎にまとまって出土した地点が明瞭になっている。古代の土師器・須恵器は比較的まんべんない分布状況であるが、2・3区と10～19区に顕著な集中がある。遺構の分布と対照させると前者は大溝SD2a、後者は掘立柱建物・溝・土坑等の密集する遺構群の存在に対応することがわかる。一方で製塩土器は11～13区と17・18区にほぼ限定され、主要な遺構が分布する範囲の東西端に偏っており、前者はSB10やSX1、後者はSB16やSE2といった特定の遺構と対応しそうである。中世の遺物は土師器が僅少で、陶磁器でしか分布を追えないが、傾向としては古代の土師器・須恵器と共通する分布状況である。この他、時代がよくわからない遺物では焼粘土塊が14～16区、鍛冶関係遺物が3～6区と16・17区でまとまりがみられる。焼粘土塊と16・17区の鍛冶関係遺物は古代の焼土面・土坑と対応し、3～6区の鍛冶関係遺物は中世の溝に囲まれた掘立柱建物群と対応しそうである。以上のように、遺構外の出土遺物ではあるが、出土地点の記録から、遺構との関連や時期をある程度特定できた。



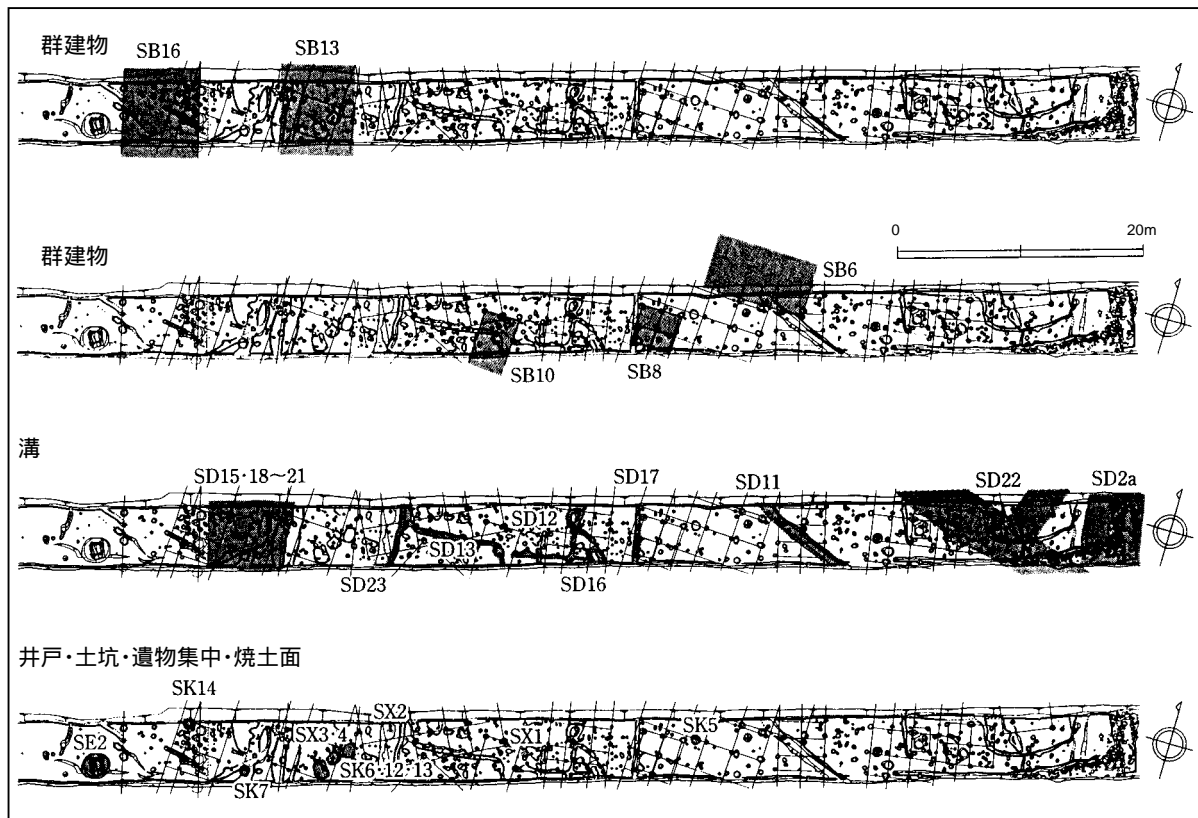
第3図 グリッド配置図（S=1/900）

遺構	詳細	種類	土師器						須恵器		製塩土器	施釉陶器	土製品		粘土塊	石製品	鍛冶関係	合計		
			食膳具				煮炊具		食膳具	貯蔵具			土錘	その他						
			非内黒		内黒		ロクロ	非ロクロ												
			ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ												
SB6	P88	破片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	
		重量	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	6
	P90	破片	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		重量	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	P100	破片	0	0	0	3	0	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	6
重量		0	0	0	4	0	0	7	6	8	8	0	0	0	0	0	0	0	25	
合計	破片	0	0	0	4	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
		重量	0	0	0	10	0	7	6	14	0	0	0	0	0	0	0	0	36	
SB8	P113	破片	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
		重量	0	3	0	0	0	0	9	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
	P127	破片	0	1	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
		重量	0	3	0	0	0	10	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
	P128	破片	0	0	0	2	0	0	1	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	9
重量		0	0	0	6	0	0	3	57	10	0	0	0	0	0	0	0	0	75	
合計	破片	0	2	0	2	0	2	2	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	16	
		重量	0	7	0	6	0	10	12	82	10	0	0	0	0	0	0	0	126	
SB10	P166	破片	0	8	0	0	0	2	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21
		重量	0	49	0	0	0	23	248	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	328
	P209	破片	0	1	0	1	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
		重量	0	4	0	1	0	4	17	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	28
	P216	破片	0	0	0	1	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5
重量		0	0	0	3	0	0	3	36	8	0	0	0	0	0	0	0	0	50	
合計	破片	0	9	0	2	0	3	13	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	32	
		重量	0	53	0	4	0	28	267	44	9	0	0	0	0	0	0	0	405	
SB12	P229	破片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		重量	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	P245	破片	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		重量	0	0	0	0	0	0	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33
	P249	破片	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
重量		0	0	0	0	0	0	13	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	
合計	破片	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
		重量	0	0	0	0	0	45	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	
SB13	P268	破片	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
		重量	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	12
	P276	破片	0	0	0	2	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	15
		重量	0	0	0	62	15	48	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	47	172
	合計	破片	0	0	0	2	3	6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4	17
		重量	0	0	0	62	15	48	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	47	184
SB16	SK8	破片	0	4	0	19	0	0	4	2	146	0	0	0	0	0	0	0	0	175
		重量	0	160	0	79	0	0	81	117	575	0	0	0	0	0	0	0	0	1,012
	SK9	破片	0	0	0	5	0	5	4	0	15	0	0	0	1	0	0	0	0	30
		重量	0	0	0	64	0	32	146	0	88	0	0	0	14	0	0	0	0	344
	合計	破片	0	4	0	24	0	5	8	2	161	0	0	0	1	0	0	0	0	205
		重量	0	160	0	143	0	32	227	117	663	0	0	0	14	0	0	0	1,356	
SE2	掘り方 (層7-10)	破片	4	6	0	133	0	6	21	3	382	0	0	0	0	0	0	0	0	555
		重量	18	43	0	848	0	6	207	314	1,801	0	0	0	0	0	0	0	0	3,237
	井戸側上部 (層6下部)	破片	3	4	0	127	0	7	40	4	107	0	1	0	0	1	0	0	0	294
		重量	10	16	0	1,191	0	58	358	158	627	0	118	0	0	5	0	0	0	2,540
	井戸側下部 (層11・12)	破片	3	3	0	14	0	1	1	1	39	0	0	0	0	0	0	0	1	63
		重量	55	13	0	91	0	2	16	8	226	0	0	0	0	0	0	0	4	412
	細石層 (層13)	破片	0	0	0	17	0	0	5	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	24
		重量	0	0	0	127	0	0	29	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	167
	最下部整地層 (層14)	破片	0	0	0	7	0	0	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	12
		重量	0	0	0	43	0	0	6	5	15	0	0	0	0	0	0	0	0	68
	層位不明	破片	13	48	1	473	0	45	90	26	658	0	0	0	0	0	0	0	0	1,354
重量		32	198	5	2,735	0	215	615	1,369	2,876	0	0	0	0	0	0	0	0	8,045	
合計	破片	23	61	1	771	0	59	159	35	1,190	0	1	0	0	1	1	0	2,302		
		重量	114	270	5	5,035	0	280	1,230	1,853	5,554	0	118	0	5	4	0	14,469		
SD2a	上部 (層11・12)	破片	29	72	15	524	0	15	70	15	13	0	3	0	0	0	0	3	759	
		重量	165	200	118	2,957	0	129	323	522	81	0	250	0	0	0	0	76	4,821	
	下部 (層13)	破片	0	0	0	36	0	0	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	40	
		重量	0	0	0	360	0	0	11	13	19	0	0	0	0	0	0	0	403	
	層位不明	破片	25	4	2	61	0	1	11	2	2	1	0	0	0	1	1	1	111	
重量		61	20	20	317	0	6	55	71	18	1	0	0	0	2	1	1	573		
合計	破片	54	76	17	621	0	16	83	18	16	1	3	0	0	1	4	0	910		
		重量	226	220	137	3,635	0	135	389	606	118	1	250	0	0	2	77	5,797		
SD11	破片	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
		重量	0	0	0	0	9	9	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	29	
SD13	破片	0	0	0	2	0	5	2	2	24	0	0	0	0	0	0	0	0	35	
		重量	0	0	0	3	0	40	53	39	122	0	0	0	0	0	0	0	257	
SD15	破片	0	27	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	
		重量	0	278	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	290	
SD16	破片	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
		重量	0	0	0	0	20	0	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	
SD17	破片	0	0	0	3	0	5	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	15	
		重量	0	0	0	61	0	22	0	56	0	0	0	0	0	0	0	0	138	
SD18	破片	0	0	0	1	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
		重量	0	0	0	3	0	65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	68	
SD19	破片	0	3	0	4	0	0	0												

SK5	破片	0	1	0	11	0	12	2	9	5	0	0	0	0	5	0	0	45
	重量	0	6	0	124	0	143	5	212	11	0	0	0	0	52	0	0	554
SK6	破片	0	1	0	5	0	24	0	0	3	0	0	0	1	0	0	34	
	重量	0	4	0	24	0	634	0	0	17	0	0	0	64	0	0	743	
SK7	破片	0	0	0	16	0	3	3	0	3	0	0	0	0	0	0	25	
	重量	0	0	0	63	0	9	47	0	55	0	0	0	0	0	0	175	
SK12	破片	0	5	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	2	0	0	16	
	重量	0	63	0	0	0	69	0	0	0	0	0	0	15	0	0	147	
SK13	破片	0	3	0	4	0	21	0	1	0	0	0	0	1	0	0	30	
	重量	0	18	0	79	0	601	0	334	0	0	0	0	2	0	0	1,034	
SX1	破片	0	3	0	8	0	219	9	0	3	0	0	0	0	0	0	242	
	重量	0	46	0	59	0	975	42	0	26	0	0	0	0	0	0	1,149	
SX2	破片	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0	0	18	
	重量	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	93	0	0	0	93	
合計 (遺物別)	破片	79	208	18	1,512	3	406	292	84	1,478	1	4	18	10	2	9	4,124	
	重量	346	1,536	142	9,483	15	3,167	2,455	3,643	6,969	1	368	93	147	7	128	28,500	
合計 土師器・須恵器	破片	2,226					376											
	重量	14,689					6,097											

第3表-2 古代遺構出土遺物組成表（-1から続く）

（単位片・g、小数点以下非表示）



第4図 古代の主要遺構配置（S=1/600）

	中世土師器		陶磁器						土製品 (土錫)	粘土塊	石製品 (磁石)	金属製品 (銭貨)	鍛冶関係	合計
	口口口	非口口口	国産		越前	瀬戸美濃	白磁	青磁						
			珠洲 調理	貯蔵										
破片	7	3	28	98	2	2	4	2	10	21	6	3	42	228
重量	173	43	1,814	5,499	55	12	52	12	543	227	22	8	1,575	10,034

第4表 中世遺物組成表

（単位片・g、小数点以下非表示）

第3表は古代の遺構・遺物に限定して、より詳しく量比を表したものである。遺構別では井戸SE2と大溝SD2aの出土量が傑出しており、それぞれ破片数で全体の56%・22%を占める。SE2は掘り方と井戸側上部、SD2aは埋土上部からほとんどの遺物が出土していることがわかる。掘立柱建物は全般に出土遺物が少量な中で、SB10の柱穴(P166)やSB16の柱穴(SK8)が比較的多く出土しており、ともに建物東面の位置にあることは風水的思想との関連を思わせ、興味深い。また、SB13ではこの遺跡でも希少な土師器煮炊具が出土しており、建物内に位置するSK6・12・13やSX3・4と関連するものである。SB16では製塩土器がまとまって出土しており、第2表の17・18区に見る分布と一致する。遺物別では量が多い土師器・須恵器の内訳が明らかであり、少し比較してみたい。土師器は破片数で総量2,226片のうち食膳具が1,817片(82%)と圧倒的に多く、技法では非ロクロ系が2,126片(96%)と圧倒的に多い。食膳具ではロクロ系は後出する11~12世紀代の土師器を含んでいる可能性があり、非内面黒色の非ロクロ系は、黒色化を意図して製作されながらも焼成時に酸化して黒色化しなかったものを含んでいることから、非ロクロ系内面黒色椀の頻度が数値以上に高いことが予想される。須恵器も総量376片のうち食膳具が292片(78%)と多い。貯蔵具は大きく、重いので、見かけの重量は高めの数値を示すが、個体数は決して多くないだろう。食膳具の多さは、遺跡の官衙的性格を裏付ける様相と言える。なお、土師器・須恵器食膳具については、表中の総重量を、ほぼ完形の土師器椀・須恵器杯の重量(時国古屋敷遺跡では報告書第23図3・第21図14が150g前後)で割り返し、大まかな個体数を類推してみた。参考としての数値であるが、土師器椀は97個体、須恵器杯は16個体が算出された。遺構外出土品等を含めるともっと数は多くなる。

第4表は中世の遺構・遺物に限定して、出土量を一括で表したものである。ただし、土錘・粘土塊・砥石・鍛冶関係遺物については古代の遺物と混合している。中世の遺物は、古代に比べて量が格段に少ない上に、遺構からの出土はきわめて希少であった。古代から中世にかけての著しい遺物量の減少は、中世の遺構面が古代よりもやや上位にあることによって、後世の削平による影響が大きかったことも起因しているようだが、根本的に土製食器に対する意識が異なることが大きい³。全体的な組成は、中世土師器はロクロ系と非ロクロ系があり、陶器は珠洲が圧倒的に多く、磁器は舶載の青磁・白磁で占められるという、能登における中世前半期の集落として普遍的なものと言える。

3 古代土師器の編年観

前項で述べたように、出土した遺物の大半は古代の土師器で、特に内面黒色の非ロクロ系食膳具(精製無台椀)が多く、食膳具の中核をなす。この種の土師器食膳具(以下、黒色椀)は、単品では古墳時代のものと区別することが難しく、小嶋芳孝氏が指摘する⁴までは、古代の土師器とする認識度が低かった経緯がある。報告書では形態分類を行い、共伴する須恵器から年代を求め、能登北部地域で卓越する様相の背景について考えたが、比較検討に用いた時国古屋敷遺跡以外の資料についてほとんどふれることができず、やや具体性に欠ける内容となった。よって、この項で他遺跡の資料も含めて補足しておく。まず、須恵器が共伴するか、それに近い一括出土状況の資料を提示し、その変遷を辿る(第5図)。なお、形態分類については報告書のものを準用したい。

資料の提示

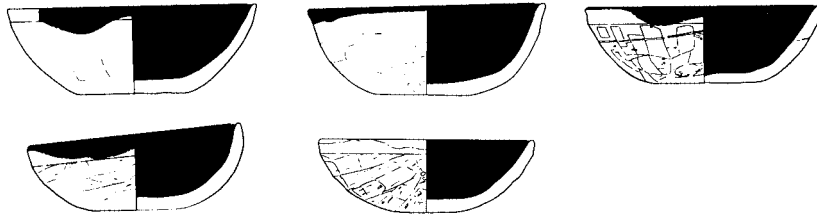
・富来町貝田C遺跡⁵ 1a¹類に分類できる資料がある。一括遺物ではないが、7世紀代の土師器とは区別できる大振りな精製椀であり、8世紀初頭から前半頃に位置付けるのが妥当と判断した。

・富来町東小室キングダ遺跡⁶ pit35⁶ 1a類に分類できる資料がある。共伴する須恵器は₂~₁期(田嶋編年⁷、以下同じ)概ね9世紀前半に位置付けられる。

貝田 C 遺跡

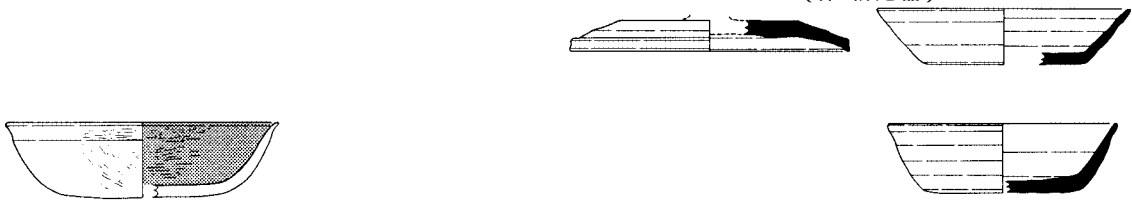


時国古屋敷遺跡SD2a (一部)

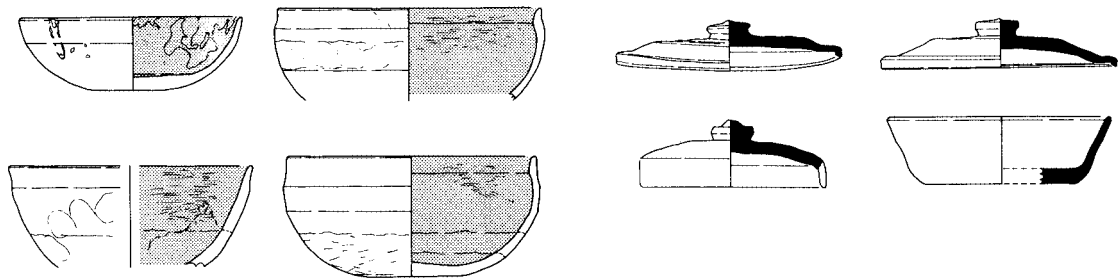


東小室キンダ遺跡pit35

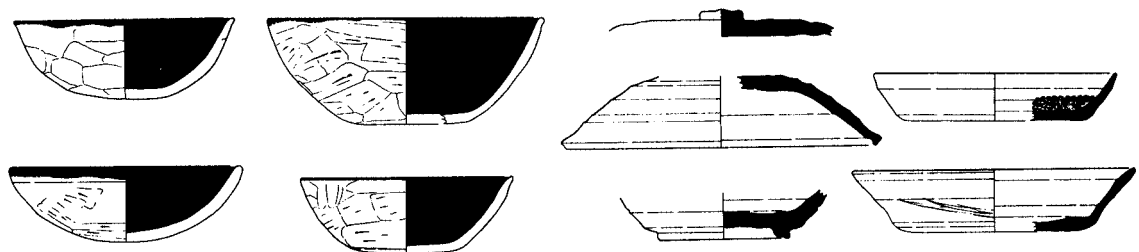
(伴出須恵器)



上町和住下遺跡土器投棄遺構



時国古屋敷遺跡SE2



第5図 古代土師器食膳具の基準資料 (S=1/4)

・柳田村上町和住下遺跡土器投棄遺構⁴ 1a類と1b類の資料がある。共伴する須恵器は₂～₁期、概ね9世紀前半代に位置付けられる。

・時国古屋敷遺跡SD2a 1～3類の資料がある。8～10世紀に及ぶ時期幅が見込まれる大溝資料であるが、黒色椀を後述するSE2資料と比較すると厚手なタイプが目立ち、より古い時期の資料を定量含むものと考えている。

・時国古屋敷遺跡SE2 1～3類の資料がある。共伴する須恵器は₂～₁期（概ね9世紀後半）の群と3期（概ね9世紀末～10世紀前半）の群がある。土師器食膳具との対応は、非ロクロ系黒色椀が前群に、後出的なロクロ系椀が後群に伴うものと考えている。

編年観と変遷

8世紀前半 この種の黒色椀の成立期であり、おそらく貝田C遺跡の1類資料が相当する。類品は羽咋市四柳白山下遺跡（第1次調査）にも見られることから決して局地的な存在ではないだろう。

8世紀後半 確実な資料を欠くが、時国古屋敷遺跡SD2a資料に定量含まれる厚手なタイプや、これと同様の組成を持つ能都町真脇遺跡 区資料⁶の一部等が相当する可能性がある。この段階には1類に加え2類・3類が存在している可能性が高いが、形態差はそれほど顕著ではない。また、資料中には口径の縮小や厚手なタイプが登場している。

9世紀前半 上町和住下遺跡資料と東小室キンダ遺跡資料が位置付けられる。和住下遺跡では薄手化・粗製化・サイズの大小分化が進む。東小室キンダ遺跡ではごく少量しか見られなくなっていることから、この段階には分布が能登地域でも北部、特に鳳至郡域へ限定されていく可能性がある。

9世紀後半 最新相であり、時国古屋敷遺跡SE2資料が相当する。前段階の変化がいっそう進行し、それまで1類と区別が難しかった3類がはっきり認識できるようになる。そして、ほぼこの段階で消滅するものと予想している。

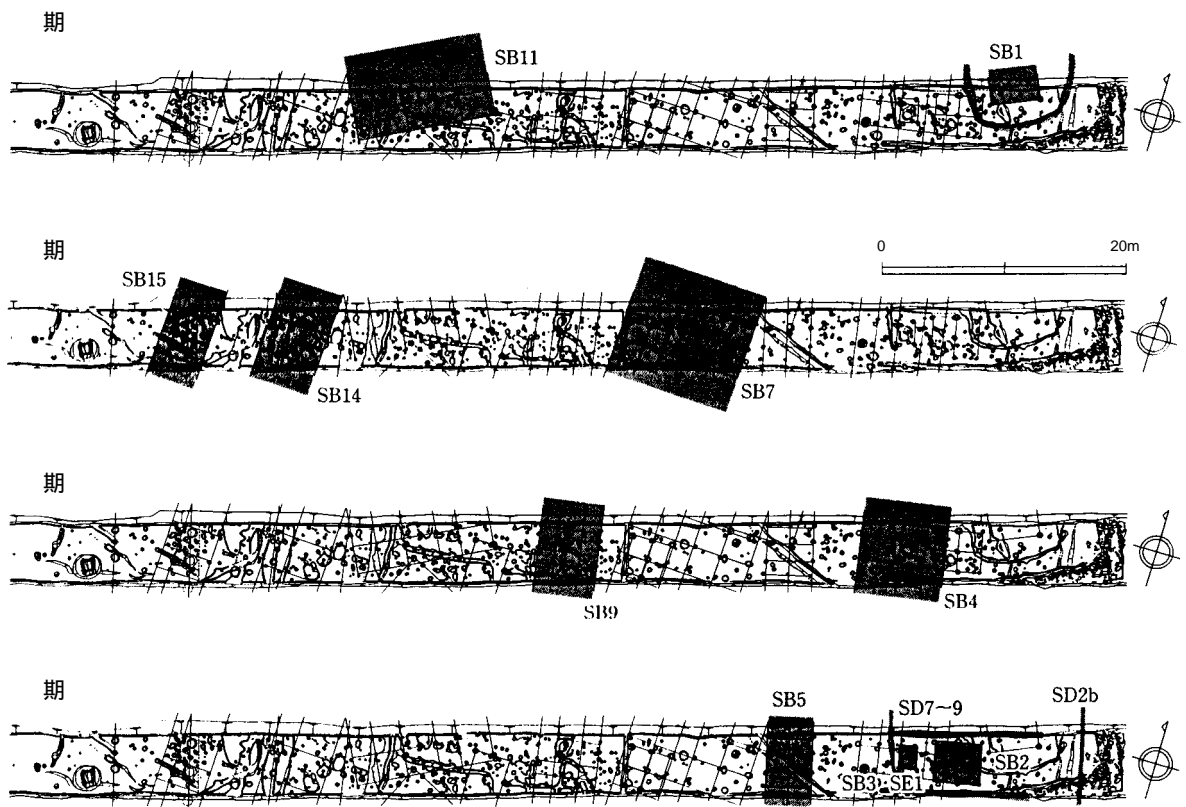
以上の資料には、8世紀代資料が決定的に少ないという时期的な偏り、羽咋郡北部（富来町）と鳳至郡東部（柳田村・輪島市・能都町）という地域的な偏りや、宗教遺跡とされる上町和住下遺跡が含まれる、といった問題が少なくない。よってその変遷と編年観は予察の域を出ないのであるが、今後確実に独自の土師器編年が必要となる地域・器種であることから、その基礎作業と考えて欲しい。

なお、こうした食膳具に加え、煮炊具も含めた土師器全般に非ロクロ系技法が卓越する様相について、報告書では「土師器と須恵器の情報の伝わり方が異なる地域構造が生じさせた」と説明したが、これについても補足したい。具体的には、土師器・須恵器の生産体制に関して、加賀地域では7世紀後半から8世紀前半にかけて土師器・須恵器の生産が技術レベルで一体化し、ロクロ系土師器が出現し煮炊具、次いで食膳具に普及していくが、これに対して能登、特に北部地域ではこうした交流が少ないまま推移したものと考えている。おそらくは、一郡一窯的な大規模須恵器窯跡群を近隣にもたない地域の須恵器・土師器の生産・供給の一端を示すものであり、食膳具において須恵器を凌ぐ量が存在し、その消滅が須恵器生産の終息にほぼ一致する様相もその傍証と言えるかもしれない。

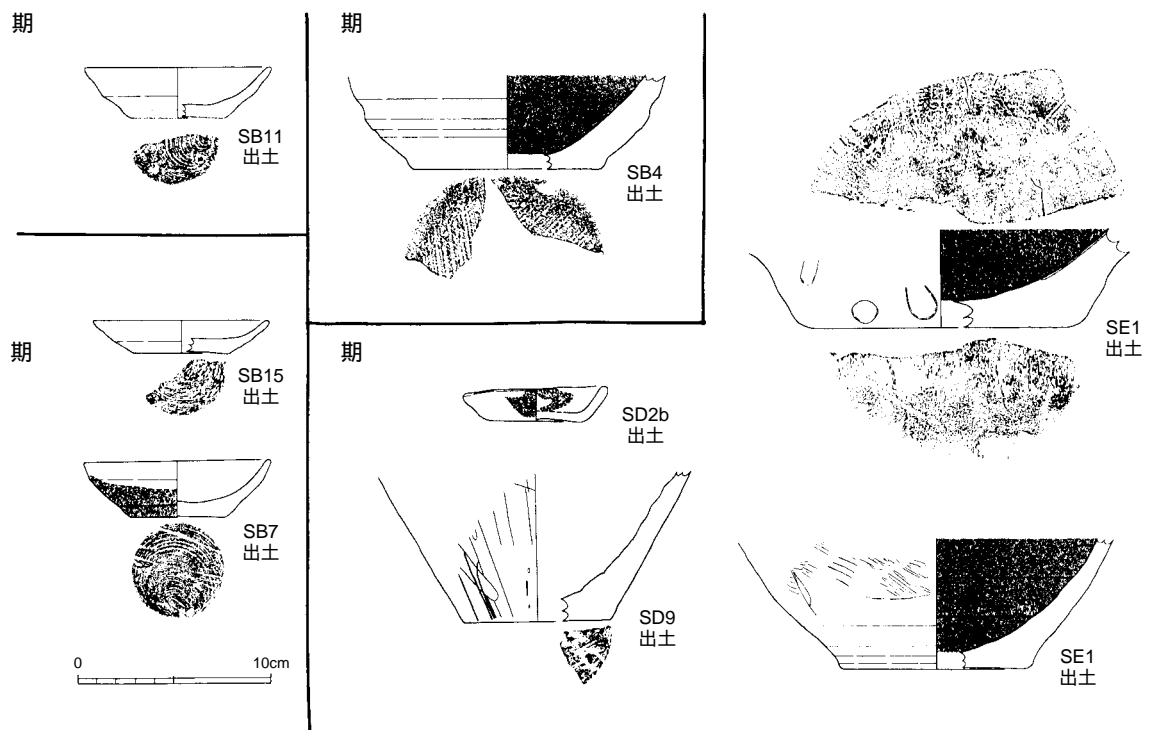
4 中世集落の変遷

報告書では、農道調査区で検出された中世遺構を、掘立柱建物の変遷を指標として₂～₁期に区分し、中世前半期に比定した。その根拠については、掘立柱建物の軸方向のみで決定したのではなく、遺構の切りあい関係や、出土遺物の時期・接合関係も考慮されており、若干補足したい。

₂期と₁期はそれぞれ配置の核となる掘立柱建物であるSB7とSB11の他、₂期のSB15から出土したロクロ系中世土師器を比較し、₂期のものが薄手で稜が鋭いのに対して、₁期のものが厚手で稜が



第6図 中世集落 ~ 期の遺構配置図 (S=1/600)



第7図 中世集落 ~ 期と出土遺物 (S=1/4)

鈍いという形態差が明確であったことから、先後関係を認め、年代を 期・ 期あわせて12世紀代に設定した。

期と 期は、 期の掘立柱建物出土の中世土師器が12世紀代、 期の掘立柱建物SB4出土の珠洲R種壺が静止系切り底であることから珠洲 期⁹（13世紀前半代）以降の時期に位置付けられるとし、先後関係を認めた。

期と 期は、 期の掘立柱建物SB4が 期の区画溝SD9に切られること、SB4から出土した珠洲R種壺と同一個体が 期の区画溝SD2bに切られる層から出土していることから先後関係を認めた。年代は前述の遺物に加えて、 期のSD2bから出土した非ロクロ系中世土師器、井戸SE1から出土した珠洲 期（14世紀代）に位置付けられる珠洲播鉢で設定した。 期は掘立柱建物の建て替えを含めて13世紀代、 期は14世紀代としたものである。

なお、出土遺物にはごく少量ながら 期以前、 期以降の時期が含まれており、古代から近世にかけての、時代の空隙を埋める。こうした資料は、時代によって遺跡の中心地点や、集団の系譜が変わることを考慮しなければならないが、時国古屋敷遺跡の高い継続性を示唆するものと言えよう。

5 おわりに

以上、まとまりのない内容であるが、古代・中世の時国古屋敷遺跡についてより深く理解するために、色々と考えていたことを文章にできた。遺跡の基本的な評価については、報告書と変わりのないで、報告書とあわせて活用していただければ幸いである。

なお、須恵器の年代観については同僚の柿田祐司氏に教えていただき、遺物計量データの整理にあたっては同じく岡田有紀子氏に手伝っていただきました。末尾ながら記して感謝します。

注

- 1 神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編 1995 『奥能登と時国家』調査報告編2 平凡社
- 2 (財)石川県埋蔵文化財センター 2000 『輪島市時国古屋敷遺跡』
- 3 宇野隆夫 1996 「木製食器と土製食器 - 弥生変革と中世変革 - 」『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器』埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会
- 4 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『上町和住下遺跡』
- 5 石川県立埋蔵文化財センター 1995 『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
- 6 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キングダ遺跡』
- 7 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』
- 8 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『石川県能都町真脇遺跡』。資料を実見したところ未図化資料の中に厚手タイプが多く含まれており、全体として時国古屋敷遺跡SD2a資料に近い組成となる。また、同じ調査区から出土している須恵器は8・9世紀代の時期幅があり、やはりSD2a資料と同じ条件である。
- 9 珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』

九泉

野田山墓地覚書～横山家墓地について～

田村昌宏

1. はじめに

前号「九泉」までは、野田山墓地を郷土の文化遺産、いわゆる「遺跡」という認識をもとに、考古学的な視点からみた研究を活動していかなければならないという方向性を述べてきた。今回、野田山墓地研究をより具体的に探っていこうと、加賀藩主前田氏の家臣である横山氏の墓地を調査対象とし、平成11年12月～翌12年4月にかけて踏査を断続的に実施した。

2. 横山家の概要

横山氏は加賀藩主前田氏の家臣のひとつで本多氏、奥村氏、村井氏達と共に「加賀八家」と呼ばれていた。初代長隆は美濃国に生まれ、天正10（1582）年越前府中において前田利長に仕え、翌11年、賤ヶ岳の合戦にて戦死した。第2代の長知は父長隆に従って利長に仕え、柳ヶ瀬の役に出陣して禄200石をうけた。その後、佐々成政との末森、鳥越の合戦や九州、関東に従軍するなど、軍事的活躍をするとともに、慶長4（1599）年利長と徳川家康の間で対立気運が高まるとその仲介に奔走したりと政治的側面においても手腕を発揮した。また、国内外の海運・金融の豪商を掌握して藩の財政を援助し、藩政に大きな功績を残した。横山氏は2代当主長知から勢力を拡大し繁栄していき、その後も前田氏の重臣として幕藩体制が終わりを告げるまで任務を全うし続けていった。文明開化の新しい時代を迎えた後、明治33（1900）年には華族となり、第11代隆平は男爵となって叔父の隆興とともに鉱山経営に力を注ぎ、石川県内の産業開発の発展に貢献した。

3. 調査の方法

調査は現地での現状確認から始まった。横山家の墓地は敷地面積が大きく墳墓も数多く点在しており、墓地の様相や構造などの基礎資料を知るため、現況略測平面図を作成することとした。（図参照）略測図は中世城郭の形態を知る上で有効な手段となる縄張図方式を採用した。縄張図とは城館遺跡に存在する人工急斜面・堀・土塁・石垣など防御性をもつ遺構の平面構成を把握する際、城館跡の現況を観察して地形図に投影する図面である。横山家墓地は当然の事ながら城館遺跡にはならない。しかし、現況は平坦面を設けるために人工急斜面を造成し、個人の墓を区別するため堀のような大溝を掘ったり、土塁状遺構を盛ったりして城館遺跡に似た土木工事を展開している。そこで個々の削平地の配置や墓域全体の構成を検討するのに有効手段と理解して縄張調査を引用した。墓石については現在残っている物全てを対象とし、形状・記銘・石材等を肉眼観察した。そして、この墓石に記銘されている年代を没年代と考え、墓石が造立された時期と仮定した。

4. 墓地の状況

現在横山家の墓地は野田山北斜面の山腹通称「中割」と呼ばれる所に位置する。当家墓地を西方に進むと山麓の野田の集落から山上の前田家廟所へ向かう参道にぶつかる。墓地の敷地面積は約3,000㎡を有し、斜面上に立地しているため段々状に築き、いくつもの平坦面をもちながら形成している。横山家墓地と周囲の墓地との間は50～100cmの段差や幅約2～3m、深さ約50cmの大溝、墓道などで区割りされているが、他家の墓が切り売りによって横山家敷地内に構築されている所があり、一部の墓

域区画は明確でない。墓地内は大きく15の平坦面が存在し、各面に墳墓が築かれている。上段に位置するA・Bや下段のOは比較的規模が大きい。また、AやGのように土塁状の高まりを利用して墳墓を区画している箇所も存在する。墓地内は3本の道が東西・南北ラインにそれぞれ走り、各平坦面の出入り口に接している。しかし、一部の平坦面には直接道から出入りできず、別の平坦面の背後から出入りするものもある。

5．墓石の状況

墓は基本的に方墳状をした塚の上に墓石が置かれる。塚は一辺1～2m、高さ1m弱の小さいもの（小タイプ）と一辺3～4m、高さ1.5m程の大きいもの（大タイプ）との2タイプある。墓石の大きさも塚の規模に合わせて大小の2類型存在する。一部塚の前面に墓石が置かれているものがあるが、恐らく当初は塚の上にあったものが何らかの形で落下してしまい、その後その場で立て直したと推定される。墓の数は65基、うち墓石が存在するものは37基である。墓石は笠付石碑型が27基と最も多く、続いて五輪塔型の6基、方柱型2基、尖頭石碑型・笠付八角塔型が各1基となっている。

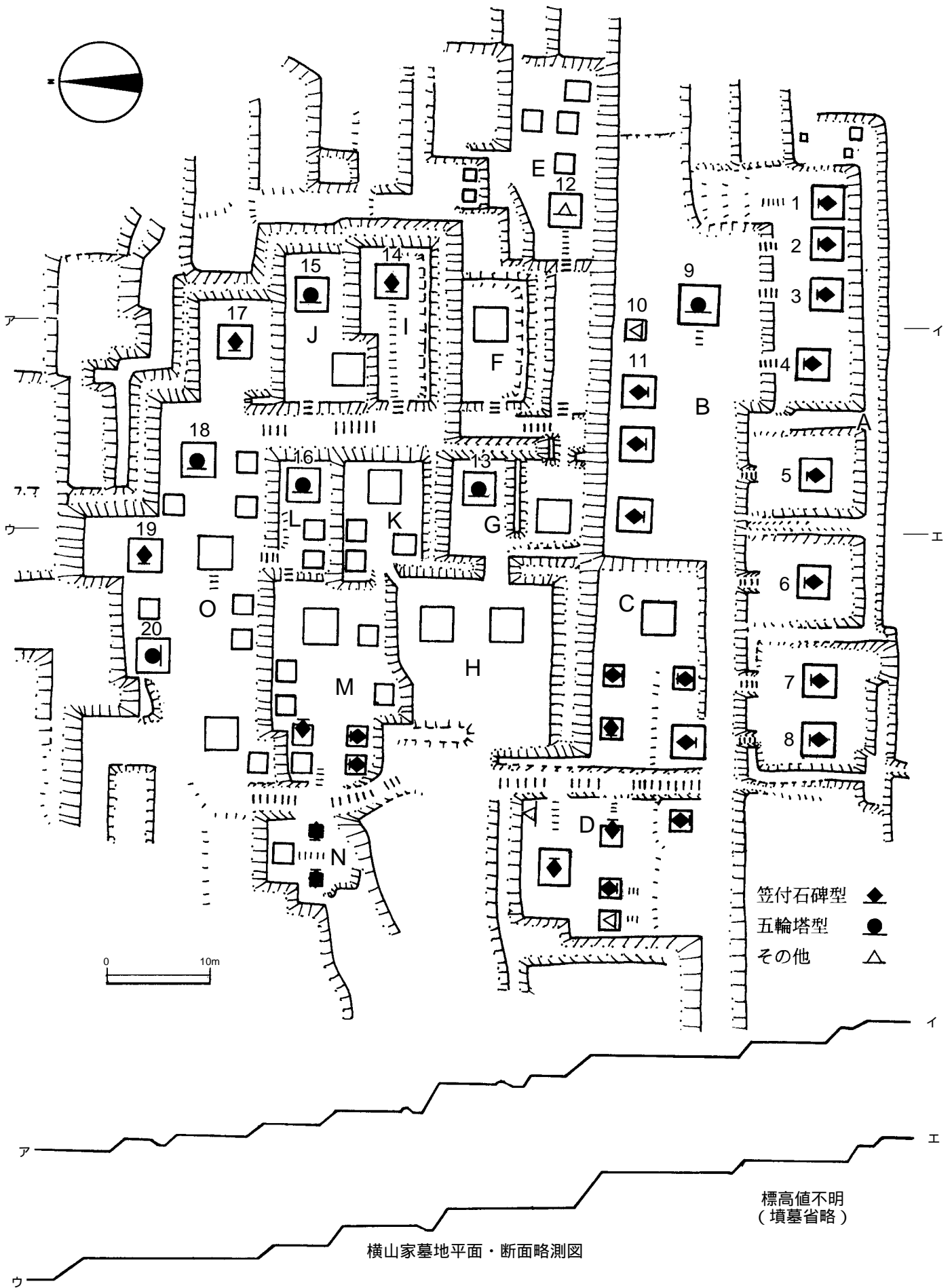
1箇所の平坦面には最低1基、最多13基の墓が見られ、大タイプのものが平坦面の中心に配置される。小タイプの墓は大タイプの墓の脇などに立てられる。

墓石のない塚だけ残っているものの中には塚前に石柱が立てられており、被葬者の名前が彫られている。ただし、この石柱がいつ、誰によって、何を根拠に立てられたか判明しておらず、やや信頼性に欠ける。

6．墓地の構造

本節では横山家墓地内の築造変遷を追求していきたい。その前に平坦面に築かれている各墳墓の概要を説明していく。平坦面Aの5は8代当主隆従（1711～1792）、7は9代当主隆盛（1783～1816）、3は10代当主隆章（1805～1860）、1は11代当主隆平（1844～1903）である。2は墓石の側面に「・・・・隆平之室」とあることから11代隆平正室の墓にあたる。そのため4・6・8のように各当主の墓に隣接するのはそれぞれの正室の墓と想定される。平坦面Bの中央には9の2代当主長知の墓が設置されている。長知は正保3（1645）年に没しているが、五輪塔地輪の左側面には「天保十五 辰年 二月横山隆章修明之」と刻まれていることから10代隆章が天保15（1844）年に長知墓をこの場に移設したと思われる。11は12代隆俊、10は13代隆良である。平坦面Cは明治～大正時代、平坦面Dは幕末～明治時代にかけて据えられた墳墓群である。平坦面Eの12は横山家唯一の尖頭碑型をしており、延宝4（1676）年の銘が入っている。平坦面Fは墓石はなく、石柱から7代当主隆達（1728～1776）とされている。平坦面Gの13の五輪塔は寛保2（1742）年のものであるが被葬者は特定できない。平坦面Hは大タイプが2基併設しているが墓石は存在しない。塚脇の石柱では3代当主忠次の父とその正室とされている。平坦面Iの14は正徳5（1715）年の銘が刻まれている。被葬者は特定できない。平坦面Jには五輪塔が1基確認され、5代当主任風（1658～1704）のものである。平坦面Kは4基確認されるものの墓石が残るものは1基もない。平坦面Lには五輪塔が1基存在するが、石の剥落が著しく記銘を解読することはできなかった。平坦面MとNは江戸後期～幕末にかけてのものである。Mの大タイプは石柱のみのもので、3代忠次（1625～1679）とされている。平坦面Oの17は元禄14（1701）年、18は貞享4（1687）年、19は享保2（1717）年、20は宝永2（1705）年の銘が入るが被葬者はわからない。

以上から概観すると墳墓の配置は江戸時代中期までは下段、それ以降は上段に立地する傾向にある。Oには墓域内で古いタイプに属する貞享4（1687）年銘の五輪塔が存在する。そこから東方へ向かっ



たところには元禄14(1701)年銘の入った17がある。その上のJ15の五輪塔は宝永元(1704)年のもの、さらに上段となるIの14は正徳5(1715)年の銘をもつ。平坦面H・K・L・M・Nは当該時期を示す墓石がないため明確な検討はできないが、Oから墓が立てられ初め、徐々に敷地拡大を東方や南方(上段)へ求めていったと推察される。特にI・J・Oの東側大溝は鉤型になっており、恐らく上段へ墓域を求める際、少しでも敷地面積を拡大しようという表れになるのではないだろうか。

平坦面K・LとI・Jの間に南北に走る墓道がある。この墓道はFの手前で終わり、墓地の外周となる大溝と合流する。ここで注目したいのはFとG間にある溝と道である。平坦面FはI・Jから続く墓道のラインが一致する。また、F-G間の溝ラインとK・Lの墓道から続くラインも合致する。これは元来Oから派生する墓道はGの奥まで延びていたことが推定される。また、F南側の溝を挟んだBと、空間地も小さな段差が設けてあることから、本来墳墓が存在した平坦地であったことが想定される。その後、平坦面I・Kと平坦面F・Gとの間に溝を巡らして墓道を分断し大きな境界線を引いてしまった。そして、その境界を引いた段階でFとGの区画を明確にするため墓道の半分はFへ通じるル-ト、もう半分は区画溝という形で改造したと思われる。また、平場F・G・I・K・L・Jは規模やプランが酷似していることから墓道を中心とした造成工事が随時行われていったと考えたい。また、G・K・LはH・M・Oを通らなければ出入りすることができない変則的な構造となっている。

平坦面AとBは野田の集落と前田家廟所間の参道を意識した構造となっている。参道を東へ折れてまっすぐ進むとBに到着し、眼前には2代当主長知墓がそびえたつ。BとE・Gの間は鋭い急傾斜となって境界線となる。Aの4は10代当主隆章の正室とされる。墓石から没年は天保14(1843)年で、2代当主長知の墓移築の1年前である。また、10代正室に西隣は8代、9代の当主と正室の墓を土塁で囲みながら整然と配列させている。これらの状況から10代正室が亡くなった時、当主隆章がA・Bを大改修し、妻及び父母、祖父母の墓を再整備したものと思われる。その際、加賀藩主前田氏に仕えて最も功績を残した2代当主長知を尊敬する御先祖としてBの中央に置いたと思われる。C・Dは両平坦面の間を通る南北道から出入りする構造となっている。墓石の紀年銘から幕末から大正時代に築かれたもので、A・Bの造成が終わった後に新たに造られたと考えられる。

以上を考えると当初Oで築造された墓域はまず、H・Mと領域を広げ、それから東の方へと展開し、F・G・I・J・K・Lへと造成していったのではないだろうか。それが江戸時代中頃には何らかの事情で大溝が掘削され、I・KとF・Gとの間が分断された。その後、1843~翌44年に上段の大規模な造成工事が行われB・CとE・Gの間に大きな区画を設け、Bが横山家の墓域の中心地となって現在に至るという構造になっている。

7. おわりに

今回、横山家の墓地の略測図を作成し、これを基に墓域の造成状況と墓石に残された紀年銘から当地が大きく2回の改修があったことを想定してみた。しかし、被葬者の解明や墓石の形態・石質等調査しなければいけないことが多く残っている。休日に踏査を行うことしかできないため、片手間な作業に終始してしまうが、また何らかの形で報告していきたい。

最後に今回プライベートとなる場所での踏査や本稿の発表に対してご協力、ご尽力いただいた横山家末裔の貴広氏に深く感謝を申し上げます。

ここでいう特定できない被葬者とは法名等は明らかであるが、俗名・続柄が現段階で解明していないことを示す。

畝田・寺中遺跡第一号木簡覚書

和田龍介

本木簡については、一九九九年八月一八日の報道発表を皮切りに、石川県埋蔵文化財センターの広報誌などで紹介されており、また吉川聡の集成による「^(註)一九九九年全国出土の木簡」に、釈文並びに遺跡の概略が掲載されている。

しかし、これらの報告等では本簡の釈文ならびに簡単な性格の推定しか行っており、また釈文についても報告者の誤記等による不一致が度々起きている。釈文の不一致についてはひとえに担当者である筆者の不注意によるものであり、ここに紙面を借りてお詫びしたい。

畝田・寺中遺跡の発掘調査はまだ緒に上りたばかりであり、正報告の刊行も未定であることから、現段階での釈文の確定とその性格についての筆者なりの見解を整理しようと考えたのが本稿の目的である。従って本稿は概要報告的な面を持ちつつも研究ノートの側面を有しており、論題を「覚書」としたのはそのことによる。

なお、本簡の判読・釈文の作成については、国立歴史民俗博物館の平川南教授のご指導を賜った。

【遺跡の立地と出土状況の概略】

金沢市畝田・寺中遺跡は、日本海を間近に臨む大野川・犀川扇状地帯に立地する、古墳時代～中世の遺跡である(図一)。西を犀川、北東を大野川という二河川に挟まれ、遺跡地内には犀川支流のひとつである大徳川が流れる。古代の畝田・寺中遺跡は、越前国(弘仁一四年以降加賀国)加賀郡大野郷に属していたと考えられる。『日本書紀』下巻、宝龜元年のこ

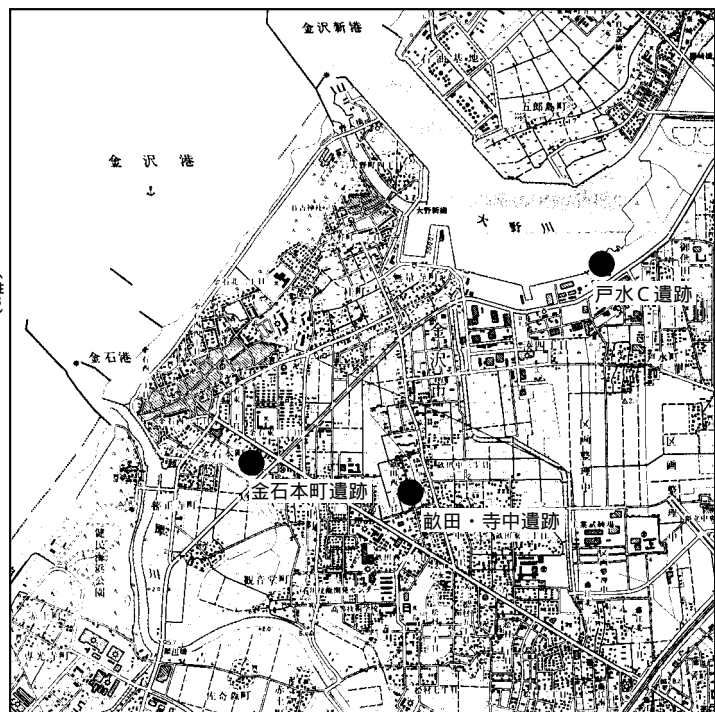


図1 畝田・寺中遺跡とその周辺 (S=1/50,000)

ととする現報譚には「我は、^(註)越前国加賀郡大野郷、畝田村に有る横江臣成人が母なり(以下略)」とあり、現在の地名である「畝田」に比定してよかる。

犀川・大野川河口付近は県下有数の古代遺跡の密集地であり、古代加賀郡の様相を知る上で重要な地域である。大野川の河口付近には、加賀国府津と推定される戸水C遺跡を中心とする戸水遺跡群が展開している。八世紀後半～九世紀初頭に本格的な活動を開始する遺跡群である。

一方の犀川河口付近は、金石本町遺跡に代表される金石・畝田遺跡群とも呼ぶべきもので、本遺跡はこの群に属する。本群の大半の遺跡が八世紀後半～九世紀初頭から活動を開始する中で、金石本町遺跡、畝田・寺中

遺跡は七世紀末～八世紀前半から活動を開始する数少ない遺跡である。

金石本町遺跡はその立地と官衙的様相を持つ遺跡であることから、郡津のような「旧加賀郡による交通・物流・交易などを管理していた施設」と考えられている。金石本町遺跡の消長と時を合わせるように活発化する戸水遺跡の動態は、遺跡の変遷を考える上で興味深い現象である。

畝田・寺中遺跡における八世紀代の在り方については未だ不明な点が多いが、該期の遺物を出土する旧河道・溝などの遺物を概観すると、「天平二年（七三〇）」「墨書土器がもっとも早い時期の遺物であり、九世紀初頭、遅くとも中葉をもって以降の遺物は見られなくなるようである。八世紀代の遺物を出土する遺構は遺跡地の北西 西側に多いことから、あるいは金石本町遺跡よりに中心施設が存在するのかもしれない、金石本町遺跡と密接な関係を有する遺跡と言えよう。

第一号木簡（以下畝田・寺中遺跡木簡と略す）は、遺跡地北端のB2調査区を南東 北西方向に流れる、三一号溝肩部付近より出土した。

三一号溝は八世紀中葉～九世紀初頭の須恵器杯を中心として、墨書土器「津」「山田」「男山」などが三〇点弱出土している。特に「津」墨書土器は一〇点を超え、本木簡と並んで三一号溝を特徴づける遺物である。溝年代の上限については不明だが、木簡に「天平勝寶四年（七五二）」の紀年があることから、遅くとも八世紀第三四半期にはすでに流路としての機能を持っていたであろう。規模はそれほどではないものの、何らかの施設（群）にとりつく流路であったことが想定される。

【釈文】（図二、赤外写真。表記方法等は木簡学会様式に準拠）

「天平勝寶四年上領

戸主阿刀足人六十×

妻答尋宅女冊×

阿刀三繩冊束

妻館氣奈加女×

山邊足君冊×

内麻呂廿×

□□ 悪万呂×

合稻二百×

田秋人冊×

答尋 女冊束

刑マ小當 廿束

〔同カ〕
姓味知麻呂十×

【記載様式の検討】

（103）×292×9 081型式

板材を横使いに用いており、現存法量一〇三×二九二×九mm、天・左右端は両面キリ・オリ成形の痕跡を残すが、地端は潰れたような状態で一部の墨痕とも欠損している。用いられた板材は一尺×四寸ほどに復元することができ、この材を一枚上下に組み合わせるとほぼ正方形を呈する。木簡の規格性については平川南が「定型化した札を五枚とか十枚とか組み合わせ

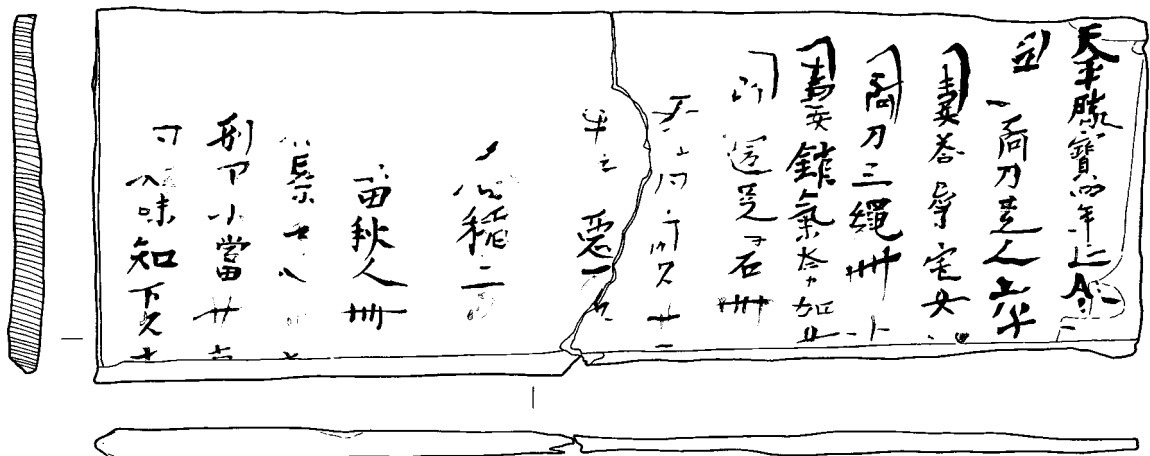


図2 畝田・寺中遺跡 第1号木簡実測図 (S=1/2)

せた際に正方形を呈することにより、札の紛失や数字合わせの視覚的チェックを可能にするのではないかと指摘しており、本木簡も定型化されたカードのように用いられた可能性はある。

本木簡は現状で二片に割れているが、割れ口が引き裂かれたような状況を呈していることから取り上げ時に起因する破損である可能性が高い。また二次的加工の痕跡が認められないことから、使用後は何も手を加えられず廃棄されたものと考えられる。

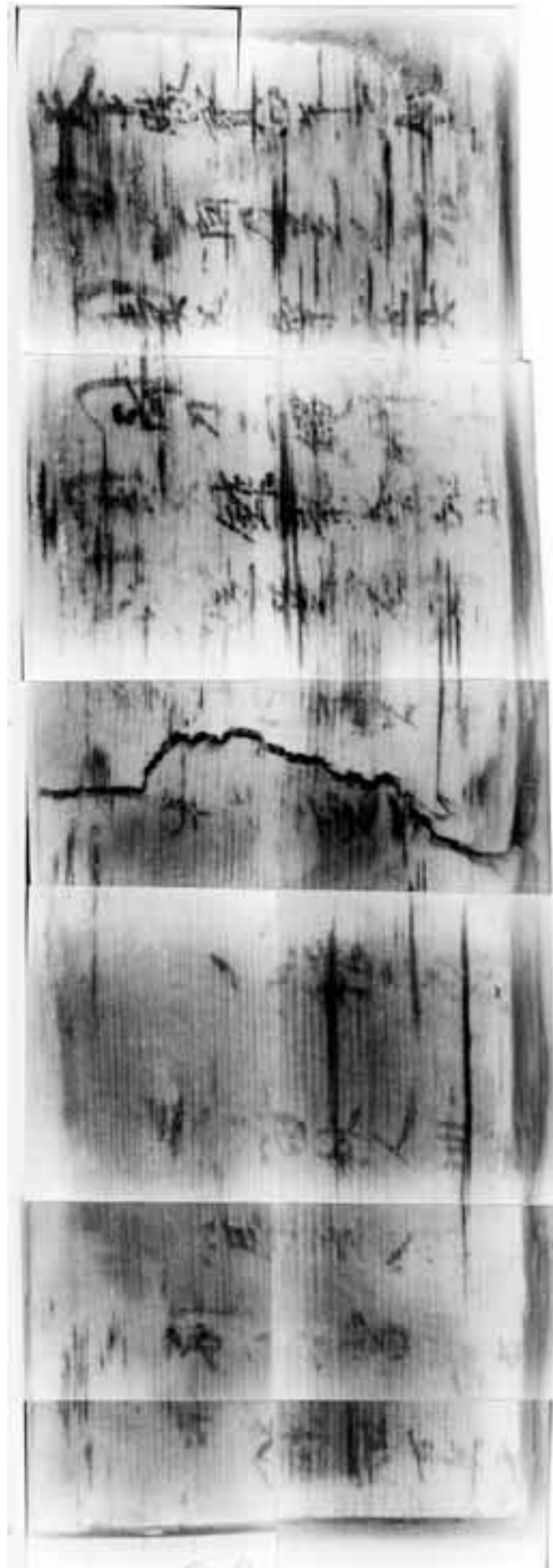
墨痕は左半分(特に天に近い部分)がやや遺存が良くないものの、一段書一三行、楷書・小字で十一人分の歴名・年紀・総計記載を確認することができた。裏面は割られた状態をそのまま残し、墨痕は確認できなかった。

行間は九行目の「合稻二百 x」の前後を除いて一七、二〇mmとそろっており、界線こそ無いが綿密な行割付けのもとに記載されたことがうかがえる。九行目の前後行はそれぞれ三〇・三三mmである。

一行目は年紀。天をほとんど空けずに記される。「上領」は字の遺存が悪いが、年紀に比べ若干字が大きい。二、八行目は人名+稲束量の歴名で、二行目のみ天をほとんど空けずに記す。三行目、八行目は一字下げで書かれる。七、八行目は墨書の一部が判読できないが、三、六行目と同様の様式をとっていたことが推定される。

九行目は総計記載で、二字下げで記され、他行より若干字が大きくなっている。十、十三行目は再び人名+稲束量の歴名となるが、九行目とほとんど頭をそろえて記しており、二、八行目の歴名と区別を図るような記載である。五人目までは勘検を受けたことを示す合点が氏名の上に打たれている。合点及び稲束量については、墨痕の違いから追筆であると思われる。

文字は若干崩し気味の楷書(真書)で、稲束量の数字に小字を用いていることから公式令でいうところの「公文」ではないが、行割付けに規格性がうかがえることから公文に準じた文書と見ることができる。あまり字形



畝田・寺中遺跡 第1号木簡赤外写真（85%縮小）

や大きさにこだわらない闊達な筆遣いで、書に慣れた人物を想像させる。

書風については「阿」字からある程度推測できることが東野治之の研究からわかっている。本木簡の「阿」字は、傍の「可」第一画目が阜偏のふくらみの下から引かれており、六朝風の書の影響が見られる。東野によれば「写経の場合とは異なって、文書では古い書風の名残りが奈良時代後半まで存したらしい。」とあり、本木簡もその可能性があることを指摘しておきたい。

記載様式をまとめると下記の通り。

年紀
(戸主・妻) 人名 + 稻束量
合計
人名 + 稻束量

記載内容が人名 + 稻束量の歴名を主体としており、途中で総計記載があることから帳簿の類とみてよからう。小林昌二は、人名・稻束量が記載される文書として、歳入・歳出と分けたうえで次のような可能性を想定している。以下小林の成果に導かれながら、本木簡についても同様に考察を行ってみたい。

歳入 田租、 出挙本稻・利稻の回収、 公田賃租の地子

については、小林の指摘通り把数以下の稻束量が現れるのは不可避であり、本木簡においても合致しない。については極めて蓋然性が高く、これまでに出土している出挙関連資料との類似点も多い。ただし本木簡では稻束量が十束単位で、端数が現れないことから利稻の可能性は低い。については、賃租公田の面積表示も無く、それを示すような記載も見られないので考えにくい。

歳出 交易物の代価支給、 災異に伴う賑給、 出挙本稻の支給

については品目の記載が無く、また中途での総計記載にも疑問を残す。は、出雲国大税賑給歴名帳との比較でもわかるように、個人を示す情報が本木簡にはあまりにも少なすぎる。については、歳入同様にやはり蓋然性が高い。

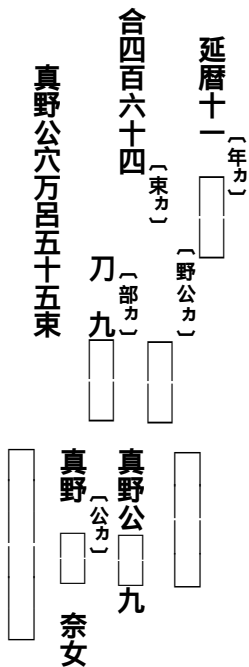
以上の点から、本木簡を「出挙に関連する帳簿」木簡と考えてよいように思われる。以下、本稿では本木簡を出挙関連木簡であるという前提で稿を進めていきたい。

【記載内容の検討】

(一) 年紀

本木簡では冒頭に「天平勝賣四年(七五二)」の紀年が記されており、木簡の作成年代が明らかになっている。共伴する須恵器も八世紀中頃〜九世紀初頭の年代観をもつものであり、矛盾しない。「天平勝賣」の「賣」字は、俗字が用いられている。

このように人名 + 稻束量の様式を持つ木簡で冒頭に年号を記す例は、管見の限りでは宮城県田道町遺跡C地点木簡が唯一の例である。



一段書と二段書という違いはあるが、冒頭に年紀を持ち、総計記載があることは畝田・寺中遺跡木簡を考えるうえで貴重な類例となる。

また年紀ではないが、冒頭に月日を記す例としては兵庫県吉田南遺跡木簡の例がある。

・「十月^{〔六カ〕}日^{〔淨カ〕} 火 万呂秋力六十揀 正
静万呂州一揀力一束四巴 持
・「 一束七巴 卅七束四巴 八十七束^{〔万カ〕}

これまでに出土に関連する出土文字資料（木簡、漆紙文書等）は約一五例ほどが知られているが、それらの出土時期はおおまかに七世紀～八世紀初頭と、八世紀後半～九世紀初頭の二つに分けられる。特に八世紀後半～九世紀初頭に出土例が集中することは、それだけ出挙貸付・収納に伴う事務が繁劇になっていたことを示す証左と言えるだろう。また国家財政に対する地方負担増なども、より出挙に対する関心の高まりとそれに伴う文書事務の激増を喚起したものと想像される。

これらの中にあつて、畝田・寺中遺跡木簡の持つ「天平勝寶四年（七五二）^{〔一〕}」という年紀は、これまでの出土例に無い八世紀中葉という時期を埋める資料として大きな意味を持つものと思われる。

年紀下には、木簡が一部破損して読みとりにくいものの「上領」の二文字が記されている。「上」については福岡県井上薬師堂遺跡の「見上出挙千百七束^{〔字〕}」や、新潟県下ノ西遺跡第一号木簡の「殿門上税四百五十九束先上^{〔字〕}」三百五十束後上二百九束（傍点筆者）に見られるような使われ方と同様のもので、「たてまつる」ほどの意であろう。「領」についてはやや意味がとりにくいが、「統べる・おさめる」「受ける」のような意味であろうか。

（二）統柄表記

本木簡の歴名には、「戸主」「妻」の統柄表記が見える。「戸主」の表記は第二行目、「妻」の表記は三行目と五行目に見ることができ、二行目の阿刀足人を除いて戸主が見えないことや、「妻」の統柄表記を持ちそれが複数にわたることから、本木簡は阿刀足人を戸主とする阿刀足人戸について記しているものと理解したい。

このように人名+稲束量を記載する木簡で、「戸主」表記のある場合は、おおむね某戸を代表するものとして「戸主」の記載が見えるものが多い。また戸主以外の氏名が現れる場合でもその統柄を記さないものがほとんどである。たとえば戸主某+稲束量記載の例は、静岡県伊場遺跡五二号木簡に見ることができ、

廣麻呂九束	戸主若倭マ石山六
知麻呂卅束	戸主若倭マ足嶋九束
× 飯依	戸主 ^{〔委カ〕} 尔マ刀良
依戸口同マ色夫知四束	馬主 ^{〔戸カ〕} 尔マ吉麻呂廿束
万呂	馬主 ^{〔黒カ〕} 毛牡馬
	馬主戸主宗宜マ馬依四束
	戸主若倭マ足 ^{〔廿束カ〕}

この五二号木簡では記載されている稲束量が少なく一人分としかとれないことから、戸主がその戸を代表しているわけではなく、戸主にのみ出挙が割り当てられていたものと考えられる。このため、直接的には畝田・寺中遺跡木簡と様式の共通性を持つとは言えない。

秋田県秋田城跡三六次第一号漆紙文書（以下「秋田城漆紙」と略す）では戸主以下の歴名があることで、本木簡に近い様式を持つ。

〔伯カ〕
〔深拾人〕
〔稻カ〕
拾參束伍把

直忍麻呂戸口

〔刀カ〕
麻呂貳束

〔伍束〕

〔刀カ〕
丸子
自賣伍束

〔貳束〕

戸主秦連恵尔

〔伍束〕

戸主磯部小龍戸口

束

部小刀自賣伍束

戸主穴太郎道石伍束
〔六ノ誤リカ〕

この二号文書では戸主が複数人あり、冒頭に 百七十人と見えることから、戸単位ではなく、郷のような上部単位でまとめたものと考えられる。

続柄+人名の歴名様式を持つ文書としては籍帳がまず浮かび上がるが、本木簡では全ての人名に対して続柄を記していない。書き方として「戸主某」から一字下げで妻以下の歴名を記すのは一部の籍帳に見られる記載法で、養老五年下総国葛飾郡大島郷戸籍、天平四年山背国愛宕郡計帳、天平一二年越前国江沼郡山背郷計帳、多賀城山王遺跡第一七次第三号漆紙文書（計帳断簡）などがある。

平川南〔年〕によれば古代籍帳は、大きく御野型、西海道・下総型に分けられ、大宝律令施行前にあつた御野型・西海道型の籍帳記載様式は、大宝律令施行後の籍年すなわち養老五年籍において記載様式の統一がなされたとする。養老五年籍である下総国型戸籍の特徴をまとめると以下のようになる。

氏姓記載が外部入籍者も含めて原則全てを記載する

戸構成員の記載順序は、戸主の血縁の親近性に基づく男女混同記載をとる

戸主某から一字分下げて以下の歴名を記載する

これらの特徴は畝田・寺中遺跡木簡にも見ることができ、 について

は「同姓」表記のある一人を除いて姓を記している。 については戸主同族（阿刀姓）が少ないので必ずしも明らかでないが、後の方の歴名に阿刀姓が見られないことからこの様式に沿っているものと推定できる。 については本木簡を特徴づける様式である。

その一方で、妻以外の男女弟妹といった続柄表記が本木簡には見られないが、ここでは出挙の実施に際し、戸主とその妻がかなり重要視されていたのではないかという推測を述べておくにとどめたい。

以上のことから、本木簡は籍帳の類を基礎として作成された帳簿であると考えられる。

（三）歴名

本木簡には、合計記載前七人、記載後四人の合計十一人分の歴名が記されている。また前六人には鍵状の合点が追筆で付されている。七人目については行前半部の墨痕が失われているが、おそらく前六人同様に合点が打たれていたものと思われる。これら十一人の歴名は整然とした割付規則のもとに記されており、木簡の両端に破断の痕跡も見られない。その割付の規則性から、総計記載後の四人は後日の追筆とは考えにくく、作成当初から前七人と区別して書かれたものとみなすのが自然であろう。つまり本木簡の十一人は、ある意図なり規則性を有したまとまりであると捉えられる。

このまとまりを検討するにあたって、以下の点が参考になる。

冒頭の「戸主」記載

戸主同族（三行目）、戸主妻の同族（二行目）が確認される

記載様式が籍帳引き写しと考えられる様式をとる

この三点から阿刀足人戸口歴名の可能性が想定できるが、この場合に疑問となるのは、戸口歴名にしては人数が少なすぎる点、合計記載以下の四人は前七人歴名から一字下げで記されており、これら四人も戸口に含まれるのかという点である。

八世紀段階の正税出挙の「誰に（どれだけ）貸し付けるか」については必ずしも明らかでないが、後年の大同三年太政官符（註一）「類聚三代格」巻十四）は出挙に関する諸規定を定めた数少ない史料である。

太政官符民部省

東山道出挙正税事

右凡出挙正税者。搃計国内課丁。量其貧富。出挙百束已以下十束已上。依差普禁。不須偏多。各為二春夏均給。並對檢班給不許詐冒。或負死者令國司審察依実免除。若所司許容奸詐者。科違勅罪永不任用。若有人糾告。其物即給告人。自餘庶事一同常例。

大同三年九月二十六日

これによれば出挙は、「課丁に貧富の差に応じて、十束以上百束以下を春夏二回均等に貸し付ける」とあるが、課丁だけに限られていないことは、本木簡ならびに秋田城漆紙、天平十一年備中国大税負死亡人帳（以下「備中国大税死亡人帳」と略す）において女性の名前があることから明らかである。

また『類聚國史』所収の大同二年九月東山道觀察使安倍朝臣兄雄言上記事には、「当道准戸口数増減為挙」とある。この史料を受けて大同三年の官符が出されるとすれば、元は戸口の人数に応じて負稲量が決定されていたのが、課丁を単位として「その貧富の差に応じて」決めるようになり、向修正したものとみなすことができる。

備中国大税死亡人帳を始め秋田城跡漆紙、鹿の子遺跡第一七四号漆紙文書など、大同三年官符以前の出挙関連資料では、歴名を有する資料のほとんどが出挙が課丁だけでなく戸口にも貸し付けられていたことを示唆している。また大同二年東山道觀察使言上の記事も戸口を意識しており、八

世紀段階においては戸口に貸し付ける在り方が一般的であり、それがやがて課丁ないし戸主に収斂されていったのではなからうか。

以上、半ば既知となっているような見解を纏々述べ、本木簡が戸口歴名である可能性を探ってみたが、戸口にしては数が少なすぎる点については未解決のままである。戸内の出挙貸付者のみを抜き書きしたものと考えるのが妥当であろうが、本木簡からそれ以上のことを読みとるのは困難である。

次に総計記載以下の四人の性格について簡単に触れておきたい。この四人の名が追加的に記されたものではないことについては、本木簡の持つ整然とした割付からそうでないことが理解できる。またこの四人が阿刀足人戸の戸口であるかについては、十一行目の「答尋女」が戸主の妻である「答尋宅女」の同族である可能性があり、現時点ではこの四人も阿刀足人戸口であると理解しておきたい。

しかし総計記載前の六人よりも一字下げで名前が記され、合点が付されていないことは明らかに前六人とは（計算上でも）区別するための書き方とみなさなくてはならない。この場合考えられる可能性としては、死亡者、寄口、奴婢、出挙稲未納者などが考えられる。まず負稲量からの奴婢の可能性は考えられず、寄口であっても税制上の扱いは一般戸口と変わりないはずでこれも考えがたい。残る可能性は、であるが、大税死亡人帳に見られるような年齢・死亡月日などの記載が無いことから、未納者としておきたい。

木簡の歴名の記され方にあたっては、国衙レベル、郡家レベル、それ以下（郷家？）での出土によって変わってくるであろうし、単純な木簡の比較では明らかにし得ない側面を持っている。出挙事務に必要な情報が必要とされる情報が各レベルで異なっていることは、これまでに出土している木簡・漆紙文書の記載方法が多様なものであることから推すことができる。

個々の戸口の歴名を詳細に記した貸付・収納帳簿・・・畝田・寺中遺跡木簡、伊場遺跡五八号木簡、田道町遺跡木簡、(鹿の子)遺跡一七四号漆紙文書)など

戸主の歴名を記した帳簿。これには戸口分を戸主で代表させたものと、戸主のみに出挙が行われていた場合の二通りの可能性が考えられる。・・・

・伊場遺跡五二号木簡

郡・郷などの単位で一括したもの・・・秋田城漆紙がこれに相当しよう。現在木簡ではこのような資料は見られないが、この段階になると郡稲帳等のように浄書され、国府ないし中央政府に提出する文書として整備されているからであろう。歴名ではないが、出挙稲を計算したものなどはいくつかの例がある。

文書(木簡)に記される情報としては、^(貸付)の順に省略化されている。まず国府より郡の出挙割当量が郡家に示された後、^(帳簿)のような詳細な帳簿が、郡家歴名(広義での計帳)を下敷として戸ごとに作成される。出挙が春夏二回に分けて行われていたことを前提とすれば、春出挙については手実作成時期に重なり当年度歴名を使用するのは不可能で、おそらく前年度歴名を下敷に作成されたであろう。一方夏出挙時には計帳は(郡の段階では)完成しており、当年度歴名を下敷に行われてよい。考え方としては次のようになる。

天平勝宝三年度歴名・・・天平勝宝三年夏出挙、天平勝宝四年春出挙

天平勝宝四年度歴名・・・天平勝宝四年夏出挙、天平勝宝五年春出挙

この時には戸単位のカード状木簡と、鹿の子遺跡漆紙のような出挙貸付原簿が作成される。この原簿は最終的に浄書され、国府に提出されたのである。は をとりまとめたもので、国府提出文書のための作業文書と考えられる。おそらくこの段階までが郡家の作業であったであろう。これら郡家で作成された出挙関係文書は、八月に進上される出挙帳作成のため

めに国府に提出される。出挙の収納時期は出挙収納木簡などを見ると九月に集中しており、従って国府に提出された出挙関係文書には収納の事実は反映されない。実際、唯一の出挙帳とされる天平八年伊予国正税出挙帳には夏出挙までの事項しか記されていない。収納稲の管理文書については別途提出されたであろう。

出挙事務において木簡が用いられるのもこの郡家段階までであり、になると、国府において郡家から提出された資料を基に作成されたものであることがうかがえる。に相当する木簡の出土例がないのはこのような文書事務の流れによるものであろう。

さて、畝田・寺中遺跡木簡は、の段階に相当するもので、出挙事務の末端において用いられた作業用帳簿であることがうかがえる。月日ないし春夏の表記が見られないのは、出挙貸付時の木簡ではなく、出挙収納時の木簡であることを示しているであろう。

ここでは歴名(帳簿)のみで分類したが、八木充は出挙関連資料の区分として、出挙を示すもの、稲の貸付に関するもの、出挙稲の収納に関するもの、の三つに分けている。

(四) 稲束量(負稲量)と総計記載

本木簡には、歴名下に〇束という稲束量と、九行目に「合稲二百×」という総計記載がある。出挙関連木簡という性格上、この稲束量は出挙貸付額(負稲量)を示すものと思われる。

総計記載を持つ出挙関連資料は秋田城漆紙文書及び田道町遺跡C地点木簡、茨城県鹿の子遺跡一七四号漆紙文書があるが、「合稲」の語は本木簡が初見であろう。この総計数は、歴名下稲束量と総計記載が一部欠けているため正確な数量は算出できないが、総計記載前の七人分の負稲量を足すとほぼこの「二百×」という数字になってくる(確実に判読できるものの総計で一六〇束)。この数字は前七人分の負稲量合計と見てよいであろう。

周知の通り出挙は春夏の二回に分けて行われ、鹿の子遺跡第一七四号漆紙b文書(以下鹿の子遺跡漆紙と略す)では割書で春夏別の負稻量が記されている。

〇月〇日 〇〇月〇日
 (人カ) 女三月〇〇 九月廿八日布一段
 「稲五百五十束」

〇月〇日 〇〇月〇日
 若櫻マ尼 女三月〇〇 九月廿二日 九月廿八日 九月廿九日
二
一
一
布カ

〇月〇日 〇〇月〇日
 刑マ三成女 三月〇〇 五月〇〇 五月〇〇

〇月〇日 〇〇月〇日
 刑マ直廣足 三月〇〇 五月〇〇 五月〇〇

〇月〇日 〇〇月〇日
 刑マ綾万呂 五月〇〇 五月〇〇 五月〇〇

〇月〇日 〇〇月〇日
 刑マ廣主 三月〇〇 五月〇〇 五月〇〇

〇月〇日 〇〇月〇日
 稲虫女 三月 五月

〇月〇日 〇〇月〇日
 五三〇〇〇

春夏二回の貸付を示す初見史料は前出の大同三年九月二六日官符だが、鹿の子遺跡漆紙が延暦年間のものと想定されることから、この官符は春夏二回(そしておそらく均等貸付も)の慣行を追認したものであろう。本木簡では「天平勝寶四年」の記載のみで月(季節)の記載が無いことから、通年の負稻量を示すものと判断される。負稻量は十束を単位とした数字であり、出挙本稻のみを記しているのである。字形が判別できるものでの負稻量は、戸主の六十を最大に四十・二十・十であり、春夏等分貸付とすると一回あたりの負稻量は三十・二十・十・五束となる。端数は無く、整然とした負稻量である。戸主の三十は別格と

して、原則二十束、それ以外は年齢によって十ないし五束が割り当てられたのである。男女間の差異については本木簡から読みとるのは困難であるが、一行目の「答尋 女冊束」から類推すると男女で負稻量の違いはなかったように思われる。

負稻量については各資料ともにはばばらで、一見定数のようなものが見えように見える。たとえば秋田城漆紙では一・三束の端数であるし、正税帳などに散見される死者負稻量を見てもおよそ共通傾向は見出だし難い。しかし畝田・寺中遺跡木簡や鹿の子遺跡漆紙などでは十を単位とした端数の無い数字であり、出挙利稻算出の便を考えてこのような数字が決められたと考えるべきであろう。

【まとめ】
 以上の考察から、畝田・寺中遺跡第一号木簡の特色をまとめると次のようになる。

冒頭に「天平勝寶四年」の年紀を持ち、作成年代の明確な木簡である。またこれまで類例の少なかった八世紀代の出挙関連資料として、資料価値を持つものである。その記載様式から阿刀足人を戸主とする戸口歴名とみなすことができる。戸口としての負稻量が把握できるが、総計記載を持つことから明らかに戸を単位として出挙貸付・収納を把握していた事実を裏付けるものである。

木簡材が横使いで一尺×四寸、これを上下につなぎ合わせると約一尺四方の正方形に還元でき、規格性をそこにつかうことができる。おそらく各戸ごとにこのような木簡が作成され、カードのようにして管理していたのである。

歴名は人名＋稲束量記載を基本とするが、「戸主」「妻」のみ続柄記載を有する。前半部七人には勘検を受けたことを示す合点が人名上に打たれている。合点と稲束量記載は人名とは別筆と考えられることから、収納時に作成された帳簿と判断される。

稲束量は全て十を単位とした量であり、利息計算の便を考慮したものととなっている。月・季節の表記のないことから通年分の負稻量の、本稻のみを記しているものと考えられる。戸主のみ負稻量が多く、男女間での負稻量の差は確認できない。

本木簡はその内容もさることながら、欠損のほとんどない全文をうかがいしれる出挙に関連した帳簿様本簡である。さらに負稻量が追筆であり、一部に合点が付されていることから出挙を収納する際に作成された「出挙収納帳様本簡」と捉えることができる。しかしその一方で戸口歴名にしては記載人数が少ないことや、総計記載以後の四人が前七人と様式を違えて記されていることなど、未解決の問題はまだ多い。

また本木簡の出土から、畝田・寺中遺跡の性格をある程度想定することも可能であろう。戸口歴名＋負稻量を記す本簡は、前述したように実際の出挙経営時に用いられた一次帳簿とみなすことができる。出挙経営の担い手は主に郡家であり、郡家で保管されていた籍帳や手実をもとに作成されたものが本木簡であろう。このような出挙関連本簡の大半が郡家（関連）遺跡で出土していることもこのことを裏付けている。

さらに他の出土遺物では二百点以上に及ぶ多量の墨書土器があげられるが、その中には「天平二年」のように官衙の存在をを思わせるものや、「津」「津司」といった津に関する語が注目される。この墨書土器を重視するならば、本遺跡は（郡）津に関連する遺跡とも言える。平成一一年度調査では具体的な遺構（施設）が検出されず遺物のみで遺跡を評価するの

は時期尚早ではあるが、少なくとも官衙関連の遺跡であることは遺物から十分に推測可能である。

近年の出挙に関する諸研究は、これまでの正税帳や大税負死亡人帳の分析による研究成果に立脚しつつ、出土文字資料を駆使して出挙制の実態に迫ろうという、新しい段階に入ってきている。実際、出挙が在地でどのように行われていたかについては木簡や漆紙文書などによって明らかにされたことも多く、本木簡もそのような役割を果たすことが期待されよう。本稿がその一助となれば幸いである。

附記 本稿を成すにあたり、本木簡の釈読から一貫して平川南氏から多大なご教示を得た。本木簡の評価については、鬼頭清明・北野博司氏からも有益なご教示を得ている。論旨のチェック等については同僚の湯川善一氏のご協力を得た。文末ながら記して謝意を表したい。また平川・三上喜孝両氏からは本木簡鑑定の玉稿を賜っているが、概報ないし正報告の段階で収めることをお許し願いたい。

【註】

- (1) 財団法人石川県埋蔵文化財センター編『いしかわの遺跡』五号(一九九九年)、同編『石川県埋蔵文化財情報』三号(一九九九年)。畝田・寺中遺跡平成一一年度調査の略報については『石川県埋蔵文化財情報』三・四(本号)号参照。なお、本木簡については壘田開発に伴う賃租地子・功稻の台帳ではないかとする見解もある。河村好光「石川の古代史に思う」(石川考古学研究会『石川考古』一五六号、二〇〇〇)参照。
- (2) 第二回木簡学会研究会報告資料
- (3) 『日本書紀』下巻、女人濫シク嫁きて子を乳に飢えしむるが故に現報を得る縁第一六。書き下し文は加能史料編纂委員会『加能史料』奈良・平安時代編による
- (4) 金沢市教育委員会『石川県金沢市 金石本町遺跡』(一九九六年)。金石本町遺跡においても、「×稻 大者君稻并三」と記す出挙関連木簡が出土している。
- (5) この金石本町遺跡 戸水C遺跡の変遷については、小嶋芳孝「渤海との交流が地域にもたらした影響」(森浩一編著『古代探求 森浩一70の疑問』中央公論社、一九九八年)、出越茂和「第五章 金沢における古代津湊の成立と展開」(金沢市教育委員会『戸水遺跡群 戸水大西遺跡』二〇〇〇年)を参照。
- (6) 平川南「出土文字資料と正倉院文書」(石上英一他編『古代文書論 正倉院文書と木簡・漆紙文書』東京大学出版会、一九九九年)
- (7) 東野治之「木簡の書風について」(『正倉院文書と木簡の研究』塙書房、一九七四年)
- (8) 小林昌治「伊場遺跡出土の第五二号木簡について」(竹内理三編『伊場木簡の研究』東京堂出版、一九八一年)
- (9) 木簡学会『木簡研究』一四、一九九二年

- (10) 木簡学会編『日本古代木簡選』岩波書店、一九九〇年
- (11) 木簡学会『木簡研究』七、一九八五年
- (12) 和島村教育委員会『下ノ西遺跡 出土木簡を中心として』(一九九八年)
- (13) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編 2』(一九八〇年)
- (14) 平川南「秋田城跡第二号・第三号漆紙文書について」(秋田城跡発掘調査事務所『秋田城文字資料集』一九八三年)
- (15) 平川南氏の「ご教示による。註6文献
- (16) 『類聚三代格』『類聚国史』は、新訂増補国史大系本によった
- (17) 天平一一年備中国大稅負死亡人帳の理解は、舟尾好正「出挙の実態に関する一考察 備中国大稅負死亡人帳を中心として」(『史林』五六・五、一九七三年)、同「公出挙貸付の実態の再検討」(園田香融編『日本古代社会の史的展開』塙書房、一九九九年)による
- (18) この文書の流れについては一つの試案としてご理解いただきたい。出挙と一口に言っても奈良時代後半段階では正稅出挙と公廩稻出挙のおおまかに二種類があり、公廩稻が様々な用に充てられていたことは説明を要しないであろう。出挙がいつたい何に充てられる出挙であるかによっても取り扱いレベル及び内容は変化する(たとえば新潟県下ノ西遺跡木簡のように国司借貸のようなレベルも木簡として残り、これについては国衙が直接経営にタッチしていたのであろう)。試案では郡家が経営にタッチする出挙についての流れを想定しており、籍帳の流れを参考に想定してみた。籍帳の流れについては渡邊晃宏「籍帳制の構造」(『日本歴史』五二五号、一九九二年)による。またここでは出挙貸付帳の作成を春夏個別に考えている。例えば鹿の子C遺跡一七四号漆紙文書に一人だけ春夏負稻量の異なる者が見えることや、伊場遺跡五二号木簡にあるような他者に比して極端に負稻量の低い者(二、四束)が確認できることなど、春夏で負稻量が異

なることや、春のみ借りて夏は借りない（もしくはその逆）ということも考えてみる必要は十分にある。出挙の貸付、収納に関する木簡としては、春夏の貸付台帳・八、九月の収納台帳（出挙本稻分）・利稻収納帳（・未納者収納帳）が各々作成されていたのであろう。

(19) 国府に提出される文書は、貸付の基礎となる帳簿（鹿の子漆紙のような）及び戸ないしは郷ごとにまとめられたもの（利稻の計算結果も含む）の二種類があったのではないか。

(20) 八木充「出挙木簡覚書」（門脇禎二編『日本古代国家の展開』下巻一九九五年）

(21) 茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書五 鹿の子漆紙文書 本文編』（一九八三年）

(22) 舟尾好正の備中国大税負死亡人帳の分析では、戸主と戸口の間にはほとんど負稻差が認められず、氏が現実的と見ている負稻量四〇束以下のグループでは、女性戸口の負稻量は男性の三分の一となっている。本木簡とは明らかに対照的であるが、地域・時期差によるものと理解したい。舟尾註17一九九九年文献参照。

(23) 石川考古学研究会新春シンポジウム資料「金沢平野の古代 津を巡る諸問題」二〇〇〇、同シンポジウムの抄録は石川考古学研究会『石川考古』二五六号に所収。加賀郡家の所在地については諸論あるが、最近では七、八世紀の寺院関係遺跡が発見された広坂廃寺遺跡付近が注目されている。筆者は同シンポジウムで「畷田・寺中遺跡の近くに郡家があったと考えられる」と発言しているが、「郡家関連施設」と訂正しておきたい。平川南氏のご教示によれば、本木簡は郡津の財源として（郡家から）割り当てられた出挙本稻を郡津が運用した際に作成された木簡であり、郡家所在地は別の地に求めるべきだという。

石川県埋蔵文化財情報

第4号

発行日 2000(平成12)年8月31日

発行者 財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 (株)橋本確文堂
